

賜はり、憐れずして福音の奥義を示し、語るべき所を憐れず語り得るやうに、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。  
 愛する兄弟、主に在りて忠實なる役者テキコ、我が情況わが爲す所のことを、具に汝らに知らせん。われ彼を遣すは、我が事を汝らに知らせて、汝らの心を慰めしめん爲なり。

願はくは父なる神および主イエス・キリストより賜ふ平安と、信仰に伴へる愛と、兄弟たちに在らんことを。願はくは朽ちぬ愛をもて我らの主イエス・キリストを愛する凡ての者に御恵あらんことを。

エペソ人への書 をはり

ピリピ人への書

キリスト・イエスの僕たる我ら、パウロとテモテと、書をピリピに在るキリスト・イエスに在る凡ての聖徒、および監督たちと執事たちとに贈る。願はくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。  
 われ汝らを憶ふごとくに、我が神に感謝し、常に汝ら衆のために、願のつどつど喜びて願をなす。是なんぢら初の日より今に至るまで、福音を弘むることに與るが故なり。我は汝らの衷に善き業を始め給ひし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信す。わが斯くも汝ら衆を思ふは當然の事なり、我が縲紲にある時にも、福音を辨明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共に恩恵に與るによりて、我が心にあればなり。我いかにキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を戀ひ慕ふか、その證をなし給ふ者は神なり。我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟とによりて彌が上にも増し加はり、善惡を辨へ知り、キリストの日に至るまで潔くして置くことなく、イエス・キリストによる義の

神の榮光と譽とを顯さん事を。兄弟よ、我はわが身にありし事の反つて福音の進歩の助となりしを汝らが知らんことを欲するなり。即ち我が縲紲のキリストの爲なることは、近衛の全營にも、他の凡ての人にも願れ、かつ兄弟のうちの多くの者は、わが縲紲によりて主を信する心を厚くし、懼るる事なく、ますます勇みて神の言を語るに至れり。或者は嫉妬と分争とによりてキリストを宣傳へ、あるものは善き心によりて之を宣傳ふ。これは福音を辨明するために我が立てられたることを知り、愛によりてキリストを宣傳へ、かれは我が縲紲に患難を加へんと思ひ、誠意によらず、徒黨によりて之を宣ぶ。さらば如何、外貌にもあれ、眞にもあれ、孰も宜ぶる所はキリストなれば、我これを喜ぶ、また之を喜ばん。そは此のこの汝らの祈とイエス・キリストの御靈の賜物とによりて、我が教となるべきを知ればなり。これは我が何事をも恥ぢずして、今も常のごとく聊かも臆することなく、生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給はんことを切に願ひ、また望むところに適へるなり。我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。されど

若し肉體にて生くる事わが勤勞の果となるならば、孰を選ぶべきか、我これを知らず。我はこの二つの間に介まられたり。わが願は世を去りてキリストと偕に居らんことなり、これ遂に勝るなり。されど我なほ肉體に留るは汝らの爲に必要なり。我これを確信する故に、なほ存へて汝らの信仰の進歩と喜悅とのために、汝等すべての者と偕に留らんことを知る。これは我が再び汝らに到ることにより、汝らキリスト・イエスに在りて我にかかはる誇を増さん爲なり。汝等ただキリストの福音に相應しく日を過せ、さらば我が往きて汝らを見るも、離れぬて汝らの事をきくも、汝らが靈を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦ひ、凡ての事において逆ふ者に驚かされぬを知ることを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡の兆、なんぢらには救の兆にて、此は神より出づるなり。汝等はキリストのために營に彼を信する事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜はりたればなり。汝らが遺ふ戦闘は、曩に我の上に見しところ、今また我に就きて聞くと同様に同じ。

念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思ふことを一つにして、我が喜悅を充しめよ。何事にまれ、徒黨また虚榮のためにすな、おのおの謙遜をもて互に人を己に勝れりとせよ。おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の貌にて居給ひしが、神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反つて己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給へり。この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜ひたり。これ天に在るもの、地に在るもの、地の下に在るもの、悉くイエスの名によりて膝を屈め、且もろもろの舌の「イエス・キリストは主なり」と言ひあらはして、榮光を父なる神に歸せん爲なり。

されば我が愛する者よ、なんぢら常に服ひしごとく、我が居る時のみならず、我が居らぬ今もますます服ひ、畏れ戰きて己が教を全うせよ。神は御意を成さんために汝らの衷にはたらし、汝等をして志望をたて、業を行はしめ給へばなり。なんぢら咳かず疑はずして、凡ての事をおこなへ。是なんぢら責むべき所なく素直に

して、此の曲れる邪惡なる時代に在りて神の瑕なき子とならん爲なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。かくて我が走りしところ勞せしところ空しからず、キリストの日にわれ誇ることを得ん。さらば汝らの信仰の供物と祭とに加へて、我が血を灌ぐとも我は喜ばん、なんぢら衆と共に喜ばん。かく汝等もよろこべ、我とともに喜べ。

彼は實に病にかかりて死ぬばかりなりしが、神は彼を憐みたまへり、嘗に彼のみならず、我をも憐み、憂に憂を重ねしめ給はざりき。この故に急ぎて彼を遣す、なんぢらが再び彼を見て喜ばん爲なり。又わが憂を少うせん爲なり。されば汝ら主に在りて歡喜を盡して彼を迎へ、かつ斯くのごとき人を尊べ。彼は汝らが我を助くるに當り、汝らの居らぬを補はんとて、己が生命を賭け、キリストの事業のために死ぬばかりになりたればなり。

終に言はん、我が兄弟よ、なんぢら主に在りて喜べ。なんぢらに同じことを書きおくるは、我に煩はしきことなく、汝等には安然なり。

七 責むべき所なかりし者なり。されど義に我が益たりし事は  
 八 キリストのために損と思ふに至れり。然り、我はわが  
 九 主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡て  
 一〇 の物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せし  
 一一 が、之を塵芥のごとく思ふ。これキリストを獲、かつ  
 一二 律法による己が義ならて、唯キリストを信する信仰によ  
 一三 る義すなはち信仰に基きて神より賜はる義を保ち、キリ  
 一四 ストに在るを認められ、キリストとその復活の力とを  
 一五 知り、又その死に効ひて彼の苦難にあづかり、如何にも  
 一六 して死人の中より甦へることを得んが爲なり。われ既に  
 一七 取れり、既に全うせられたりと言ふにあらず、唯これを  
 一八 捉へんとて追ひ求む。キリストは之を得させんとて我を  
 一九 捉へたまへり。兄弟よ、われは既に捉へたりと思はず、  
 二〇 唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに  
 二一 向ひて勵み、標準を指して進み、神のキリスト・イエス  
 二二 に由りて上に召したまふ召にかかはる褒美を得んとて  
 二三 之を追ひ求む。されば我等のうち成人したる者は、みな  
 二四 スくのごとき思を懐くべし、汝等もし何事にて異なる  
 二五 る思を懐き居らば、神これをも示し給はん。ただ我等は  
 二六 その至れる所に隨ひて歩むべし。

一七 兄弟よ、なんぢら諸共に我に效ふものとなれ、且な  
 一八 んぢらの模範となる我らに循ひて歩むものを觀よ。そは  
 一九 我しばし汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、  
 二〇 キリストの十字架に敵して歩む者おほければなり。彼ら  
 二一 の終は滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光榮と  
 二二 なし、ただ地の事のみを念ふ。されど我らの國籍は天に  
 二三 在り、我らは主イエス・キリストの教主として其の處よ  
 二四 り來りたまふを待つ。彼は萬物を己に服はせ得る能力に  
 二五 よりて、我らの卑しき狀の體を化へて、己が榮光の體に  
 二六 象らせ給はん。

一 この故に我が愛するところ慕ふところの  
 二 兄弟、われの喜悅われの冠冕たる愛する者よ、斯くのご  
 三 とく主にありて堅く立て。

一 我ユオデヤに勤めセントケに勤む、主にありて心  
 二 を同じうせんことを。また眞實に我と腕を共にする者  
 三 よ、なんぢに求む。この二人の女を助けよ。彼らはクレ  
 四 メンス其のほか生命の書に名を録されたる我が同勞者と  
 五 同じく、福音のために我とともに勤めたり。

一 汝ら常に主にありて喜べ、我また言ふ、なんぢら  
 二 喜べ。凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ。主は近し。

六 何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとく祈をなし、願をな  
 七 し、感謝して汝らの求を神に告げよ。さらば凡て人の  
 八 思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・  
 九 イエスによりて守らん。

一 終に言はん、兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊ぶべ  
 二 きこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべ  
 三 きこと、凡そ令聞あること、如何なる徳いかなる譽にて  
 四 も、汝等これを念へ。なんぢら我に學びしところ、受け  
 五 しところ、聞きしところ、見し所を皆おこなへ、さらば  
 六 平和の神なんぢらと偕に在らん。

一 汝らが我を思ふ心の今また萌したるを、われ主に  
 二 ありて甚く喜ぶ。汝らは固より我を思ひあたるなれど、  
 三 機を得ざりしなり。われ窮乏によりて之を言ふにあら  
 四 ず、我は如何なる狀に居るとも、足ることを學びたれば  
 五 なり。我は卑賤に在る道を知り、富に在る道を知る。ま  
 六 た飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏し  
 七 き事にも、一切の秘訣を得たり。我を強くし給ふ者によ  
 八 りて、凡ての事をなし得るなり。されど汝らが我が患難  
 九 に與りしは善き事なり。ビリビ人よ、汝らも知る、わが  
 一〇 汝らに福音を傳ふる始、マケドニヤを離れ去るとき、

一六 授受して我が事に與りしは、汝等のみにして、他の教會  
 一七 には無かりき。汝らは我がテサロニケに居りし時に、  
 一八 一度ならず二度までも我が窮乏に物贈れり。これ贈物を  
 一九 求むるにあらず、唯なんぢらの益となる實の業からん  
 二〇 ことを求むるなり。我には凡ての物そなはりて餘あり、  
 二一 既にエプロデトより汝らの贈物を受けたれば、飽き足  
 二二 りり。これは馨しき香にして神の奉け給ふところ、喜び  
 二三 たまふ所の供物なり。かくてわが神は己の富に隨ひ、  
 二四 キリスト・イエスによりて汝らの凡ての窮乏を榮光の  
 二五 うちに補ひ給はん。願はくは榮光世々限りなく、我らの  
 二六 父なる神にあれ、アアメン。

一 汝らキリスト・イエスに在りて聖徒おののに安否  
 二 を問へ。我と偕にある兄弟たち汝らに安否を問ふ。凡て  
 三 の聖徒、殊にカイザルの家のもの、汝らに安否を問ふ。  
 四 願はくは主イエス・キリストの恩恵、なんぢらの靈  
 五 と偕に在らんことを。

一 ビリビ人への書 をはり

コロサイ人への書

一 神の御心によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ及び兄弟テモテ、書をコロサイに居る聖徒、キリストにありて忠實なる兄弟に贈る。願はくは我らの父なる神より賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。

二 我らは常に汝らの爲に祈りて、我らの主イエス・キリストの父なる神に感謝す。これキリスト・イエスを信する汝らの信仰と、凡ての聖徒に對する汝らの愛とにつきて聞きたればなり。かく聖徒を愛するは、汝らの爲に天に善へあるものを望むに因る。この望のことは汝らに及べる福音の眞の言によりて汝らが會て聞きし所なり。この福音は全世界にも及び、果を結びて増々大になれり。汝らが神の恩恵をききて眞に之を知りし日より、汝らの中に然りしが如し。汝らが、我らと共に僕たる愛するエパfrasより學びたるは、この福音なり。彼は汝らの爲にキリストの忠實なる役者にして、汝らが御靈によりて僕ける愛を我らに告げたり。

三 この故に我らこの事を聞きし日より、汝等のために

絶えず祈りかつ求むるは、汝ら靈のよろもろの智慧と顯悟とをもて神の御意を具に知り、凡てのこと主を悦ばせんが爲に、その御意に従ひて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよいよ神を知り、また神の榮光の勢威に隨ひて賜ふもろの力によりて強くなり、凡ての事よろこびて忍び、かつ耐へ、而して我らを光にある聖徒の嗣業に與るに足る者とし給ひし父に感謝せん事なり。

四 父は我らを暗黒の權威より救ひ出して、その愛しき給ふ御子の國に遷したまへり。我らは御子に在りて贖罪すなはち罪の赦を得るなり。彼は見得べからざる神の像にして、萬の造られし物の先に生れ給へる者なり。萬の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位、あるひは支配あるひは政治、あるひは權威、みな彼によりて造られ、彼の爲に造られたればなり。彼は萬の物より先にあり、萬の物は彼によりて保つことを得るなり。而して彼はその體なる教會の首なり、彼は始にして死人の中より最先に生れ給ひし者なり。これ凡ての事に就きて長とならん爲なり。神は凡ての満ち足れる徳を彼に宿して、その十字架の血によりて平和をなし、或は地にあるもの、

或は天にあるもの、萬の物をして己と和がしむるを善しとし給ひたればなり。汝等もとは惡しき業を行ひて神に遠ざかり、心にて其の敵となりしが、今は神キリストの内の體をもて、其の死により汝等をして己と和がしめ、深く瑕なく責むべき所なくして、己の前に立たしめんとし給ふなり。汝等もし信仰に止り、之に基きて堅く立ち、福音の望より移らずば、斯くせらるることを得べし。此の福音は汝らの聞きし所、また天の下なる凡ての造られし物に宣傳へられたるものにして、我パウロはその役者となれり。

二 われ今なんぢらの爲に受くる苦難を喜び、又キリストの體なる教會のために、我が身をもてキリストの患難の缺けたるを補ふ。われ神より汝等のために與へられたる職に隨ひて教會の役者となれり。これ神の言すなはち歴世歴代かくれて、今神の聖徒に顯れたる奧義を宣傳へんとてなり。神は聖徒をして異邦人の中なるこの奧義の榮光の富の如何ばかりなるかを知らしめんと欲し給へり。此の奧義は汝らの中に在すキリストにして榮光の望なり。我らは此のキリストを傳へ、智慧を盡して凡ての人を訓戒し、凡ての人を教ふ。これ凡ての

人をしてキリストに在り、全くなりて神の前に立つことを得しめん爲なり。われ之がために我が裏に能力をもて働き給ふものの活動にしたがひ、力を盡して勞するなり。

三 我なんぢら及びラオデキヤに居る人々、その他すべて我が肉體の顔をまだ見ぬ人のために、如何に苦心するかを汝らの知らんことを欲す。かく苦心するは、彼らが心慰められ、愛をもて相列り、全き顯悟の凡ての富を得て、神の奧義なるキリストを知らん爲なり。キリストには智慧と知識との凡ての寶藏あり。我これを言ふは、巧なる言をもて人の汝らを欺くこと勿らん爲なり。われ肉體にては汝らと離れ居れど、靈にては汝らと偕に居りて喜び、また汝らの秩序あるとキリストに對する信仰の堅きとを見るなり。

四 汝らキリスト・イエスを主として受けたるにより、其のごとく彼に在りて歩め。また彼に根ざしてその上に建てられ、かつ教へられし如く信仰を堅くし、溢るるばかり感謝せよ。

五 なんぢら心すべし、恐らくはキリストに従はずして人の言傳と世の小學とに従ひ、人を惑す虚しき哲學を

九 もて汝らを奪ひ去る者あらん。それ神の満ち足れる徳は  
 一〇 ことごとく形體をなしてキリストに宿れり。汝らは彼に  
 一 在りて満ち足れるなり。彼は凡ての政治と權威との首な  
 二 り。汝らまた彼に在りて手をもてせざる割禮を受けた  
 三 り。即ち肉の體を脱ぎ去るものにして、キリストの割禮  
 四 なり。汝らバプテスマを受けしとき、彼とともに葬ら  
 五 れ、又かれを死人の中より甦へらせ給ひし神の活動を  
 六 信するによりて、彼と共に甦へらせられたり。汝ら前に  
 七 は諸般の咎と肉の割禮なきとに因りて死にたる者なりし  
 八 が、神は汝らを彼と共に生かし、我らの凡ての咎を赦  
 九 し、かつ我らを責むる規の證書、すなはち我らに逆ふ  
 一〇 證書を塗抹し、これを中間より取り去りて十字架に  
 一一 つけ、政治と權威とを擧げて之を公然に示し、十字架に  
 一二 よりて凱旋し給へり。  
 一三 然れば汝ら食物あるひは飲物につき、祭あるひは  
 一四 月朔あるひは安息日の事につきて、誰にも審かるな。此  
 一五 等はみな來らんとする者の影にして、其の本體はキリ  
 一六 ストに属けり。殊更に謙遜をよそほひ御使を拜する者  
 一七 に、汝らの衰美を奪はるな。かかる者は見し所のものに  
 一八 基き、肉の念に隨ひて徒らに誇り、首に屬くことを

せざるなり。全體は、この首によりて節々維々に助け  
 一 られ、相聯り、神の育にて生長するなり。  
 二 汝等もしキリストと共に死にて此の世の小學を離れ  
 三 しならば、何ぞなほ世に生ける者のごとく人の誠命と  
 四 教とに循ひて「捫るな、味ふな、觸るな」と云ふ規の下  
 五 に在るか。(此等はみな用ふれば盡くる物なり) これら  
 六 の誠命は、みづから定めたる禮拜と謙遜と身を惜まぬ事  
 七 とによりて智慧あるごとく見ゆれど、實は肉慾の放縱を  
 八 防ぐ力なし。  
 九 汝等もしキリストと共に甦へらせられし  
 一〇 ならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼處に在りて  
 一一 神の右に坐し給ふなり。汝ら上にあるものを念ひ、地に  
 一二 在るものを念ふな。汝らは死にたる者にして、其の生命  
 一三 はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの  
 一四 生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも之とともに  
 一五 榮光のうちに現れん。  
 一六 されば地にある肢體、すなはち淫行・汚穢・情慾・  
 一七 惡慾、また饜食を殺せ、饜食は偶像崇拜なり。神の怒は、  
 一八 これらの事によりて不従順の子らに來るなり。汝らも  
 一九 かかる人の中に日を送りし時は、これらの惡しき事に

八 歩めり。されど今は凡て此等のこと及び怒・憤恚・惡意  
 九 を棄て、謙と恥づべき言とを汝らの口より棄てよ。互に  
 一〇 虚言をいふな。汝らは既に舊き人とその行爲とを脱ぎ  
 一一 て、新しき人を著たればなり。この新しき人は、これを  
 一二 造り給ひしものの像に循ひ、いよいよ新になりて知識に  
 一三 至るなり。かくてギリシヤ人とユダヤ人、割禮と無割禮  
 一四 あるひは夷狄、スケテヤ人・奴隸・自主の別ある事なし、  
 一五 それキリストは萬の物なり、萬のものの中にあり。  
 一六 この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せら  
 一七 る者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著  
 一八 よ。また互に忍びあひ、若し人に責むべき事あらば互に  
 一九 恕せ、主の汝らを恕し給へる如く汝らも然すべし。凡て  
 二〇 此等のものの上に愛を加へよ、愛は徳を全うする帯な  
 二一 り。キリストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝  
 二二 らの召されて一體となりたるはこれが爲なり、汝ら感謝  
 二三 の心を懐け。キリストの言をして豊に汝らの衷に住まし  
 二四 め、凡ての智慧によりて、詩と讚美と靈の歌とをもて、  
 二五 互に教へ互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讚美  
 二六 せよ。また爲す所の凡ての事、あるひは言あるひは行爲、  
 二七 みな主イエスの名に頼りて爲し、彼によりて父なる神に

感謝せよ。  
 一 妻たる者よ、その夫に服へ、これ主にある者のなす  
 二 べき事なり。夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦をもて  
 三 之を待たふな。子たる者よ、凡ての事みな兩親に順へ、こ  
 四 れ主の喜びたまふ所なり。父たる者よ、汝らの子供を  
 五 怒らすな、或は落膽することあらん。僕たる者よ、凡て  
 六 の事みな肉につける主人にしたがへ、人を喜ばす者の  
 七 如く、ただ眼の前の事のみを勤めず、主を畏れ、眞心を  
 八 もて従へ。汝ら何事をなすにも人に事ふる如くせず、  
 九 主に事ふる如く心より行へ。汝らは主より報として副業  
 一〇 を受くることを知ればなり。汝らは主キリストに事ふる  
 一一 者なり。不義を行ふ者はその不義の報を受けん、主は  
 一二 偏り視給ふことなし。  
 一三 主人たる者よ、汝らも天に主あるを知れ  
 一四 ば、義と公平とをもて其の僕をあしらへ。  
 一五 汝ら感謝しつつ目を覺して祈を常にせよ。また我ら  
 一六 の爲にも祈りて、神の我らに御言を傳ふる門をひらき、  
 一七 我等をしてキリストの奧義を語らしめ、之を我が語る  
 一八 べき如く顯させ給はんことを願へ、我はこの奧義のため  
 一九 に繋かれたり、なんぢら機をうかがひ、外の人に對し

六 智慧をもて行へ。汝らの言は常に恵を用ひ、鹽にて味つけよ。然らば如何にして各人に答ふべきかを知らん。

七 愛する兄弟、忠實なる役者、主にありて我とともに僕たるテキコ、我がことを具に汝らに知らせん。われ殊に彼を汝らに遣すは、我らの事を知らしめ、又なんぢらの心を慰めしめん爲なり。汝らの中の一人、忠實なる愛する兄弟オネシモを彼と共につかはず。彼等この處の事を具に汝らに知らせん。

八 我と共に囚人となるアリストタルコ及びバルナバの従弟なるマルコ、汝らに安否を問ふ。此のマルコに就きては汝ら既に命を受けたり、彼もし汝らに到らば之を接けよ。またユストと云へるイエス汝らに安否を問ふ。割禮の者の中ただ此の三人のみ、神の國のために働く我が同業者にして我が慰安となりたる者なり。汝らの中の一人にてキリスト・イエスの僕なるエバフラス汝らに

安否を問ふ。彼は常に汝らの爲に力を盡して祈をなし、汝らが全くなり、凡て神の御意を確信して立たんことを願ふ。我かれが汝らとラオデキヤ及びヒエラポリスに在る者との爲に甚く心を勞することを證す。愛する醫者ルカ及びデマス汝らに安否を問ふ。汝らラオデキヤにある兄弟とスンバ及びその家にある教會とに安否を問へ。この書を汝らの中に讀みたらば、之をラオデキヤ人の教會にも讀ませ、汝等はまたラオデキヤより來る書を讀め。アルキボに言へ「主にありて受けし職を慎みて盡せ」と。

九 我パウロ手づから安否を問ふ。わが標識を記憶せよ。願はくは御恵なんぢらと借に在らんことを。

一〇 コロサイ人への書 をはり

テサロニケ人への前の書

一 パウロ、シルワノ、テモテ、書を父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教會に贈る。願はくは恩恵と平安と汝らに在らんことを。

二 われら祈のときに汝らを憶えて、常に汝ら衆人のために神に感謝す。これ汝らが信仰のはたらき、愛の勞苦、主イエス・キリストに對する望の忍耐を、我らの父なる神の前に絶えず念ふに因りてなり。神に愛せらるる兄弟よ、また汝らの選ばれたることを知るに因りてなり。それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみ由らず、能力と聖靈と大なる確信とに由れり。且われらが汝らの中にありて汝らの爲に如何なる行爲をなししかば、汝らの知る所なり。かくて汝らは大なる患難のうちにも、聖靈による喜悅をもて御言をうけ、我ら及び主に效ふ者となり、而してマケドニヤ及びアカヤに在る凡ての信者の模範となれり。それは主のことば汝等より出て、營にマケドニヤ及びアカヤに響きしのみならず、神に對する汝らの信仰のことは諸方に弘りたるなり。されば之に就きては何をも語るに及ばず。人々親しく我らが

汝らの中に入りし狀を告げ、また汝らが偶像を棄てて神に歸し、活ける眞の神に事へ、神の死人の中より起へらせ給ひし御子、すなはち我ら來らんとする怒より救ひ出すイエスの、天より降りたまふを待ち望むことを告ぐればなり。

一 兄弟よ、我らの汝らに到りしことの空しくらざりしは、汝ら自ら知る。前に我らは汝らの知ることく、ピリビにて苦難と侮辱とを受けたれど、我らの神に頼りて大なる紛争のうちに、憚らず神の福音を汝らに語れり。我らの勸は、迷より出て、汚穢より出て、詭計を用ひず、神に喜ばせられて福音を委ねられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を墮たまふ神を喜ばせ奉つらんとして語るなり。我らは汝らの知ることく何時にても諂諛の言を用ひず、事によせて慳貪をなさず（神これを證し給ふ）。キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らにも他の者にも人よりは譽を求めず、汝らの中にありて優しきこと、母の己が子を育てやしなふ如くなりき。かく我らは汝らを懇ひ慕ひ、なんぢらは我らの愛する者となりたれば、營に神の福音のみならず、我らの生命をも與へんと願へり。兄弟よ、

なんぢらは我らの勞と苦難とを記憶す、われらは汝らの中の一をも累はすまじとて、夜晝工をなし、勞しつつ福音を宣傳へたり。また信したる汝等にむかひて、如何に深く正しく責むべき所なく行ひしかば、汝らも證し神も證し給ふなり。汝らは知る、我が父のその子に對するごとく各人に對し、御國と榮光とに招きたまふ神の心に適ひて歩むべきことを勧め、また勵まし、また諭したるを。

かくてなほ我ら神に感謝して已まざるは、汝らが神の言を我らより聞きし時、これを人の言とせず、神の言として受けし事なり。これは誠に神の言にして、汝ら信する者のうちに働くなり。兄弟よ、汝らはユダヤに於けるキリスト・イエスにある神の教會に效ふ者となれり、彼らのユダヤ人に苦しめられたる如く、汝らも己が國人に苦しめられたるなり。ユダヤ人は主イエスをも預言者をも殺し、我らを追ひ出し、我が異邦人に語りて救を得させんとするを拒み、神を悦ばせず、かつ萬民に違ひ、かくして常に己が罪を充すなり。而して神の怒はかれらに臨みてその極に至れり。

兄弟よ、われら心は離れねど、顔にて暫時なんぢら

と離れ居れば、汝らの顔を見んことを愈々切に願ひて、(我パウロは一度ならず再度までも)なんぢらに到らんと爲たれど、サタンに妨げられたり。我らの主イエスの來り給ふとき、御前における我らの希望、また喜悅、また誇の冠冕は誰ぞ、汝らならずや。實に汝らは我らの光榮、我らの喜悅なり。

この故に、もはや忍ぶこと能はず、我等のみアテネに留ることに決し、キリストの福音において神の役者たる我らの兄弟テモテを汝らに遣せり。これは汝らを堅うし、また信仰につきて勧め、この患難によりて動かさるる者の無からん爲なり。患難に遭ふことの我らに定りたるは、汝等みづから知る所なり。我らが患難に遭ふべきことは、汝らと偕に在りしとき預じめ告げたるが、今果して汝らの知ることく然か成れり。この故に最早われ忍ぶこと能はず、試むる者の汝らを試みて、我らの勞の空しくならんことを恐れ、なんぢらの信仰を知らんとて人を遣せり。然るに今テモテ汝らより歸りて、汝らの信仰と愛とにつきて喜ばしき音信を聞かせ、又なんぢら常に我らを戀るに念ひ、我らに逢はんことを切に望み居るは、我らが汝らに逢はんことを望むに

等しと告げたるによりて、兄弟よ、われらは諸般の苦難と患難との中にも、汝らの信仰によりて慰安を得たり。汝等もし主に在りて堅く立たば我らは生くるなり。汝等につきて我らの神の前によろこぶ大なる喜悅のため、如何なる感謝をか神に獻ぐべき。我らは夜晝祈りて、汝らの顔を見んこと、汝らの信仰の足らぬ所を補はんことを切に願ふ。

願はくは我らの父なる神みづからと我らの主なるイエスと、我らを導きて汝らに到らせ給はんことを願はくは主、なんぢら相互の愛および凡ての人に對する愛を増し、かつ豊にして、我らが汝らを受する如くならしめ、かくして汝らの心を堅うし、我らの主イエスの、凡ての聖徒と偕に來りたまふ時、われらの父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給はんことを。

されば兄弟よ、終に我ら主イエスによりて汝らに求め、かつ勸む。なんぢら如何に歩みて神を悦ばすべきかを我等より學びし如く、また歩みをする如くに増々進まんことを。我らが主イエスに頼りて如何なる命令を與へしかば、汝らの知る所なり。それ神の御旨は、なんぢらの潔からんことにして、即ち淫行をつつしみ、

各人おのが妻を得て、潔くかつ貴くし、神を知らぬ異邦人のごとく情慾を放縱にすまじきを知り、かかる事によりて兄弟を欺き、また掠めざらんことなり。凡て此等のことを行ふ者に主の報し給ふは、わが既に汝らに告げ、かつ證せしごとし。神の我らを招き給ひしは、汚穢を行はしめん爲にあらざ、潔からしめん爲なり。この故に之を拒む者は人を拒むにあらざ、汝らに聖愛を與へたまふ神を拒むなり。

兄弟の愛につきては汝らに書きおくるに及ばず。汝らは互に相愛する事を親しく神に教へられ、また既にマケドニヤ全國に在るすべての兄弟を受するに因りてなり。されど兄弟よ、なんぢらに勸む。ますます之を行ひ、我らが前に命ぜしごとく力めて安靜にし、己の業をなし、手づから働け。これ外の人に對して正しく行ひ、また自ら乏しきことなからん爲なり。

兄弟よ、既に眠れる者のことに就きては、汝らの知らざるを好まず、希望なき他の人のごとく歎かざらん爲なり。我らの信する如く、イエスもし死にて甦へり給ひしならば、神はイエスによりて眠に就きたる者を、イエスと共に連れきたり給ふべきなり。われら主の言を

二六 もて汝らに言はん、我等のうち主の來りたまふ時に至る  
 二七 まで生きて存れる者は、既に眠れる者に決して先だた  
 二八 じ。それ主は、號令と御使の長の聲と神のラッパと共  
 二九 に、みづから天より降り給はん。その時キリストにある  
 三〇 死人まづ甦へり、後に生きて存れる我らは、彼らと共に  
 三一 雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎へ、斯くていつ  
 三二 までも主と偕に居るべし。されば此等の言をもて互に  
 三三 相慰めよ。

三五 兄弟よ、時と期とに就きては汝らに書き  
 三六 おくるに及ばず。汝らは主の日の盜人の夜きたるが如く  
 三七 に来ることを、自ら詳細に知ればなり。人々の平和  
 三八 無事なりと言ふほどに、滅亡にはかに彼らの上に来ら  
 三九 ん、狂める婦に産の苦痛の臨むがごとし、必ず遁るこ  
 四〇 とを得じ。されど兄弟よ、汝らは暗に居らざれば、盗人  
 四一 の來るごとく其の日なんぢらに追及くことなし。それ  
 四二 汝等はみな光の子ども晝の子供なり。我らは夜に屬く者  
 四三 にあらず、暗に屬く者にあらず。されば他の人のごとく  
 四四 眠るべからず、目を覺して慎むべし。眠る者は夜眠り、  
 四五 酒に酔ふ者は夜酔ふなり。されど我らは晝に屬く者なれ  
 四六 ば、信仰と愛との胸當を着け、救の望の兜をかむりて

三九 慎むべし。それ神は我らを怒に遣はせんとあらず。主  
 四〇 イエス・キリストに頼りて救を得せんと定め給へるな  
 四一 り。主の我等のために死に給へるは、我等をして寐め  
 四二 をるとも眠りをるとも己と共に生くることを得しめん爲  
 四三 なり。此の故に互に勸めて各自の徳を建つべし。これ  
 四四 汝らが常に爲す所なり。

四五 兄弟よ、汝らに求む。なんぢらの中に勞し、主にあ  
 四六 りて汝らを治め、汝らを訓戒する者を重んじ、その勤勞  
 四七 によりて厚く之を愛し敬へ。また互に相和ぐべし。兄弟  
 四八 よ、汝らに勸む、妄なる者を訓戒し、落膽せし者を勵ま  
 四九 し、弱き者を扶け、凡ての人に對して寛容なれ。誰も人  
 五〇 に對し惡をもて惡に報いぬやう慎め。ただ相互に、また  
 五一 凡ての人に對して常に善を迫り求めよ。常に喜べ、絶え  
 五二 ず祈れ。凡てのこと感謝せよ。これキリスト・イエスに  
 五三 由りて神の汝らに求め給ふ所なり。御書を煥すな。預言  
 五四 を度すな。凡てのこと試みて善きものを守り、凡て惡の  
 五五 類に遠ざかれ。  
 五六 願はくは平和の神、みづから汝らを全く潔くし、  
 五七 汝らの靈と心と體とを全く守りて、我らの主イエス・  
 五八 キリストの來り給ふとき責むべき所なからしめ給はん

二四 事を。汝らを召したまふ者は眞實なれば、之を成し給ふ  
 二五 べし。

二六 兄弟よ、我らのために祈れ。  
 二七 きよき接吻をもて凡ての兄弟の安否を問へ。主に  
 二八 よりて汝らに命ず、この書を凡ての兄弟に讀み聞かせよ。

二八 願はくは主イエス・キリストの恩恵、なんぢらと偕  
 二九 に在らんことを。

三〇 テサロニケ人への前の書 をはり



テサロニケ人への後の書

第一章

パウロ、シルワノ、テモテ、書を我らの父なる神および主イエス・キリストに在るテサロニケ人の教會に贈る。願はくは父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。兄弟よ、われら汝等につきて常に神に感謝せざるを得ず、これ當然の事なり。それは汝らの信仰おほいに加はり、各自みな互の愛を厚くしたればなり。されば我らは、汝らが忍べる凡ての迫害と患難との中にありて保ちたる忍耐と信仰とを、神の諸教會の間に誇る。これ神の正しき審判の兆にして、汝らが神の國に相應しき者とならん爲なり。今その御國のために苦難を受く。汝らに患難を加ふる者に患難をもて報い、患難を受くる汝らに、我らと共に安息をもて報い給ふは、神の正しき事なり。即ち主イエス始の中にその能力の御使たちと共に天より顯れ、神を知らぬ者と我らの主イエスの福音に服はぬ者と共に報をなし給ふとき、かかる者どもは主の顔とその能力の榮光とを離れて、限りなき滅亡の刑罰を受くべし。その時は主おのが聖徒によりて崇められ、凡ての

信する者（なんぢらも我らの證を信したる者なり）によりて讃められんとて來りたまふ日なり。これに就きて我ら常に汝らのために祈るは、我らの神の汝等をして召に適ふ者となし、能力をもて汝らの凡て善に就ける願と信仰の業とを成就せしめ給はんことなり。これ我らの神および主イエス・キリストの恵によりて、我らの主イエスの御名の汝らの中に崇められ、又なんぢらも彼に在りて崇められん爲なり。

兄弟よ、我らの主イエス・キリストの來り給ふこと、或われらが主の許に集ふことに就きては、汝らに求む。或は靈により、或は言により、或は我等より出でし如き書により、主の日すてに來れりとて、容易く心を動かしかつ驚かさらん事を、誰が如何にすとも、それに欺かるな。その日の前に背教の事あり、不法の人すなはち滅亡の子あらはれざるを得ず、彼はすべて神と稱ふる者および人の拜む者に逆ひ、此等よりも己を高くし、遂に神の聖所に坐し己を神として見する者なり。われ汝らと偕に在りし時、これらの事を告げしを汝ら憶えぬか。彼をして己が時に至りて顯れしめんために、彼を阻めざる者を汝らは知る。不法の秘密は既に働けり、

然れど此はただ阻めざる者の除かるるまでなり。かくて其のとき不法の者あらはれん、而して主イエス御口の氣息をもて彼を殺し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給はん。彼はサタンの活動に従ひて來り、もろもろの虚偽なる力と徴と不思議と、不義のもろもろの詭惑とを行ひて、亡ぶる者どもに向はん、彼らは眞理を愛する愛を受けずして、救はるることを爲さればなり。この故に神は、彼らが虚偽を信ぜんために惑をその中に働かせ給ふ。これ眞理を信ぜず不義を喜ぶ者の、みな審かれん爲なり。

されど主に愛せらるる兄弟よ、われら常に汝等のために神に感謝せざるを得ず。神は御靈によれる潔と眞理に對する信仰とをもて、始より汝らを救に運び、また我らの主イエス・キリストの榮光を得させんとて、我らの福音をもて汝らを招き給へばなり。されば兄弟よ、堅く立ちて我らの言あるひは書に由りて教へられたる傳を守れ。我らの主イエス・キリスト、及び我らを愛し恩恵をもて永遠の慰安と善き望とを與へ給ふ我らの父なる神、願はくは汝らの心を慰めて、凡ての善き業と言とに

堅うし給はんことを。終に言はん、兄弟よ、我らの爲に祈れ、主の言の汝らの中における如く、疾く弘りて崇められん事と、われらが無法なる惡人より救はれんことを祈れ。そは人みな信仰あるに非ざればなり。されど神は眞實なれば、汝らを堅うし汝らを護りて、惡しき者より救ひ給はん。かくて我らの命ずることを汝らが今も行ひ、後もまた行はんことを主によりて信するなり。願はくは主なんぢらの心を、神の愛とキリストの忍耐とに導き給はんことを。

兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名によりて汝らに命ず、我等より受けし傳に従はずして妄に歩む凡ての兄弟に遠ざかれ。如何にして我らに效ふべきかは、汝らの自ら知る所なり。我らは汝らの中にありて妄なる事をせず、價なしに人のパンを食せず、反つて汝等のうち一人をも果はさざらんために勞と苦難とをもて、夜晝はたらけり。これは權利なき故にあらす、汝等をして我らに效はしめん爲に、自ら模範となりたるなり。また汝らと偕に在りしとき、人もし働くことを欲せずば食すべからずと命じたりき。聞く所によれば、汝等のうちに

二 妄に歩みて何の業をもなさず、徒事にたづさはる者あり  
 三 我ら斯くのごとき人に、靜に業をなして己のパンを  
 四 食せんことを、我らの主イエス・キリストに由りて命じ  
 五 かつ勤む。兄弟よ、なんぢら善を行ひて倦むな。もし  
 六 此の書にいへる我らの言に従はぬ者あらば、その人を認  
 七 めて交ることをすな。彼みづから恥ぢんためなり。然れ  
 八 ど彼を仇の如くせず、兄弟として訓戒せよ。  
 九 願はくは平和の主、みづから何時にても凡ての事に

一〇 平和を汝らに與へ給はんことを。願はくは主なんぢら凡  
 一一 の者と偕に在さん事を。  
 一二 我パウロ手づから筆を執りて汝らの安否を問ふ。こ  
 一三 れ我がすべての書の記事なり。わが書けるものは斯くの  
 一四 如し。願はくは我らの主イエス・キリストの恩恵なんぢ  
 一五 ら凡ての者と偕ならんことを。  
 一六 テサロニケ人への後の書 をはり

テモテへの前の書

一 我らの教主なる神と我らの希望なるキリ  
 二 スト・イエスとの命によりて、キリスト・イエスの使徒  
 三 とされるパウロ、書を信仰に由りて我が眞實の子たる  
 四 テモテに贈る。願はくは父なる神および我らの主キリ  
 五 スト・イエスより賜ふ恩恵と憐憫と平安と、汝に在らん  
 六 ことを。  
 七 我マケドニヤに往きしとき汝に勧めし如く、汝なほ  
 八 エペソに留り、ある人々に命じて、異なる教を傳ふるこ  
 九 となく、昔話と窮りなき系圖とに心を寄する事なから  
 一〇 しめよ。此等のことは信仰に基ける神の經綸の助となら  
 一一 ず、反つて議論を生ずるなり。命令の目的は、清き心と  
 一二 善き良心と偽りなき信仰とより出づる愛にあり。ある  
 一三 人々これらの事より外れて虚しき物語にうつり、律法の  
 一四 教師たらんと欲して、反つて其の言ふ所その確證する所  
 一五 を自ら悟らず。律法は道理に循ひて之を用ひば善き者な  
 一六 るを我らは知る。律法を用ふる者は、律法の正しき人の  
 一七 爲にあらずして、不法のもの、服従せぬもの、敬虔なら  
 一八 ぬもの、罪あるもの、潔からぬもの、妄なるもの、父を

一 撃つもの、母を撃つもの、人を殺す者、淫行のもの、  
 二 男色を行ふもの、人を誘拐すもの、偽る者、いつはり  
 三 善よ者の爲、そのほか健全なる教に違ふ凡ての事のため  
 四 に設けられたるを知るべし。これは我に委ね給ひし幸福  
 五 なる神の榮光の福音に循へるなり。  
 六 我に能力を賜ふ我らの主キリスト・イエスに感謝  
 七 す。われ曩には潰す者、迫害する者、暴行の者なりし  
 八 に、我を忠實なる者として、この職に任じ給ひたればな  
 九 り。われ信ぜぬ時に知らずして行ひし故に憐憫を蒙れ  
 一〇 る信仰および愛とともに溢るるばかり彌増せり。「キリ  
 一一 スト・イエス罪人を救はん爲に世に來り給へり」とは、  
 一二 信すべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中に我は  
 一三 首なり。然るに我が憐憫を蒙りしは、キリスト・イエス  
 一四 我を首に寛容をことごとく蒙りし、この後、かれを信  
 一五 じて永遠の生命を受けんとする者の模範となし給はん  
 一六 爲なり。願はくは萬世の王、すなはち朽ちず見えざる  
 一七 唯一の神に、世々限りなく尊貴と榮光とあらん事を、  
 一八 アアメン。  
 一九 わが子テモテよ、汝を指したる凡ての預言に循ひて、

我この命令を汝に委ぬ。これ汝がその預言により、信仰と善き良心とを保ちて、善き戦闘を戦はん爲なり。或人よき良心を棄てて信仰の破船をなせり。その中にヒメナオとアレキサンデルとあり、彼らに漬すまじきことを學ばせんとて、我これをサタンに付せり。

【第二章】 さればわれ第一に勸む、凡ての人のため、王たち及び凡て権を有つもの爲に、おのおの願・祈禱・とりなし・感謝せよ。是われら敬虔と謹嚴とを盡して、安らかに靜に一生を過さん爲なり。斯くするは美事にして、我らの教主なる神の御意に適ふことなり。神は凡ての人の救はれて、眞理を悟るに至らんことを欲し給ふ。それ神は唯一なり、また神と人との間の中保も唯一にして、人なるキリスト・イエスはなり。彼は己を與へて凡ての人の贖價となり給へり、時至りて證せらる。我これが爲に立てられて宣傳者となり、使徒となり（我は眞を言ひて虚偽を言はず）また信仰と眞とをもて異邦人を教ふる教師となれり。

【第三章】 この故にわれ望む、男は怒らず争はず、何れの處にても潔き手をあげて祈らんことを。また女は恥を知り、慎みて宜しきに合ふ衣にて己を飾り、編みたる頭髮と

金と眞珠と價貴き衣とを飾とせず、善き業をもて飾とせんことを。これ神を敬はんと公言する女に適へる事なり。女は凡てのこと従順にして靜に道を學ぶべし。われ女の教ふることに男の上に權を執ることを許さず、ただ靜にすべし。それアダムは前に造られ、エバは後に造られたり。アダムは惑されず、女は惑されて罪に陥りたるなり。然れど女もし慎みて信仰と愛と潔とに居らば、子を生むことに因りて救はるべし。

【第四章】 「人もし監督の職を慕はば、これよき業を願ふなり」とは、信すべき言なり。それ監督は責むべき所なく、一人の妻の夫にして、自ら制し、慎み、品行正しく、旅人を懇ろに待し、能く教へ、酒を嗜まず、人を打たず、寛容にし、争はず、金を食はず、善く己が家を理め、謹嚴にして子女を従順ならしむる者たるべし。（人もし己が家を理むることを知らずば、争てか神の教會を扱ふことを得ん）また新に教に入りし者ならざるべし。恐らくは傲慢になりて惡魔と同じ審判を受くるに至らん。外の人にも令聞ある者たるべし。然らずば誹謗と惡魔の網とに陥らん。執事もまた同じ謹嚴にして、言を二つにせず、大酒せず、恥づべき利をとらず、

【第五章】 潔き良心をもて信仰の奥義を保つものたるべし。まづ彼らを試みて責むべき所なくば、執事の職に任ずべし。女もまた謹嚴にして人を誘はず、自ら制して凡ての事に忠實なる者たるべし。執事は一人の妻の夫にして、子女と己が家とを善く理むる者たるべし。善く執事の職をなす者は良き地位を得、かつキリスト・イエスに於ける信仰につきて大なる勇氣を得るなり。

【第六章】 われ速かに汝に往かんことを望めど、今これらの事を書きおくるは、若し遅からんとき、人の如何に神の家に行ふべきかを汝に知らしめん爲なり。神の家は活ける神の教會なり、眞理の柱、眞理の基なり。實に大なるかな、敬虔の奥義

「キリストは内にて顯され、

靈にて義とせられ、

御使たちに見られ、

もろもろの國人に宣傳へられ、

世に信ぜられ、

榮光のうちに上げられ給へり」

【第七章】 されど御靈あきらかに、或人の後の日に及びて、惑す靈と惡鬼の教とに心を寄せて、信仰より

【第八章】 離れんことを言ひ給ふ。これ虚偽をいふ者の偽善に由りてなり。彼らは良心を燒金にて熔かれ、婚姻するを禁じ、食を斷つことを命ず。されど食は神の造り給へる物にして、信どかつ眞理を知る者の感謝して受くべきものなり。神の造り給へる物はみな善し、感謝して受くる時は棄つべき物なし。そは神の言と祈とによりて潔めらるるなり。

【第九章】 汝もし此等のことを兄弟に教へば、信仰と汝の從ひたる善き教との言にて養はるる所のキリスト・イエスの良き役者たるべし。されど妄なる談と老いたる女の昔話を捨てよ、また自ら敬虔を修行せよ。體の修行もいささは益あれど、敬虔は今の生命と後の生命との約束を保ちて凡ての事に益あり。これ信すべく正しく受くべき言なり。我らは之がために勞しかつ苦心す。そは我ら凡ての人、殊に信する者の教主なる活ける神に望を置けばなり。

【第十章】 汝これらの事を命じかつ教へよ。なんぢ年若きをもて人に輕んぜらるな。反つて言にも、行狀にも、愛にも、信仰にも、潔にも、信者の模範となれ。わが到るまで、讀むこと勸むること教ふる事に心を用ひよ。なんぢ

一五 長老たちの按手を受け、預言によりて賜はりたる賜物を  
 一六 等閑にすな。なんぢ心を傾けて此等のことを専ら務め  
 一七 よ。汝の進歩の明かならん爲なり。なんぢ己とおのれの  
 一八 教とを慎みて此等のことに怠るな。斯くにして己と聴く  
 一九 者とを教ふべし。

五節

一 老人を誣責すな。反つて之を父のごとく勸  
 二 め、若き人を兄弟の如くに、老いたる女を母の如くに勸  
 三 め、若き女を姉妹の如くに全き貞潔をもて勸めよ。寡婦  
 四 のうちの眞の寡婦を敬へ。されど寡婦に子もしくは孫  
 五 あらば、彼ら先づ己の家に孝を行ひて親に恩を報ゆるこ  
 六 とを學ぶべし。これ神の御意にかなふ事なり。眞の寡婦  
 七 にして獨残りたる者は、望を神におきて、夜も晝も絶え  
 八 ず願と祈とを爲す。されど佚樂を放恣にする寡婦は、  
 九 生けりと雖も死にたる者なり。これらの事を命じて彼ら  
 一〇 に責むべき所なからしめよ。人もし其の親族、殊に己が  
 一一 家族を顧みずば、信仰を棄てたる者にて、不信者よりも  
 一二 更に惡しきなり。六十歳以下の寡婦は寡婦の籍に記す  
 一三 べからず、記すべきは一人の夫の妻たりし者にして、  
 一四 善き業の聲聞あり、或は子女をそだて、或は旅人を宿  
 一五 し、或は聖徒の足を洗ひ、或は惱める者を助くる等

二二 もろもろの善き業に従ひし者たるべし。若き寡婦は籍に  
 二三 記すな。彼らキリストに背きて心亂る時は、嫁ぐこと  
 二四 を欲し、初の誓約を棄つるに因りて批難を受くべければ  
 二五 なり。彼等はまた懶惰に流れて家々を遊びめぐる。言に  
 二六 懶惰なるのみならず、言多くして徒事にたづさはり、  
 二七 言ふまじき事を言ふ。されば若き寡婦は嫁きて子を  
 二八 生み、家を理めて敵に少しにても誇るべき機を與へざらん  
 二九 ことを我は欲す。彼らの中には既に迷ひてサタンに従ひ  
 三〇 たる者あり。信者たる女もし其の家に寡婦あらば、自ら  
 三一 之を助けて教會を煩はすな。これ眞の寡婦を教會の  
 三二 助けん爲なり。

三三 善く治むる長老、殊に言と教とをもて勞する長老を  
 三四 一層尊ぶべき者とせよ。聖書に「穀物を碾す牛に口籠を  
 三五 繋ぐべからず」また「労働人のその價を得るは相應しき  
 三六 なり」と云へばなり。長老に對する訴訟は二三人の  
 三七 證人なくば受くべからず。罪を犯せる者をば衆の前にて  
 三八 責めよ、これ他の人をも懼れしめんためなり。われ神と  
 三九 キリスト・イエスと選ばれたる御使たちとの前にて嚴か  
 四〇 に汝に命ず、何事をも偏り行はず、偏頗なく此等のこと  
 四一 を守れ。輕々しく人に手を按くな。人の罪に與るな、

三三 自ら守りて潔くせよ。今よりのち水のみを飲まず、胃の  
 三四 ため、又しばしば病に罹る故に、少しく葡萄酒を用ひ  
 三五 よ。或人の罪は明かにして先だちて審判に往き、或人の  
 三六 罪は後にしたがふ。斯くのごとく善き業も明かなり、  
 三七 然らざる者も遂には隠ること能はず。

三八 おほよそ靴の下にありて奴隷たる者は、お  
 三九 のれの主人を全く尊ぶべき者とすべし。これ神の名と  
 四〇 教との譏られざらん爲なり。信者たる主人を有てる者  
 四一 は、その兄弟なるに因りて之を輕んぜず、反つて彌増々  
 四二 これに事ふべし。その益を受くる主人は信者にして愛せ  
 四三 らるる者なればなり。

四四 汝これらの事を教へかつ勸めよ。もし異なる教を  
 四五 傳へて、健全なる言すなはち我らの主イエス・キリスト  
 四六 の言と、敬虔にかなふ教とを肯はぬ者あらば、その人は  
 四七 傲慢にして何をも知らず、ただ議論と言争とにのみ耽る  
 四八 なり、之によりて嫉妬・争闘・誹謗・惡しき念おこり、  
 四九 また心腐りて眞理をはなれ、敬虔を利益の道とおもふ  
 五〇 者の争論おこるなり。されど足ることを知りて敬虔を守  
 五一 る者は、大なる利益を得るなり。我らは何をも携へて  
 五二 世に來らず、また何をも携へて世を去ること能はざれば

五三 たり。ただ衣食あらば足れりとせん。されど富まんと欲  
 五四 する者は、誘惑と網、また人を滅亡と沈淪とに溺らす愚  
 五五 にして害ある各様の慾に陥るなり。それ金を愛するは  
 五六 諸般の惡しき事の根なり、ある人々これを慕ひて信仰よ  
 五七 り迷ひ、さまざまの痛をもて自ら己を刺しとほせり。

五八 神の人よ、なんぢは此等のことを避けて、義と敬虔  
 五九 と信仰と愛と忍耐と柔和とを追ひ求め、信仰の善き職  
 六〇 をたたかへ、永遠の生命をとらへよ。汝これが爲に召を  
 六一 蒙り、また多くの證人の前にて善き言明をなせり。われ  
 六二 凡ての物を生かしたまふ神のまへ、及びボンテオ・ピラト  
 六三 に向ひて善き言明をなし給ひしキリスト・イエスの前  
 六四 にて汝に命ず。汝われらの主イエス・キリストの現れ  
 六五 たまふ時まで汚點なく責むべき所なく、誠命を守れ。  
 六六 時いたらば幸福なる唯一の君主、もろもろの王の王、  
 六七 もろもろの主の主、これを願し給はん。主は唯ひとり  
 六八 不死を保ち近づきがたき光に住み、人の未だ見ず、また  
 六九 見ること能はぬ者なり。願はくは尊貴と限りなき權力と  
 七〇 彼にあらんことを、アマメン。

七一 汝この世の富める者に命ぜよ。高ぶりたる思をもた  
 七二 ず、定なき富を持たずして、唯われらを樂しませんとて

一八 萬の物を豊に賜ふ神に依頼み、善をおこなひ、善き業に  
 一九 富み、惜みなく施し、分け與ふることを喜び、かくて  
 己のために善き基を蓄へ、未來の備をなして眞の生命  
 を捉ふることを爲よと。

二〇 テモテよ、なんぢ委ねられたる事を守り、妄なる

虚しき物語、また偽りて知識と稱ふる反對論を避けよ、  
 二二 ある人々この知識を装ひて信仰より外れたり。  
 願はくは御恵なんぢと偕に在らんことを。

テモテへの前の書 をはり

テモテへの後の書

一 神の御意により、キリスト・イエスにある  
 生命の約束に循ひて、キリスト・イエスの使徒となれる  
 二 パウロ、書を我が愛する子テモテに贈る。願はくは父な  
 る神および我らの主キリスト・イエスより賜ふ、恩恵と  
 憐憫と平安と汝に在らんことを。  
 三 われ夜も晝も祈の中に絶えず汝を思ひて、わが先祖  
 に效ひ清き良心をもて事ふる神に感謝す。我なんぢの  
 涙を憶え、わが歡喜の満ちん爲に汝を見んことを欲す。  
 四 是なんぢに在る虚偽なき信仰をおもひ出すに因りてな  
 五 り。その信仰の裏に汝の祖母ロイス及び母ユニケに宿り  
 六 しごとく、汝にも然るを確信す。この故に、わが按手に  
 七 由りて汝の内に得たる神の賜物をますます熾にせんこと  
 八 を勸む。そは神の我らに賜ひたるは、臆する靈にあら  
 九 ず、能力と愛と謹慎との靈なればなり。されば汝われら  
 の主の證をなす事と、主の囚人たる我とを恥とすな、  
 一〇 ただ神の能力に隨ひて福音のために我とともに苦難を  
 一〇 忍べ。神は我らを救ひ聖なる召をもて召し給へり。是  
 一〇 われらの行爲に由るにあらず、神の御旨にて創世の前に

一〇 キリスト・イエスをもて我らに賜ひし恩恵に由るなり。  
 一〇 この恩恵は今われらの教主キリスト・イエスの現れ  
 給ふに因りて顯れたり。彼は死をほろぼし、福音をもて  
 生命と朽ちざる事とを明かにし給へり。我はこの福音の  
 ために立てられて宣傳者・使徒・教師となれり。之がた  
 めに我これらの苦難に遭ふ。されど之を恥とせず、我  
 わが依頼む者を知り、且わが委ねたる者を、かの日に至  
 るまで守り得給ふことを確信すればなり。汝キリスト・  
 イエスにある信仰と愛とをもて我より聴きし健全なる  
 言の模範を保ち、かつ委ねられたる善きものを我等の  
 うちに宿りたまふ聖靈に頼りて守るべし。  
 一五 アジャに居る者みな我を棄てしは汝の知る所なり、  
 その中にフゲロとヘルモゲネとあり。願はくは主オネシ  
 ポロの家に憐憫を賜はんことを。彼はしばしば我を慰  
 め、又わが鎖を恥とせず。そのロマに居りし時には懇ろ  
 に尋ね來りて、遂に我に逢ひたり。願はくは主かの日に  
 いたり主の憐憫を彼に賜はんことを。彼がエペソにて  
 我に事へしことの如何ばかりなりしかは、汝の能く知る  
 ところなり。

一六 わが子よ、汝キリスト・イエスにある恩恵に

よりて強かれ。且おほくの證人の前にて、我より聽きし所のことを他の者に教へ得る忠實なる人々に委ねよ。汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難を忍べ。兵卒を務むる者は生活のために纏はるる事なし、これ募れる者を喜ばせんとすればなり。技を競ふ者もし法に隨ひて競はずば冠冕を得ず。勞する農夫まづ實の分配を得べきなり。汝わが言ふ所をおもへ、主なんぢに凡ての事に就きて悟を賜はん。わが福音に云へる如く、ダビデの裔にして死人の中より甦へり給へるイエス・キリストを憶えよ。我はこの福音のために苦難を受けて悪人のごとく繋がるに至れり、されど神の言は繋がれたるにあらず。この故に我えらばれたる者のために凡ての事を忍ぶ。これ彼等をして永遠の光榮と共にキリスト・イエスによる救を得しめんとてなり。ここに信ずべき言あり「我等もし彼と共に死にたる者ならば、彼と共に生くべし。もし耐へ忍ばば、彼と共に王となるべし。若し彼を否まば、彼も我らを否み給はん。我らは眞實ならずとも、彼は絶えず眞實にまします。彼は己を否み給ふこと能はざればなり」

する事なきやう神の前にて嚴かに命ぜよ、言争は益なくして聞く者を滅亡に至らしむ。なんぢ眞理の言を正しく教へ、恥づる所なき勞働人となりて、神の前に鍊達せる者とならんことを勵め。また妄なる虚しき物語を避けよ、かかる者はますます不敬虔に進み、その言は脱疽のごとく腐れひろがるべし。ヒメナオとピレトとは斯くのごとき者の中にあり。彼らは眞理より外れ、復活ははや過ぎたりと云ひて、或人々の信仰を覆へすなり。されど神の据ゑ給へる堅き基は立てり、之に印あり。記して曰ふ「主おのれの者を知り給ふ」また「凡て主の名を稱ふる者は不義を離るべし」と。大なる家の中には金銀の器あるのみならず、木また土の器もあり、貴きに用ふるものあり、また賤しきに用ふるものあり。人もし賤しきものを離れて自己を潔くせば貴きに用ひらるる器となり、淨められて主の用に適ひ、凡ての善き業に備へらるべし。汝わが時々の懲を避け、主を清き心にて呼び求むる者とともに、義と信仰と愛と平和とを迫り求めよ。愚なる無學の議論を棄てよ、これより分争の起るを避けばなり。主の僕は争ふべからず、凡ての人に優しく能く教へ、忍ぶことをなし、逆ぶ者をば柔和をもて戒む

べし、神あるひは彼らに悔改むる心を賜ひて眞理を悟らせ給はん。彼ら一度は惡魔に囚はれたれど、醒めてその網をのがれ、神の御意を行ふに至らん。

一 されど汝これを知れ、末の世に苦しき時きたらん。人々おのれを愛する者・金を愛する者・誇るもの・高ぶる者・罵るもの・父母に逆ふもの・恩を忘るる者・潔からぬ者・無情なる者・怨を解かぬ者・讒る者・節制なき者・殘刻なる者・善を好まぬ者・友を賣る者・放縱なる者・傲慢なる者・神よりも快樂を愛する者・敬虔の貌をとりてその徳を捨つる者とならん、斯かる類の者を避けよ。彼らの中には人の家に潜り入りて愚なる女を擄にする者あり、斯くせらるる女は罪を積み重ねて各様の懲に引かれ、常に學べども眞理を知る知識に至ること能はず。彼の者らはヤンネとヤンプレとがモーセに逆ひし如く、眞理に逆ふもの、心の腐れたる者、また信仰につきて棄てられたる者なり。されど此の上になほ進むこと能はじ、そはかの二人のごとく彼らの愚なる事も亦すべての人に顯るべければなり。汝は我が教誨・品行・志望・信仰・寛容・愛・忍耐・迫害、および苦難を知り、またアンテオケ、イコニオム、ルステラにて

起りし事、わが如何なる迫害を忍びしかを知る。主は凡てこれらの中より我を救ひ出したまへり。凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて一生を過さんと欲する者は迫害を受くべし。惡しき人二人を欺く者とは、ますます惡にすすみ、人を惑し、また人に惑されん。されど汝は學びて確信したる所に常に居れ。なんぢ誰より之を學びしかを知り、また幼き時より聖なる書を識りし事を知ればなり。この書はキリスト・イエスを信する信仰によりて教に至らしむる智慧を汝に與へ得るなり。聖書はみな神の感動によるものにして、教誨と譴責と矯正と義を薰陶するに益あり。これ神の人の全くなりて諸般の善き業に備を全うせん爲なり。

一 われ神の前また生ける者と死にたる者とを審かんとし給ふキリスト・イエスの前にて、その顯現と御國とをおもひて嚴かに汝に命ず。なんぢ御言を宣傳へよ、機を得るも機を得ざるも常に勵め、寛容と教誨とを盡して責め、戒め、勸めよ。人々健全なる教に堪へず、耳痒くして私慾のまにまに己がために教師を増し加へ、耳を眞理より背けて昔話に移る時來らん。されど汝は何事にも慎み、苦難を忍び、傳道者の業をなし、なんぢ

六の職を全うせよ。我は今供物として血を灑がんとす、  
七わが去るべき時は近づけり。われ善き戦闘をたたかひ、  
八走るべき道程を果し、信仰を守れり。今よりのち義の  
九冠冕わが爲に備はれり。かの日に至りて正しき審判主  
一〇なる主、これを我に賜はん、當に我のみならず、凡て  
一一その顯現を慕ふ者にも賜ふべし。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 我を棄ててテサロニケに往き、クレスケンスはガラ  
二 テヤに、テトスはダルマテヤに往きて、唯ルカのみ我と  
三 ともに居るなり。汝マルコを連れて共に來れ、彼は職の  
四 ために我に益あればなり。我テキコをエペソに遣せり。  
五 汝きたる時わがトロアスにてカルボの許に遣し置き  
六 たる外衣を携へきたれ、また書物、殊に羊皮紙のものを  
七 携へきたれ。金細工人アレキサンデル大に我を惱せり。  
八 主はその行爲に隨ひて彼に報いたまふべし。汝もまた  
九 彼に心せよ、かれは甚だしく我らの言に逆ひたり。わが  
一〇 始の辯明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり、

二七 願はくはこの罪の彼らに歸せざらんことを。されど主  
二八 われと偕に在して我を強めたまへり。これ我によりて  
二九 宣教の全うせられ、凡ての異邦人のこれを聞かん爲な  
三〇 り。而して我は獅子の口より救ひ出されたり。また主は  
三一 我を凡ての惡しき業より救ひ出し、その天の國に救ひ入  
三二 れたまはん。願はくは榮光世々限りなく彼にあらん事  
三三 を、アアメン。

一 汝ブリスカ及びアクラ、またオネシポロの家に安否  
二 を問へ。エラストはコリントに留れり。トロピモは病あ  
三 る故に我かれをミレトに遣せり。なんぢ勉めて冬のまへ  
四 に我に來れ、ユプロ、ブデス、リノス、クラウデヤ、及  
五 び凡ての兄弟、なんぢに安否を問ふ。  
六 願はくは主なんぢの靈と偕に在し、御惠なんぢらと  
七 偕に在らんことを。

テモテへの後の書 をはり

テトスへの書

一 神の僕またイエス・キリストの使徒パウロ

二 我が使徒となれるは、永遠の生命の望に基きて神の  
三 選民の信仰を堅うし、また彼らを敬虔にかなふ眞理を  
四 知る知識に至らしめん爲なり。偽りなき神は、創世の前  
五 に、この生命を約束し給ひしが、時いたりて御言を宣教  
六 にて顯さんとし、その宣教を我らの救主たる神の命令を  
七 もて我に委ねたまへり。われ書を同じ信仰によりて  
八 我が眞實の子たるテトスに贈る。願はくは父なる神およ  
九 び我らの救主キリスト・イエスより賜ふ恩恵と平安と、  
一〇 汝にあらんことを。

一 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 わが汝をクレテに遣し置きたる故は、汝をして缺け  
二 たる所を正し、且わが命ぜしごとく町々に長老を立てし  
三 めん爲なり。長老は責むべき所なく、一人の女の夫にし  
四 て、子女もまた放蕩をもて訴へらるる事なく、服従せぬ  
五 ことなき信者たるべきなり。それ監督は神の家司なれ  
六 ば、責むべき所なく、放縱ならず、輕々しく怒らず、  
七 酒を嗜まず、人を打たず、恥づべき利を取らず、反つて  
八 旅人を懇ろに待ひ、善を愛し、謹慎あり、正しく深く

一 節制にして、教に適ふ信すべき言を守る者たるべし。  
二 これ健全なる教をもて人を勧め、かつ言ひ逆ふ者言ひ  
三 伏することを得んためなり。

一 服従せず、虚しき事をかたり、人の心を惑す者おほ  
二 し、殊に割禮ある者のうちに多し。彼らの口を箝がしむ  
三 べし、彼らは恥づべき利を得んために、教ふまじき事を  
四 教へて全家を覆へすなり。クレテ人の中なる或預言者  
五 いふ

「クレテ人は常に虚偽をいふ者  
あしき獸、また懶惰の腹なり」

一 この證は眞なり。されば汝きびしく彼らを責めよ、彼  
二 らがユダヤ人の昔話と眞理を棄てたる人の誠命とに心  
三 を寄することなく、信仰を健全にせん爲なり。深き人に  
四 は凡ての物きよく、汚れたる人と不信者とは一つとし  
五 て深き物なし、彼らは既に心も良心も汚れたり。みづ  
六 から神を知ると言ひあらはせど、其の行爲にては神を否  
七 む。彼らは憎むべきもの、服はぬ者、すべての善き業に  
八 就きて棄てられたる者なり。

一 されど汝は健全なる教に適ふことを語れ。  
二 老人には自ら制することと謹嚴と謹慎とを勧め、また

三 信仰と愛と忍耐とに健全ならんことを勧めよ。老いたる女にも同じく、清潔にかなふ行爲をなし、人を誇らず、大酒の奴隷とならず、善き事を教ふる者とならんことを勧めよ。かつ彼等をして若き女に夫を愛し、子を愛し、謹慎と貞操とを守り、家の務をなし、仁慈をもち、己が夫に服はんことを教へしめよ。これ神の言の汚されざらん爲なり。若き人にも同じく謹慎を勧め、なんぢ自ら凡ての事につきて善き業の模範を示せ。教をなすには邪曲なきことと謹嚴と、責むべき所なき健全なる言とを以てすべし。これ逆ふ者をして我らの惡を言ふに由なく、自ら恥づる所あらしめん爲なり。奴隷には己が主人に服ひ、凡ての事において之を喜ばせ、之に言ひ逆はず、物を盗まず、反つて至き忠信を顯すべきことを勧めよ。これ凡ての事において我らの教主なる神の教を飾らん爲なり。凡ての人に教を得さす神の恩恵は既に顯れて、不敬虔と世の慾とを棄てて謹慎と正義と敬虔とをもて此の世を過し、幸福なる望、すなはち大なる神、われらの教主イエス・キリストの榮光の顯現を待つべきを我らに教ふ。キリストは我等のために己を與へたまへり。是われらを諸般の不法より贖ひ出して、善き業に

熱心なる特選の民を己がために潔めんとてなり。  
 二五 なんぢ至き權威をもて此等のことを語り、勧め、また責めよ。なんぢ人に輕んぜらるな。  
 一 汝かれらに司と權威ある者にと服し、かつ従ひ、凡ての善き業をおこなふ備をなし、人を誇らず、争はず、寛容にし、常に柔和を凡ての人に顯すべきことを思ひ出させよ。我らも前には愚なるもの、願はぬもの、迷へる者、さまざまの慾と快樂とに事ふるもの、惡意と嫉妬とをもて過すもの、憎むべき者、また互に憎み合ふ者なりき。されど我らの教主なる神の仁慈と、人を愛したまふ愛との顯れしとき、我らの行ひし業の業にはよらで、唯その憐憫により、更生の洗と、我らの教主イエス・キリストをもて聖に注ぎたまふ聖靈による維新とにて、我らを救ひ給へり。これ我らが其の恩恵によりて義とせられ、永遠の生命の望にしたがひて世間とならん爲なり。この言は信すべきなれば、我なんぢが此等につきて確證せんことを欲す。神を信じたる者をして慎みて善き業を勤めしめん爲なり。かくするは善き事にして人に益あり。されど愚なる議論・系圖・争闘、また律法に就きての分争を避けよ。これらは益なくして

一〇 空しきものなり。異端の者をば一度もしくは二度、訓戒して後これを棄てよ。かかる者は汝の知ることく、邪曲にして自ら罪を認めつつ尙これを犯すなり。  
 二三 我アルテマス或はテキコを汝に遣さん、その時なんぢ急ぎてニコポリなる我がもとに來れ。われ彼處にて冬を過さんと定めたり。教法師ゼナス及びアポロを懇ろに送りて、乏しき事なからしめよ。かくて我らの伴侶も

善き業を勤めて必要を責けんことを學ぶべし。これ果を結ばぬ事なからん爲なり。  
 二五 我と偕に居る者みな汝に安否を問ふ。信仰に在りて我らを受する者に安否を問へ。  
 願はくは御高なんぢ凡ての者と偕にあらん事を。テトスへの書をはり



ビレモンへの書

一 キリスト・イエスの囚人たるパウロ及び兄弟テモ  
 ニ テ、書を我らが愛する同業者ビレモン、我らの姉妹アビ  
 ヤ、我らと共に戦闘をなせるアルキボ及び汝の家にある  
 三 教會に贈る。願はくは我らの父なる神および主イエス・  
 キリストより賜ふ恩恵と平安と、汝らに在らんことを。  
 四 われ祈るとき常に汝をおぼえて我が神に感謝す。  
 五 これ主イエスと凡ての聖徒とに對する汝の愛と信仰と  
 六 を聞きたればなり。願ふところは、汝の信仰の交際の  
 七 活動により、人々われらの中なる凡ての善き業を知りて、  
 八 榮光をキリストに歸するに至らんことなり。兄弟よ、我  
 九 等なんぢの愛によりて大なる歡喜と慰安とを得たり。聖徒  
 一〇 の心は汝によりて安んぜられたればなり。  
 一一 この故に、われキリストに在りて、汝になすべき事  
 一二 を聊かも憚らず命じ得れど、むしろ愛の故によりて汝に  
 一三 ねがふ。既に年老いて今はキリスト・イエスの囚人とな  
 一四 れる我パウロ、縲紲の中にて生みし我が子オネシモの事  
 一五 をなんぢに願ふ。かれ前には汝に益なき者なりしが、今  
 一六 は汝にも我にも益ある者となれり。我かれを汝に歸す、

一七 三二二  
 一八 三二一  
 一九 三二〇  
 二〇 三一九  
 二一 三一八  
 二二 三一七  
 二三 三一六  
 二四 三一五  
 二五 三一四  
 二六 三一三  
 二七 三一二  
 二八 三一  
 二九 三〇  
 三〇 二九  
 三一 二八  
 三二 二七  
 三三 二六  
 三四 二五  
 三五 二四  
 三六 二三  
 三七 二二  
 三八 二一  
 三九 二〇  
 四〇 一九  
 四一 一八  
 四二 一七  
 四三 一六  
 四四 一五  
 四五 一四  
 四六 一三  
 四七 一二  
 四八 一一  
 四九 一〇  
 五〇 九  
 五一 八  
 五二 七  
 五三 六  
 五四 五  
 五五 四  
 五六 三  
 五七 二  
 五八 一  
 五九 〇  
 六〇 〇  
 六一 〇  
 六二 〇  
 六三 〇  
 六四 〇  
 六五 〇  
 六六 〇  
 六七 〇  
 六八 〇  
 六九 〇  
 七〇 〇  
 七一 〇  
 七二 〇  
 七三 〇  
 七四 〇  
 七五 〇  
 七六 〇  
 七七 〇  
 七八 〇  
 七九 〇  
 八〇 〇  
 八一 〇  
 八二 〇  
 八三 〇  
 八四 〇  
 八五 〇  
 八六 〇  
 八七 〇  
 八八 〇  
 八九 〇  
 九〇 〇  
 九一 〇  
 九二 〇  
 九三 〇  
 九四 〇  
 九五 〇  
 九六 〇  
 九七 〇  
 九八 〇  
 九九 〇  
 一〇〇 〇

かれは我が心なり。我は彼をわが許に留めおきて、我が福音のために縲紲にある間、なんぢに代りて我に事へしめん」と欲したれど、なんぢの承諾を経ずして斯くするを好まざりき。是なんぢの善の止むを得ざるに出でずして心より出でんことを欲したればなり。彼が暫時なんぢを離れしは、或は汝かれを永遠に保ち、もはや奴隷の如くせず、奴隷に勝りて愛する兄弟の如くせん爲なりしやも知るべからず。我は殊に彼を愛す、まして汝は肉によりても主によりても、之を愛せざる可けんや。汝もし我を友とせば、請ふ、われを納るることく彼を納れよ。彼もし汝に不義をなし、または汝に負債あらば、之を我に負はせよ。我パウロ手づから之を記す、われ償はん、汝われに身を以て償ふべき負債あれど、我これを言はず。兄弟よ、請ふ、なんぢ主に在りて我に益を得させよ、キリストに在りて我が心を安んぜよ。  
 我なんぢの従順を確信して之を書き贈る。わが言ふところに勝りて汝の行はんことを知るなり。而して我がために宿を備へよ、我なんぢらの祈により、遂に我が身の汝らに與へられんことを望めばなり。  
 キリスト・イエスに在りて我とともに囚人となれる

と借にあらんことを。

ビレモンへの書をはり

二四 エパfras、及び我が同業者マルコ、アリストタルコ、  
 二五 デマス、ルカ皆なんぢに安否を問ふ。  
 二六 願はくは主イエス・キリストの恩恵、なんぢらの靈

ヘブル人への書

一 神むかしは預言者等により、多くに分ち、  
 二 多くの方法をもて先祖たちに語り給ひしが、この末の世  
 三 には御子によりて、我らに語り給へり。神は曾て御子を  
 四 立てて萬の物の世嗣となし、また御子によりて諸般の  
 五 世界を造り給へり。御子は神の榮光のかがやき、神の  
 六 本質の像にして、己が權能の言をもて萬の物を保ちたま  
 七 ふ。また罪の潔をなして、高き處にある稜威の右に坐し  
 八 給へり。その受け給ひし名の御使の名に勝れるごとく、  
 九 御使よりは更に勝る者となり給へり。神は孰の御使に  
 一〇 曾て斯くは言ひ給ひしぞ

「なんぢは我が子なり、  
 われ今日なんぢを生めり」と。  
 また

「われ彼の父となり、  
 彼わが子とならん」と。  
 また初子を再び世に入れ給ふとき  
 「神の凡ての使は之を拜すべし」と  
 と言ひ給ふ。また御使たちに就きては

「神は、その使たちを風となし、  
 その事ふる者を焰となす」と  
 と言ひ給ふ。されど御子に就きては  
 「神よ、なんぢの御座は世々限りなく、  
 なんぢの國の杖は正しき杖なり。  
 なんぢは義を愛し、不法をにくむ。  
 この故に神なんぢの神は歡喜の油を  
 汝の友に勝りて汝にそそぎ給へり」と。  
 また

「主よ、なんぢ太初に地の基を置きたまへり、  
 天も御手の業なり。  
 これらは滅びん、されど汝は常に存へたまはん。  
 これらはみな衣のごとく舊びん。  
 而して汝これらを袍のごとく疊み給はん、  
 これらは衣のごとく變らん。  
 されど汝はかはり給ふことなく、  
 なんぢの齡は終らざるなり」と  
 と言ひたまふ。又いづれの御使に曾て斯くは言ひ給ひし  
 ぞ  
 「われ汝の仇を汝の足臺となすまでは、

我が右に坐せよ」と

一 御使はみな事へまつる靈にして、教を嗣がんとする  
 二 者のために職を執るべく遣はれたる者にあらざや。  
 三 一 この故に我ら聞きし所をいよいよ篤く慎む  
 四 べし。恐らくは流れ過ぐる事あらん。若し御使によりて  
 五 語り給ひし言すら堅くせられて、咎と不従順とみな正  
 六 しき報を受けたらんには、我ら斯くのごとき大なる教を  
 七 等閑にして争てか遁るることを得ん。この教は初め主に  
 八 よりて語り給ひしものにして、聞きし者ども之を我らに  
 九 確らし、神また徴と不思議とさまざまの能力ある業と、  
 一〇 御旨のままに分ち與ふる聖靈とをもて證を加へたま  
 一一 へり。  
 一二 それ神は我らの語るところの來らんとする世界を、  
 一三 御使たちには服はせ給はざりき。或篇に人證して言  
 一四 ふ

「人は如何なる者なれば、  
 之を御心にとめ給ふか。  
 人の子は如何なる者なれば、  
 之を顧み給ふか。  
 汝これを御使よりも少しく卑うし、

光榮と尊貴とを冠らせ、  
 萬の物をその足の下に服はせ給へり」と

一 既に萬の物を之に服はせ給ひたれば、服はぬものは  
 二 一つだに残さるる事なし。されど今もなほ我らは萬の物  
 三 の之に服ひたるを見ず。ただ御使よりも少しく卑くせら  
 四 れしイエスの、死の苦難を受くるによりて榮光と尊貴と  
 五 を冠せられ給へるを見る。これ神の恩恵によりて萬民  
 六 のために死を味ひ給はんとしてなり。それ多くの子を  
 七 光榮に導くに、その教の君を苦難によりて全うし給ふ  
 八 は、萬の物の歸するところ、萬の物を造りたまふ所の者  
 九 に相應しき事なり。潔めたまふ者も、潔めらるる者も、  
 一〇 皆ただ一つより出づ。この故に彼らを兄弟と稱ふるを  
 一一 恥とせずして言ひ給ふ、  
 一二 「われ御名を我が兄弟たちに告げ、  
 一三 集會の中にて汝を讃め歌はん」と  
 一四 また  
 一五 「われ彼に依頼まん」

「視よ、我と神の我に賜ひし子等とは……」  
 一と。子等はともに血肉を具ふれば、主もまた同じく之を

具へ給ひしなり。これは死の権力を有つもの、即ち悪魔  
 を死によりて亡し、かつ死の懼によりて生涯、奴隸と  
 なりし者どもを解放し給はんとすなり。實に主は御使を  
 扶けずしてアブラハムの裔を扶けたまふ。この故に神の  
 事につきて憐憫ある忠實なる大祭司となりて、民の罪  
 を贖はんとすに、凡ての事において兄弟の如くなり給ひ  
 しは宜なり。主は自ら試みられて苦しみ給ひたれば、  
 試みらるる者を助け得るなり。

第三章 されば共に天の召を蒙れる聖なる兄弟よ、  
 我が言ひあらはす信仰の使徒たり大祭司たるイエスを  
 思ひ見よ。彼の己を立て給ひし者に忠實なるは、モーセ  
 が神の全家に忠實なりしが如し。家を造る者の家より  
 勝りて尊ばれる如く、彼もモーセに勝りて大なる榮光を  
 受くるに相應しき者とせられ給へり。家は凡て之を造る  
 者あり、萬の物を造り給ひし者は神なり。モーセは後に  
 語り傳へられんと爲ることの證をせんために、僕として  
 神の全家に忠實なりしが、キリストは子として神の家を  
 忠實に掌どり給へり。我等もし確信と希望の誇とを終  
 まて堅く保たば、神の家なり。この故に聖靈の言ひ給ふ  
 ごとく

「今日なんぢら神の聲を聞かば、  
 その怒を惹きし時のごとく、  
 荒野の嘗試の日のごとく、  
 此ころを頑固にするなかれ。  
 彼處にて汝らの先祖たちは  
 我をこころみて驗し、  
 かつ四十年の間わが業を見たり。  
 この故に我この代の人を憤りて云へり、  
 「彼らは常に心まよひ、  
 わが途を知らざりき」と。  
 われ怒をもて「彼らは  
 我が休に入るべからず」と誓へり」  
 兄弟よ、心せよ、恐らくは汝等のうち活ける神を離れ  
 んとする不信仰の惡しき心を懐く者あらん。汝等のうち  
 誰も罪の誘惑によりて頑固にならぬやう、今日と稱ふる  
 間に日々互に相勸めよ。もし始の確信を最後まで堅く保  
 たば、我らはキリストに與る者となるなり。それ  
 「今日なんぢら神の聲を聞かば、  
 その怒を惹きし時のごとく、  
 此ころを頑固にするなかれ」

と云へり。然れば聞きてなほ怒を惹きし者は誰なるか、  
 モーセによりてエジプトを出てし凡ての人にあらずや。  
 また四十年のあひだ、神は誰に對して憤り給ひし  
 か、罪を犯してその死屍を荒野に横たへし人々にあらず  
 や。又かれらは我が安息に入るべからずとは、誰に對し  
 て誓ひ給ひしか、不従順なる者にあらずや。之により  
 て見れば、彼らの入ること能はざりしは、不信仰により  
 てなり。

然れば我ら懼るべし、その安息に入るべき  
 約束はなほ遺れども、恐らくは汝らの中にこれに達せざる  
 者あらん。そは彼等のごとく我らも善き音信を傳へられ  
 たり、然れど彼らには聞きし所の言益なかりき。聞く  
 もの之に信仰をまじへざりしに囚る。われら信じたる者  
 は、かの休に入ることを得るなり。

「われ怒をもて「彼らは  
 わが休に入るべからず」と誓へり」  
 と云ひ給ひしが如し。されど世の創より御業は既に成れ  
 るなり。或篇に七日めに就きて斯く云へり「七日めに神  
 その凡ての業を休みたまへり」と。また茲に  
 「かれらは

わが休に入るべからず」  
 と云へり。然れば之に入るべき者なほ在り、曩に善き  
 音信を傳へられし者らは、不従順によりて入ることを  
 得ざりしなれば、久しきを経てのち復、日を定めダビデ  
 によりて「今日」と言ひ給ふ。曩に記したるが如し。  
 曰く  
 「今日なんぢら神の聲を聞かば、  
 此ころを頑固にするなかれ」

若しヨシヤ既に休を彼らに得しめしならば、神はその  
 後、ほかの日につきて語り給はざりしならん。然れば神  
 の民の爲になほ安息は遺れり。既に神の休に入りたる者  
 は、神のその業を休み給ひしごとく、己が業を休めり。  
 されば我等はこの休に入らんことを努むべし、是かの  
 不従順の例にならひて誰も墮つることなからん爲な  
 り。神の言は生命あり、能力あり、兩刃の劍よりも利く  
 して、精神と靈魂、關節と骨髓を透して之を割ち、心の  
 念と志望とを驗すなり。また造られたる物に一つと  
 して神の前に顯れぬはなし、萬の物は我らが係れる神の  
 目のまへに裸にて露るるなり。  
 我等には、もろもろの天を通り給ひし偉なる大祭司、

神の子イエスあり。然れば我が言ひあらはす信仰を堅く保つべし。我らの大祭司は我らの弱を思ひ遣ること能はぬ者にあらず、罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。この故に我らは憐憫を受けんが爲、また機に合ふ助となる恵を得んがために、憚らずして恵の御座に来るべし。

**第五節** 凡そ大祭司は人の中より選ばれ、罪のために供物と犠牲とを献げんとて、人にかはりて神に事ふることを任ぜらる。彼は自らも弱に纏はるるが故に、無知なるもの、迷へる者を思ひ遣ることを得るなり。之によりて民のために爲すごとく、また己のためにも罪に就きて献物をなさざるべからず。又この貴き位はアロンのごとく神に召さるるにあらずば、誰も自ら之を取る者なし。斯くの如くキリストも己を崇めて自ら大祭司となり給はず。之に向ひて

「なんぢは我が子なり、われ今日なんぢを生めり」と語り給ひし者、これを立てたり。また他の篇に「なんぢは永遠にメルキゼデクの位に等しき祭司たり」

と言ひ給へるが如し。キリストは肉體にて在ししとき、大なる叫と涙とをもて、己を死より救ひ得る者に祈と願とを献げ、その恭敬によりて聴かれ給へり。彼は御子なれど、受けし所の苦難によりて従順を學び、かつ全うせられたれば、凡て己に順ふ者のために永遠の救の原となりて、神よりメルキゼデクの位に等しき大祭司と稱へられ給へり。

之に就きて我ら多くの言ふべき事あれど、汝ら聞くに鈍くなりたれば釋き難し。なんぢら時を経ること久しければ、教師となるべき者なるに、今また神の言の初歩を人より教へられざるを得ず。汝らは堅き食物ならて乳を要する者となれり。おほよそ乳を用ふる者は幼児なれば、未だ義の言に熟せず、堅き食物は智力を練習して善惡を辨ふる成人の用ふるものなり。

**第六節** この故に我らはキリストの教の初歩に止ることなく、再び死にたる行爲の悔改と神に對する信仰との基、また各様のバプテスマと按手と、死人の復活と永遠の審判との教の基を置かずして完全に進むべし。神もし許し給はば、我ら之をなさん。一たび照されて天よりの賜物を味ひ、聖靈に與る者となり、神の

善き言と來世の能力とを味ひて後、墮落する者は更にまた自ら神の子を十字架に釘けて肆し者とする故に、再びこれを悔改に立返らること能はざるなり。それ地しばしば其の上に降る雨を吸ひ入れて耕す者の益となるべき作物を生ぜば、神より祝福を受く。されど茨と藪とを生ぜば、棄てられ、かつ詛に近く、その果は焚かるるなり。

愛する者よ、われら斯くは語れど、汝らには更に善きこと、即ち救にかかはる事あるを深く信ず。神は不義に在さねば、汝らの勤勞と、前に聖徒につかへ、今もなほ之に事へて御名のために顯したる愛とを忘れ給ふことなし。我らは汝等がおのおの終まで前と同じ勳をあらはして全き望を保ち、怠ることなく、信仰と耐忍とをもて約束を嗣ぐ人々に效はんことを求む。

それ神はアブラハムに約し給ふとき、指して誓ふべき己より大なる者なき故に、己を指して誓ひて言ひ給へり。「われ必ず、なんぢを恵み恵まん、なんぢを殖し殖さん」と、斯くの如くアブラハムは耐へ忍びて約束のものを得たり。おほよそ人は己より大なる者を指して誓ふ、その誓はすべての争論を罷むる保證たり。この故に神は

約束を嗣ぐ者に御旨の變らぬことを充分に示さんと欲して誓を加へ給へり。これ神の誠ること能はぬ二つの變らぬものによりて、己の前に置かれたる希望を捉へんとて通れたる我らに強き奨勵を與へん爲なり。この希望は我らの靈魂の鎗のごとく安全にして動かす、かつ慢の内に入る。イエス我等のために前驅し、永遠にメルキゼデクの位に等しき大祭司となりて、その處に入り給へり。

**第七節** 此のメルキゼデクはサレムの王にて至高き神の祭司たりしが、王たちを破りて還るアブラハムを迎へて祝福せり。アブラハムは彼に凡ての物の十分の一を分け與へたり。その名を釋けば第一に義の王、次にサレムの王、すなはち平和の王なり。父なく、母なく、系圖なく、齡の始なく、生命の終なく、神の子の如くにして限りなく祭司たり。

先祖アブラハム分捕物のうち十分の一、最も善き物を之に與へたれば、その人の如何に尊きかを思ふべし。レビの子等のうち祭司の職を受くる者は、律法によりて、民すなはちアブラハムの腰より出でたる己が兄弟より、十分の一を取ること命ぜらる。されど此の血脈にあらぬ彼は、アブラハムより十分の一を取りて約束を

七 受けし者を祝福せり。それ小なる者の大なる者に祝福せ  
 八 らるるは論なき事なり。かつ此所にては死ぬべき者十分  
 九 の一を受くれども、彼處にては「活くるなり」と證せら  
 〇 れたる者これを受く。また十分の一を受くるレビすら、  
 一 アブラハムに由りて十分の一を納めたりと云ふも可な  
 二 り。そはメルキゼデクのアブラハムを迎へし時に、レビ  
 三 はなほ父の腰に在りたればなり。

四 もしレビの系なる祭司によりて全うせらるる事あり  
 五 しならば（民は之によりて律法を受けたり）何ぞなほ他  
 六 にアロン之位に等しからぬメルキゼデク之位に等しき  
 七 祭司の起る必要あらんや。祭司の易る時には律法も亦  
 八 必ず易るべきなり。此等のことは曾て祭壇に事へたるこ  
 九 となき他の族に属する者をさして云へるなり。それ我ら  
 〇 の主のユダより出て給へるは明かにして、此の族につ  
 一 き、モーセは聊かも祭司に係ることを云はざりき。又  
 二 メルキゼデクのごとき他の祭司おこり、内の誠命の法に  
 三 由らず、朽ちざる生命の能力によりて立てられたれば、  
 四 我が言ふ所いよいよ明かなり。そは「なんぢは永遠に  
 五 メルキゼデク之位に等しき祭司たり」と證せられ給へば  
 六 なり。前の誠命は弱く、かつ益なき故に廢せられ、（律法

は何をも全うせざりしなり）更に優れたる希望を置かれ  
 たり、この希望によりて我らは神に近づくなり。かの  
 人々は誓なくして祭司とせられたれども、彼は誓なくし  
 ては爲られず、誓をもて祭司とせられ給へり。即ち彼に  
 就きて

「主ちかひて悔い給はず、  
 「なんぢは永遠に祭司たり」

と言ひ給ひしが如し。イエスは斯くも優れたる契約の  
 保證となり給へり。かの人々は死によりて永くその職に  
 留ることを得ざる故に、祭司となりし者の數多かりき。  
 されど彼は永遠に在せ給ふることなき祭司の職を保ち  
 たまふ。この故に彼は己に頼りて神にきたる者のために  
 執成をなさんとて常に生くれば、之を全く救ふことを  
 得給ふなり。

斯くのごとき大祭司こそ我らに相應しき者なれ、即  
 ち聖にして悪なく、穢なく、罪人より遠ざかり、諸般の  
 天よりも高くせられ給へり。他の大祭司のごとく先づ己  
 の罪のため、次に民の罪のために日々犠牲を獻ぐるを要  
 し給はず、そは「一たび己を獻げて之を成し給ひたれば  
 なり。律法は弱みある人々を立てて大祭司とすれども、

律法の後なる誓の御言は、永遠に全うせられ給へる  
 御子を大祭司となせり。

一 今いふ所の要點は斯くのごとき大祭司の  
 二 我らにある事なり。彼は天にて稜威の御座の右に坐し、  
 三 聖所および眞の幕屋に事へたまふ。この幕屋は人の  
 四 設くるものにあらず、主の設けたまふ所なり。おほよそ  
 五 大祭司の立てらるるは供物と犠牲とを獻げん爲なり。こ  
 六 の故に彼もまた獻ぐべき物あるべきなり。然るに若し地  
 七 に在さば、既に律法に備ひて供物を獻ぐる祭司等あるに  
 八 よりて祭司とはなり給はざるべし。彼らの事ふるは、天  
 九 にある物の型と影となり。モーセが幕屋を建てんとする  
 〇 時に「慎め、山にて汝が示されたる式に效ひて凡ての物  
 一 を造れ」との御告を受けしが如し。されどキリストは更  
 二 に勝れる約束に基きて立てられし勝れる契約の中保とな  
 三 りたれば、更に勝る職を受け給へり。かつ初の契約もし  
 四 虧くる所なくば、第二の契約を求むる事なかりしならん。  
 五 然るに彼らを咎めて言ひ給ふ

「主いひ給ふ「觀よ、  
 我イスラエルの家とユダの家とに、  
 新しき契約を設くる日來らん。」

この契約は我かれらの先祖の手を執りて、  
 エジプトの地より導き出しし時に  
 立てし所のごときにあらず。  
 彼らは我が契約にとどまらず、  
 我も彼らを顧みざりしなり」  
 と主いひ給ふ。  
 「されば、かの日の後に我がイスラエルの家と  
 立つる契約は是なり」  
 と主いひ給ふ。

「われ我が律法を彼らの念に置き、  
 そのところに之を記さん、  
 また我かれらの神となり、  
 彼らは我が民とならん。  
 彼らまた各人その國人に、  
 その兄弟に教へて、  
 なんぢ主を知れと言はざるべし。  
 そは小より大に至るまで、  
 皆われを知らん。  
 我もその不義を憐み、  
 この後また其の罪を思ひ出でざるべし」

と。既に「新し」と言ひ給へば、初のものゝを舊しとし給へるなり、舊びて衰ふるものは、消失せんとするなり。

**第九章** 初の契約には禮拜の定と世に屬する聖所とありき。設けられたる幕屋あり、前なるを聖所と稱へ、その中に燈臺と案と供のパンとあり。また第二の幕の後に至聖所と稱ふる幕屋あり。その中に金の香壇と金にて偏く覆ひたる契約の櫃とあり、この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、櫃の上に榮光のケルビムありて贖罪所を覆ふ。これらの物に就きては、今一々言ふこと能はず、此等のもの斯く備りたれば、祭司たちは常に前なる幕屋に入りて禮拜をおこなふ。されど奥なる幕屋には、大祭司のみ年に一度おのれと民との過失のために献ぐる血を携へて入るなり。之によりて聖靈は前なる幕屋のなほ存するあひだ、至聖所に入る道の未だ顯れざるを示し給ふ。この幕屋はその時のために設けられたる比喩なり、之に循ひて献げたる供物と犠牲とは、禮拜をなす者の良心を全うすること能はざりき。此等はただ食物・飲物さまざまの滯事などに係り、肉に屬する定にして、改革の時まで負せられたるのみ。

然れどキリストは來らんとする善き事の大祭司として來り、手にて造らぬ此の世に屬せぬ更に大なる全き幕屋を経て、山羊と犢との血を用ひず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終へたまへり。

もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉體を潔むることを得ば、まして永遠の御靈により瑕なくして己を神に献げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行爲より潔めて活ける神に事へしめざらんや。この故に彼は新しき契約の中保なり。これ初の契約の下に犯したる咎を贖ふべき死あるに よりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん爲なり。それ遺言は必ず遺言者の死を要す。遺言は遺言者死にてのち始めて効あり、遺言者の生くる間は効なきなり。この故に初の契約も血なくして立てしにあらざ。モーセ律法に循ひて諸般の誠命をすべての民に告げてのち、犢と山羊との血また水と緋色の毛とヒソブとをとりて、書および凡ての民にそそぎて言ふ。「これ神の汝らに命じたまふ契約の血なり」と。また同じく幕屋と祭のすべての器とに血をそそげり。おほよそ律法によれば、萬のもの血をもて潔めらる。もし血を流すこと

なくば、赦さるることなし。

この故に天に在るものに象りたる物は此等にて潔められ、天にある物は此等に勝りたる犠牲をもて潔めらるべきなり。キリストは眞のものに象れる、手にて造りたる聖所に入らず、眞の天に入りて今より我等のために神の前にあらはれ給ふ。これ大祭司が年ごとに他の物の血をもて聖所に入るとく、屢次おのれを献ぐる爲にあらず。もし然らずば世の創より以來しばしば苦難を受け給ふべきなり。然れど今、世の季にいたり己を犠牲となして罪を除かんために一たび現れたまへり。一たび死ぬること死にてのち審判を受くることとの人に定りたる如く、キリストも亦おほくの人の罪を負はんが爲に一たび献げられ、復罪を負ふことなく、己を待望む者に再び現れて救を得させ給ふべし。

**第十章** それ律法は來らんとする善き事の影にして眞の形にあらねば、年毎にたえず献ぐる同じ犠牲にて、神にきたる者を何時までも全うすることを得ざるなり。もし之を得ば、禮拜をなす者、一たび潔められて復心に罪を憶えねば、献ぐることを止めしならん。然れど犠牲によりて、年ごとに罪を憶ゆるなり。これ牡牛と

山羊との血は罪を除くこと能はざるに因る。この故にキリスト世に來るとき言ひ給ふ

「なんぢ犠牲と供物とを欲せず、唯わが爲に體を備へたまへり。

なんぢ燔祭と罪祭とを悦び給はず、その時われ言ふ「神よ、我なんぢの御意を行はんとて來る」

我につきて書の卷に錄されたるが如し」

先には「汝いけにへと供物と燔祭と罪祭と（即ち律法に循ひて献ぐる物）を欲せず、また悦ばず」と言ひ、後に「視よ、我なんぢの御意を行はんとて來る」と言ひ給へり。その後なる者を立てん爲に、その先なる者を除き給ふなり。この御意に適ひてイエス・キリストの體の一たび献げられしに由りて我らは潔められたり。すべての祭司は日毎に立ちて事へ、いつまでも罪を除くこと能はぬ同じ犠牲をしばしば献ぐ。然れどキリストは罪のために一つの犠牲を献げて限りなく神の右に坐し、斯くて己が仇の己が足臺とせられん時を待ちたまふ。それは潔めらるる者を一つの供物にて限りなく全うし給ふなり。聖靈も亦われらに之を證して、

「この日の後、われ彼らと立つる契約は是なり」と主いひ給ふ。また

「わが律法をその心に置き、その念に銘さん」と言ひ給ひて、

「この後また彼らの罪と不法を思ひ出してさるべし」と言ひたまふ。かかる赦ある上は、もはや罪のために献物をなす要なし。

然れば兄弟よ、我らはイエスの血により、その肉體たる慢を経て我らに開き給へる新しき活ける路より憚らずして至聖所に入ることを得、かつ神の家を治むる大なる祭司を得たれば、心は濯がれて良心の咎をさり、身は清き水にて洗はれ、眞の心と全き信仰とをもて神に近づくべし。また約束し給ひし者は忠實なれば、我ら言ひあらはす所の望を動かさずして堅く守り、互に相顧み、愛と善き業とを勵まし、集會をやむる或人の習慣の如くせず、互に勤め合ひ、かの日のいよいよ近づくを見て、ますます斯くの如くすべし。

我等もし眞理を知る知識をうけたる後、ことさらに罪を犯して止めずば、罪のために犠牲、もはや無し。ただ畏れつつ審判を待つことと、逆ふ者を焚きつくす

烈しき火とのみ遺るなり。モーセの律法を度する者は慈悲を受くることなく、二三人の證人によりて死に至る。まして神の子を陥みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩恵の御霊を侮る者の受くべき罰の重きこと如何許とおもふか。「仇を復すは我に在り、われ之を報いん」と言ひ、また「主その民を審かん」と言ひ給ひし者を我らは知るなり。活ける神の御手に陥るは畏るべきかな。

なんぢら御光を受けしのち苦難の大なる戦闘に耐へし前の日と思ひ出でてよ。或は誹謗と患難とに遭ひて觀物にせられ、或は斯かることに遭ふ人の友となれり。また囚人となれる者を思ひやり、永く存する尤も勝れる所有の己にあるを知りて、我が所有を奪はるるをも喜びて忍びたり。されば大なる報を受くべき汝らの確信を投げすつな。なんぢら神の御意を行ひて約束のものを受けん爲に必要なるは忍耐なり。

「いま暫くせば、來るべき者きたらん、遅からじ。我に屬ける義人は、信仰によりて活くべし。」

もし退かば、わが心これを喜ばじ。然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。

第一一章 それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を眞實とするなり。古への人は之によりて證せられたり。信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顯るる物より成らざるを悟る。信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ、之によりて正しと證せられたり。神その供物につきて證し給へばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なほ語る。信仰に由りてエノクは死を見ぬやうに移されたり。神これを移し給ひたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを證せられたり。信仰なくしては神に悦ばるること能はず。それは神に來る者は、神の在すことと神の己を求むる者に報い給ふことを、必ず信ずべければなり。信仰に由りてノアは、未だ見ざる事に つきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救はん爲に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。信仰に由りてアブラハムは召されしとき、業として受くべき地に出て往けとの命に違ひ、

その往く所を知らずして出て往けり。信仰により異國に在ることく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり。これ神の誓み造りたまふ基礎ある都を望めばなり。信仰に由りてサラも約束したまふ者の忠實なるを思ひし故に、年邁きたれど胤をやどす力を受けたり。この故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとく、また海邊の數へがたき砂のごとく夥多しく生れ出でたり。

彼等はみな信仰を懐きて死にたり。未だ約束の物を受けざりしが、遂にこれを見て迎へ、地にては旅人また寓れる者なるを言ひあらはせり。斯く言ふは、己が故郷を求むることを表すなり。若しその出でし處を念はば、歸るべき機ありしなるべし。されど彼らの墓所は天にある更に勝りたる所なり。この故に神は彼らの神と稱へらるるを恥とし給はず、それは彼等のために都を備へ給へばなり。

信仰に由りてアブラハムは試みられし時イサクを献げたり。彼は約束を喜び受けし者なるに、その獨子を献げたり。彼に對しては「イサクより出づる者なんぢの裔と稱へらるべし」と云ひ給ひしなり。かれ思へらく、

神は死人の中より之を甦へらすることを得給ふと、乃ち死より之を受けしが如くなりき。信仰に由りてイサクは來らんとする事につきヤコブとエサウとを祝福せり。信仰に由りてヤコブは死ぬる時ヨセフの子等をおのおの祝福し、その杖の頭によりて禮拜せり。信仰に由りてヨセフは生命の終らんとする時、イスラエルの子らを出て立つことに就きて語り、又おのが骨のことを命じたり。信仰に由りて兩親はモーセの生れたる時、その美しき子なるを見て、王の命をも畏れずして三月の間これを匿したり。信仰に由りてモーセは人と成りしときパロの女の子と稱へらるるを否み、罪のはかなき歡樂を受けんよりは、寧ろ神の民とともに苦しまんことを善しとし、キリストに因る誘はエジプトの財寶にまさる大なる富と思へり、これ報を望めばなり。信仰に由りて彼は王の憤恚を畏れずしてエジプトを去れり。これ見えざる者を見るがごとく耐ふる事をすればなり。信仰に由りて彼は過越と血を灑ぐことを行へり、これ初子を滅す者の彼らに觸れざらん爲なり。信仰に由りてイスラエル人は紅海を乾ける地のごとく渡りしが、エジプト人は然せんと試みて溺れ死にたり。信仰に由りて七日のあひだ廻り

たればエリコの石垣は崩れたり。信仰に由りて遊女ラハブは平和をもて間者を接けたれば、不従順の者とともに亡びざりき。この外なにを言ふべきか、ギデオンの、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル及び預言者たちに就きて語らば、時足らざるべし。彼らは信仰によりて國々を服へ、義をおこなひ、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢力を消し、劍の刃をのがれ、弱よりして強くせられ、戦争に勇ましくなり、異國人の軍勢を退かせたり。女は死にたる者の復活を得、ある人は更に勝りたる復活を得んために、免ざることを願はずして極刑を甘んじたり。その他の者は嘲笑と鞭と、また縲紲と牢獄との試練を受け、或者は石にて撃たれ、試みられ、鐵鋸にて挽かれ、劍にて殺され、羊・山羊の皮を纏ひて經あるき、乏しくなり、惱まれ、苦しめられ、(世は彼らを置くに堪へず)荒野と山と洞と地の穴とに墮れり。彼等はみな信仰に由りて證せられたれども約束のものを得ざりき。これ神は我らの爲に勝りたるものを備へ給ひし故に、彼らも我らと偕ならざれば、全うせらるる事なきなり。

第一二章 この故に我らは斯く多くの證人に雲のごと

く圍まれたれば、凡ての重荷と纏へる罪とを除け、忍耐をもて我らの前に置かれたる馳場をはしり、信仰の導師また之を全うする者なるイエスを仰ぎ見るべし。彼はその前に置かれたる歡喜のために、恥をも厭はずして十字架をしのび、遂に神の御座の右に坐し給へり。なんぢら倦み疲れて心を喪ふこと莫らんために、罪人らの斯く己に逆ひしことを忍び給へる者をおもへ。汝らは罪と闘ひて未だ血を流すまで抵抗しことなし。また子に告ぐるごとく汝らに告げ給ひし勸言を忘れたり。曰く「わが子よ、主の懲戒を輕んずるなかれ、主に戒めらるるとき倦むなかれ。そは主、その愛する者を懲しめ、凡てその受け給ふ子を鞭うち給へばなり」と。汝らの忍ぶは懲戒の爲なり、神は汝らの子のごとく待ひたまふ、誰か父の懲しめぬ子あらんや。凡ての人の受くる懲戒、もし汝らに無くば、それは私生兒にして眞の子にあらず、また我らの肉體の父は、我らを懲しめし者なるに尙これを敬へり、況して靈魂の父に服ひて生くることを爲ざらんや。そは肉體の父は暫くの間その心のままに懲しむることを爲しが、靈魂の父は我らを

益するために、その聖潔に與らせんとて懲しめ給へばなり。凡ての懲戒、今は喜ばしと見え、反つて悲しと見ゆ、されど後これに由りて練習する者に、義の平安なる果を結ばしむ。されば衰へたる手、弱りたる膝を強くし、足蹇へたる者の履み外すことなく、反つて醫されんために汝らの足に直なる途を備へよ。力めて凡ての人と和ぎ、自ら潔からんことを求めよ。もし潔からずば、主を見ること能はず。なんぢら慎め、恐らくは神の恩恵に至らぬ者あらん。恐らくは苦き根はえいて汝らを惱し、多くの人これに由りて汚されん。恐らくは淫行のもの、或は一飯のために長子の特權を賣りしエサウの如き妄なるもの起らん。汝らの知ることく、彼はそののち祝福を受けんと欲したれども棄てられ、涙を流して之を求めたれど回復の機を得ざりき。汝らの近づきたるは、火の燃ゆる觸り得べき山・黒雲・黒闇・嵐・ラツパの音、言の聲にあらず、この聲を聞きし者は此の上に言の加へられざらんことを願へり。これ「獸すら山に觸れなば、石にて撃るべし」と命ぜられしを、彼らは忍ぶこと能はざりし故なり。



三二 その現れしところ極めて怖しかりしかば、モーセは「われ  
 三三 怖れ多く怖れ戦けり」と云へり。されど汝らの近づきたる  
 三四 はシオンの山、活ける神の都なる天のエルサレム、千萬  
 三五 の御使の集會、天に録されたる長子どもの教會、萬民の  
 三六 審判主なる神、全うせられたる義人の靈魂、新約の仲保  
 三七 なるイエス及びアベルの血に勝りて物言ふ瀧の血なり、  
 三八 なんぢら心して語りたまふ者を拒むな、もし地に  
 三九 示し給ひし時これを拒みし者ども通る事なかりしなら  
 四〇 ば、況して天より示し給ふとき、我ら之を退けて通る  
 四一 ことを得んや。その時その聲地を震へり、されど今は  
 四二 誓ひて言ひたまふ「我なほ一たび地のみならず、天をも  
 四三 震はん」と。此の「なほ一度」とは震はれぬ物の存らん  
 四四 ために、震はるる物すなはち造られたる物の取り除かる  
 四五 ることを表すなり。この故に我らは震はれぬ國を受けた  
 四六 れば、感謝して恭敬と畏懼とをもて御心にかなふ奉仕  
 四七 を神になすべし。我らの神は燒き盡す火なればなり。  
 四八 兄弟の愛を常に保つべし。旅人の接待を  
 四九 忘るな、或人これに由り、知らずして御使を舍したり。  
 五〇 己も共に繋がるごとく囚人を思へ、また己も肉體に  
 五一 在れば、苦しむ者を思へ。凡ての人、婚姻のことを貴べ、

五二 また寢床を汚すな。神は淫行のもの、姦淫の者を審き給  
 五三 ふべければなり。金を愛することなく、有てるものを  
 五四 以て足れりとせよ。主みづから「われ更に汝を去らず、  
 五五 汝を捨てじ」と言ひ給ひたればなり。然れば我ら心を  
 五六 強くして斯く言はん  
 五七 「主わが助主なり、我おそれじ。  
 五八 人われに何をかなさん」  
 五九 と。神の言を汝らに語りて汝らを導きし者どもを思へ、  
 六〇 その行狀の終を見てその信仰に效へ。イエス・キリ  
 六一 ストは昨日も今日も永遠までも變り給ふことなし。各樣  
 六二 の異なる教のために惑さるるな。飲食によらず、恩恵に  
 六三 よりて心を堅うするは善し、飲食によりて歩みたる者は  
 六四 益を得ざりき。我らに祭壇あり、幕屋に事ふる者は之よ  
 六五 り食する權を有たず。大祭司、罪のために活物の血を  
 六六 携へて至聖所に入り、その活物の體は陣營の外にて燒か  
 六七 るるなり。この故にイエスも己が血をもて民を潔めんが  
 六八 爲に、門の外にて苦難を受け給へり。されば我らは彼の  
 六九 恥を負ひ、陣營より出でてその御許に往くべし。われら  
 七〇 此處には永遠の都なくして、ただ來らんとする者を求む  
 七一 ればなり。此の故に我らイエスによりて常に讚美の

二六 供物を神に獻ぐべし、乃ちその御名を頌むる口唇の果な  
 二七 り。かつ仁慈と施濟とを忘るるな、神は斯くのごとき供物  
 二八 を喜びたまふ。汝らを導く者に順ひ之に服せよ、彼らは  
 二九 己が事を神に陳ぶべき者なれば、汝らの靈魂のために  
 三〇 目を覺しをるなり。彼らを歎かせず、喜びて斯く爲さし  
 三一 めよ、然らずば汝らに益なかるべし。  
 三二 我らの爲に祈れ、我らは善き良心ありて凡てのこと  
 三三 正しく行はんと欲するを信するなり。われ速かに汝ら  
 三四 に歸ることを得んために、汝らの祈らんことを殊に  
 三五 求む。  
 三六 願はくは永遠の契約の血によりて、羊の大牧者とな  
 三七 れる我らの主イエスを、死人の中より引上げ給ひし平和  
 三八 の神、その悦びたまふ所を、イエス・キリストに由りて

三九 我らの衷に行ひ、御意を行はしめん爲に凡ての善き事に  
 四〇 つきて、汝らを全うし給はんことを。世々限りなく  
 四一 榮光、かれに在れ、アアメン。  
 四二 兄弟よ、請ふ我が勸の言を容れよ、我なんぢらに  
 四三 手短く書き贈りたるなり。なんぢら知れ、我らの兄弟  
 四四 テモテは釋されたり。彼もし速かに來らば、我かれと偕  
 四五 に汝らを見ん。  
 四六 汝らの凡ての導く者、および凡ての聖徒に安否を問  
 四七 へ。イタリヤの人々、なんぢらに安否を問ふ。  
 四八 願はくは恩恵なんぢら衆と偕に在らんことを。  
 四九 へブル人への書 をはり

ヤコブの書

第一章 神および主イエス・キリストの僕ヤコブ、散り居る十二の族の平安を祈る。

わが兄弟よ、なんぢら各様の試練に遭ふとき、只管これを歡喜とせよ。それは汝らの信仰の驗は、忍耐を生ずるを知らばなり。忍耐をして全き活動をなさしめよ。これ汝らが全くかつ備りて、缺くる所なからん爲なり。

汝らの中もし智慧の缺くる者あらば、咎むることなくまた惜む事なく、凡ての人に與ふる神に求むべし、さらば與へられん。但し疑ふことなく、信仰をもて求むべし。疑ふ者は、風に動かされて翻へる海の波のごときなり。かかる人は主より何物をも受くと思ふな。斯かる人は二心にして、凡てその歩むところの途定りなし。

卑き兄弟は、おのが高くせられたるを喜べ。富める者は、おのが卑くせられたるを喜べ。それは草の花のごとく過ぎゆくべければなり。日出て熱き風吹きて草を枯らせば、花落ちてその麗しき姿ほろぶ。富める者もまた斯くのごとく、その途の半にして已まづ消え失せん。試練に耐ふる者は幸福なり、之を善しとせらるる

時は、主のおのれを愛する者に、約束し給ひし生命の冠冕を受くべければなり。人誘はるるとき「神われを誘ひたまふ」と言ふな。神は惡に誘はれ給はず、又みづから人を誘ひ給ふことなし。人の誘はるるは己の慾に引かれて惑さるるなり。慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。わが愛する兄弟よ、自ら欺くな。凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、上より、もろもろの光の父より降るなり。父は變ることなく、また回轉の影もなき者なり。その造り給へる物の中に我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のままに眞理の言をもて、我らを生み給へり。

わが愛する兄弟よ、汝らは之を知る。されば、おのの聴くことを速かにし、語ることを遅くし、怒ることを遅くせよ。人の怒は神の義を行はざればなり。されば凡ての穢と溢るる惡とを捨て、柔和をもて其の植えられたる所の靈魂を救ひ得る言を受けよ。ただ御言を聞くのみにして、己を欺く者とならず、之を行ふ者となれ。それ御言を聞くのみにして之を行はぬ者は、鏡にて己が生來の顔を見る人に似たり。己をうつし見て立ち去れば、直ちにその如何なる姿なりしかを忘る。されど

全き律法、すなはち自由の律法を懇ろに見て離れぬ者は、業を行ふ者にして、聞きて忘るる者にあらず、その行爲によりて幸福ならん。人もし自ら信心ふかき者と思ひて、その舌に嚮を著けず、己が心を欺かば、その信心は空しきなり。父なる神の前に潔くして穢なき信心は、孤兒と寡婦とをその患難の時に見舞ひ、また自ら守りて世に汚されぬ是なり。

第二章 わが兄弟よ、榮光の主なる我らの主イエス・キリストに對する信仰を保たんには、人を偏り視るな。金の指輪をはめ華美なる衣を着たる人、なんぢらの會堂に入りきたり、また粗末なる衣を着たる貧しき者いり來らんに、汝等その華美なる衣を着たる人を重んじ視て「なんぢ此の善き處に坐せよ」と言ひ、また貧しき者に「なんぢ彼處に立つか、又はわが足下に坐せよ」と言はば、汝らの中に區別をなし、また惡しき思をもて審判人となるに非ずや。わが愛する兄弟よ、聴け、神は世の貧しき者を選びて信仰に富ませ、神を愛する者に約束し給ひし國の世嗣たらしめ給ひしに非ずや。然るに汝らは貧しき者を輕んじたり、汝らを虐げ、また裁判所に曳くものは、富める者にあらずや。彼らは汝らの上に

稱へらるる尊き名を汚すものに非ずや。汝等もし聖書にある「おのれの如く汝の隣を愛すべし」との尊き律法を全うせば、その爲すところ善し。されど若し人を偏り視ば、これ罪を行ふなり。律法、なんぢらを犯罪者と定めん。人、律法全體を守るとも、その一つに頭かば是すべてを犯すなり。それ「姦淫する勿れ」と宣ひし者、また「殺す勿れ」と宣ひたれば、なんぢ姦淫せずとも、若し人を殺さば律法を破る者となるなり。なんぢら自由の律法によりて審かれんとする者のごとく語り、かつ行ふべし。憐憫を行はぬ者は憐憫なき審判を受けん、憐憫は審判にむかひて勝ち誇るなり。

わが兄弟よ、人みづから信仰ありと言ひて、もし行爲なくば何の益かあらん、かかる信仰は彼を救ひ得んや。もし兄弟或は姉妹、裸體にて日用の食物に乏しからんとき、汝等のうち、或人これに「安らかにして往け、温かなれ、飽くことを得よ」といひて體に無くてならぬ物を與へずば、何の益かあらん。斯くのごとく信仰もし行爲なくば、死にたる者なり。人もまた言はん「なんぢ信仰あり、われ行爲あり、汝の行爲なき信仰を我に示せ、我わが行爲によりて信仰を汝に示さん」と。なんぢ

神は唯一なりと信ずるか、かく信ずるは善し、悪鬼も亦信じて慄けり。ああ虚しき人よ、なんぢ行爲なき信仰の徒然なるを知らんと欲するか。我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行爲によりて義とせられたるに非ずや。なんぢ見るべし、その信仰、行爲と共にはたらき、行爲によりて全うせられたるを。またアブラハム神を信じ、その信仰を義と認められたりと云へる聖書は成就し、かつ彼は神の友と稱へられたり。かく人の義とせらるるは、ただ信仰のみに由らずして行爲に由ることは、汝らの見る所なり。また遊女ラハブも使者を受け、これを他の途より去らせたるとき、行爲によりて義とせられたるに非ずや。靈魂なき體の死にたる者なるが如く、行爲なき信仰も死にたるものなり。

わが兄弟よ、なんぢら多く教師となるな、教師たる我らの更に厳しき審判を受けることを、汝ら知ればなり。我らは皆しぼしぼ蹟者なり、人もし言に踉蹌なくば、これ全き人にして全身に譽を著け得るなり。われら馬を己に馴はせんために轡をその口に置くときは、その全身を馴し得るなり。また船を見よ、その形は大きく、かつ激しき風に追はるるとも、最小き舵にて

舵人の欲するままに運すなり。斯くのごとく舌もまた小さいものなれど、その誇るところ大なり。視よ、いかに小さい火の、いかに大なる林を燃すかを。舌は火なり、不義の世界なり、舌は我らの肢體の中にて、全身を汚し、また地獄より燃え出て一生の車輪を燃すものなり。獸・鳥・匍ふもの・海にあるもの等、さまざまの種類のみな制せらる。既に人に制せられたり。されど誰も舌を制すること能はず、舌は動きて止まぬ惡にして死の毒の満つるものなり。われら之をもて主たる父を讃め、また之をもて神に象りて造られたる人を詛ふ。讚美と呪詛と同じ口より出づ。わが兄弟よ、かかる事はあるべきにあらず。泉は同じ穴より甘き水と苦き水とを出さんや。わが兄弟よ、無花果の樹オリーブの實を結び、葡萄の樹無花果の實を結ぶことを得んや、斯くのごとく鹽水は甘き水を出すこと能はず。

汝等のうち智くして慧き者は誰なるか、その人は善き行狀により柔和なる智慧をもて行爲を顯すべし。されど汝等もし心のうちに苦き妬と黨派心とを懷かば、誇るな、眞理に悖りて偽るな。かかる智慧は上より下るにあらず、地に屬し、情慾に屬し、惡鬼に屬する

者よ、心を潔よくせよ。なんぢら憫め、悲しめ、泣け、なんぢらの笑を悲歎に、なんぢらの歡喜を憂に易へよ。主の前に己を卑うせよ、然らば主なんぢらを高うし給はん。

兄弟よ、互に誇るな。兄弟を誇る者、兄弟を審く者は、これ律法を誹り、律法を審くなり。汝もし律法を審かば、律法をおこなふ者にあらずして審判人なり。立法者また審判者は唯一人にして、救ふことをも滅すことをも爲し得るなり。なんぢ誰なれば隣を審くか。

兄弟よ、互に誇るな。兄弟を誇る者、兄弟を審く者は、これ律法を誹り、律法を審くなり。汝もし律法を審かば、律法をおこなふ者にあらずして審判人なり。立法者また審判者は唯一人にして、救ふことをも滅すことをも爲し得るなり。なんぢ誰なれば隣を審くか。

汝等のうちの戦争は何處よりか、分争は何處よりか、汝らの肢體のうちに戦ふ怒り來るにあらざや。汝ら貪れども得ず、殺すことをなし、妬むことを爲れども得ること能はず。汝らは争ひまた戦す。汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。汝ら求めてなほ受けざるは慾のために費さんとして妄に求むるが故なり。森淫をおこなふ者よ、世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。聖書に「神は我らの衷に住ませ給ひし靈を、妬むほどに慕ひたまふ」と云へるを虚しきことと汝ら思ふか。神は更に大なる恩恵を賜ふ。されば言ふ「神は高ぶる者を拒ぎ、へりくだる者に恩恵を與へ給ふ」と。この故に汝ら神に服へ、惡魔に立ち向へ、さらば彼なんぢらに逃げ去らん。神に近づけ、さらば神なんぢらに近づき給はん。罪人よ、手を淨めよ、二心の

一年の間かしこに留り、賣買して利を得ん」と言ふ者よ、汝らは明日のことを知らず、汝らの生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。汝等その言ふところに易へて「王の御意ならば、我ら活きて此のこと、或は彼のことを爲さん」と言ふべきなり。されど今なんぢらは高ぶりて誇る、斯くのごとき誇はみな惡しきなり。人善を行ふことを知りて、之を行はぬは罪なり。

對ひて證をなし、かつ火のごとく汝らの肉を蝕はん。汝等この末の世に在りてなほ財を蓄へたり。視よ、汝等がその畑を刈り入れたる労働人に拂はざりし値は叫び、その刈りし者の呼聲は萬軍の主の耳に入れり。汝らは地にて奢り樂しみ、屠らるる日に在りて尙おのが心を飽かせり。汝らは正しき者を罪に定め、且これを殺せり、彼は汝らに抵抗することなし。

兄弟よ、主の來り給ふまで耐へ忍べ。視よ、農夫は地の貴き實を、前と後との雨を得るまで耐へ忍びて待つなり。汝らも耐へ忍べ、なんぢらの心を堅うせよ、主の來り給ふこと近づきたればなり。兄弟よ、互に怨言をいふな、恐らくは審かれん。視よ、審判主、門の前に立ちたまふ。兄弟よ、主の名によりて語りし預言者たちを苦難と耐忍との模範とせよ。視よ、我らは忍ぶ者を幸福なりと思ふ。なんぢらヨブの耐忍を聞けり、主の彼に成し給ひし果を見たり、則ち主は慈悲ふかく、かつ憐憫あるものなり。

わが兄弟よ、何事よりも先づ誓ふな、或は天、あるひは地、あるひは其の他のものを指して誓ふな。只なんぢら然りは然り否は否とせよ、罪に定めらるる事なか

らん爲なり。

汝等のうち苦しむ者あるか、その人、祈せよ。喜ぶ者あるか、その人、讚美せよ。汝等のうち病める者あるか、その人、教會の長老たちを招け。彼らは主の名により其の人に油をぬりて祈るべし。さらば信仰の祈は病める者を救はん、主かれを起し給はん、もし罪を犯しし事あらば赦されん。この故に互に罪を言ひ表し、かつ癒されんために相互に祈れ。正しき人の祈ははたらきて大なる力あり。エリヤは我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしかば、三年六個月のあひだ地に雨降らざりき。かくて再び祈りたれば、天雨を降らし、地その果を生ぜり。

わが兄弟よ、汝等のうち眞理より迷ふ者あらんに、誰か之を引回さば、その人は知れ、罪人をその迷へる道より引回す者は、かれの靈魂を死より救ひ、多くの罪を掩ふことを。

ヤコブの書を はり

ペテロの前の書

第一章 イエス・キリストの使徒ペテロ、書をポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに散りて宿れる者、即ち父なる神の預じめ知り給ふところに隨ひて、御靈の潔により柔順ならんため、イエス・キリストの血の灑を受けんために選ばれたる者に贈る。願はくは恩恵と平安と汝らに増さんことを。

讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫に隨ひ、イエス・キリストの死人の中より甦へり給へることに由り、我らを新に生れしめて生ける望を懐かせ、汝らの爲に天に蓄へある、朽ちず汚れず萎まざる嗣業を繼がしめ給へり。汝らは終のときに顯れんとて備りたる救を得んために、信仰によりて神の力に護らるるなり。この故に汝ら今しばしの程さまざまの試煉によりて憂へざるを得ずとも、なほ大に喜べり。汝らの信仰の驗は、壞つる金の火にためさるるよりも貴くして、イエス・キリストの現れ給ふとき譽と光榮と尊貴とを得べきなり。汝らイエスを見しことなけれど之を愛し、今見ざれども之を信じて、言ひがたく、かつ

光榮ある喜悅をもて喜ぶ。これ信仰の極、すなはち靈魂の救を受くるに因る。汝らの受くべき恩恵を預言したる預言者たちは、この救につきて具に尋ね查べたり。即ち彼らは己が中に在すキリストの靈の、キリストの受くべき苦難および其の後の榮光を預じめ證して、何時のころ如何なる時を示し給ひしかを查べたり。彼等はその勤むるところ己のためにあらず、汝らの爲なることを默示によりて知れり。即ち天より遣され給へる聖靈によりて福音を宣ぶる者ども、汝らに傳へたる所にして、御使たちも之を懇ろに視んと欲するなり。

この故に、なんぢら心の腰に帶し、慎みてイエス・キリストの現れ給ふときに、與へられんとする恩恵を疑はずして望め。従順なる子等の如くして、前の無知なりし時の慾に效はず、汝らを召し給ひし聖者に效ひて、自ら凡ての行狀に潔かれ。録して「われ聖なれば、汝らも聖なるべし」とあればなり。また偏ることなく各人の業に隨ひて審きたまふ者を父と呼ばば、畏をもて世に寓る時を過せ。なんぢらが先祖たちより傳はりたる虚しき行狀より贖はれしは、銀や金のごとき朽つる物に由るにあらず、瑕なく汚點なき羔羊の如きキリストの

二〇 貴き血に由ることを知ればなり。彼は世の創の前より  
 二一 預じめ知られたまひしが、この末の世に現れ給へり。  
 二二 これは彼を死人の中より甦へらせて之に榮光を與へ給  
 二三 ひし神を、彼によりて信する汝らの爲なり、この故に  
 二四 汝らの信仰と希望とは神に由れり。なんぢら眞理に従ふ  
 二五 によりて靈魂をきよめ、偽りなく兄弟を愛するに至り  
 二六 たれば、心より熱く相愛せよ。汝らは朽つる種に由りて、  
 二七 朽つることなき種、すなはち神の活ける限りなく保つ言  
 二八 に由りて新に生れたればなり。

二九 「人はみな草のごとく、  
 三〇 その光榮はみな草の花の如し、  
 三一 草は枯れ、花は落つ。

三二 「されど主の御言は永遠に保つなり」  
 三三 汝らに宣傳へたる福音の言は即ちこれなり。

三四 嫉妬および凡ての謗を棄てて、いま生れし嬰兒のごとく  
 三五 靈の眞の乳を慕へ、之により育ちて教に至らん爲なり。  
 三六 なんぢら既に主の仁慈あることを味ひ知りたらんには、  
 三七 然すべきなり。主は人に棄てられ給へど、神に選ばれた  
 三八 る貴き活ける石なり。なんぢら彼にきたり、活ける石の

三九 ごとく建てられて靈の家となれ。これ潔き祭司となり、  
 四〇 イエス・キリストに由りて神に喜ばるる靈の犠牲を献げ  
 四一 ん爲なり。聖書に  
 四二 「視よ、選ばれたる貴き  
 四三 隅の首石を我シオンに置く。  
 四四 之に依頼む者は辱しめられじ」  
 四五 とあるなり。されば信する汝らには尊きなれど、信ぜぬ  
 四六 者には「造家者らの棄てたる石は、隅の首石となれる」  
 四七 にて、「つまづく石、礙ぐる岩」となるなり。彼らは服は  
 四八 ぬに因りて御言に順く。これは斯く定められたるなり。  
 四九 されど汝らは選ばれたる族、王なる祭司、潔き國人、  
 五〇 神に属ける民なり、これ汝らを暗黒より召して、己の妙  
 五一 なる光に入れ給ひし者の譽を顯させん爲なり。なんぢら  
 五二 前には民にあらざりしが、今は神の民なり。前には憐憫  
 五三 を蒙らざりしが、今は憐憫を蒙れり。  
 五四 愛する者よ、われ汝らに勸む。汝らは旅人また宿れ  
 五五 る者なれば、靈魂に逆ひて戦ふ肉の慾を避け、異邦人の  
 五六 中にありて行狀を美しく爲よ、これ汝らを誇りて惡を  
 五七 おこなふ者と云へる人々の、汝らの善き行爲を見て、反  
 五八 つて眷顧の日に神を崇めん爲なり。

三九 なんぢら主のために凡て人の立てたる制度に服へ。  
 四〇 或は上に在る王、或は惡をおこなふ者を罰し、善をおこ  
 四一 なふ者を賞せんために王より遣されたる司に服へ。善を  
 四二 行ひて愚なる人の無知の言を止むるは、神の御意なれば  
 四三 なり。なんぢら自由なる者のごとくすとも、その自由を  
 四四 もて惡の覆となさず、神の僕のごとくせよ。なんぢら  
 四五 凡ての人を敬ひ、兄弟を愛し、神を畏れ、王を尊べ。  
 四六 僕たる者よ、大なる畏をもて主人に服へ、常に善き  
 四七 もの、寛容なる者にのみならず、情なき者にも服へ。人  
 四八 もし受くべからざる苦難を受け、神を認むるに因りて  
 四九 憂に堪ふる事をせば、これ譽むべきなり。もし罪を犯し  
 五〇 て挫たるるとき、之を忍ぶとも何の功かある。されど  
 五一 若し善を行ひてなほ苦しめらるる時これを忍ばば、これ  
 五二 神の譽めたまふ所なり。汝らは之がために召されたり、  
 五三 キリストも汝らの爲に苦難をうけ、汝らを其の足跡に  
 五四 隨はしめんとて模範を遺し給へるなり。彼は罪を犯さ  
 五五 ず、その口に虚偽なく、また罵られて罵らず、苦しめら  
 五六 れて脅かさず、正しく審きたまふ者に己を委ね、木の上  
 五七 に懸りて、みづから我らの罪を己が身に負ひ給へり。  
 五八 これ我らが罪に就きて死に、義に就きて生きん爲なり。

五九 汝らは彼の傷によりて癒されたり。なんぢら前には羊の  
 六〇 ごとく迷ひたりしが、今は汝らの靈魂の牧者たる監督に  
 六一 歸りたり。

六二 妻たる者よ、汝らもその夫に服へ。たとひ  
 六三 御言に違はぬ夫ありとも、汝らの潔く、かつ恭敬しき  
 六四 行狀を見て、言によらず妻の行狀によりて教に入ら  
 六五 ん爲なり。汝らは髪を辨み、金をかけ、衣服を装ふごと  
 六六 き表面のものを飾とせず、心のうちの隠れたる人、すな  
 六七 はち柔和、恬靜なる靈の朽ちぬ物を飾とすべし。是こそ  
 六八 は神の前にて價貴きものなれ。むかし神に望を置き  
 六九 たる潔き女たちも、かくの如くその夫に服ひて己を飾り  
 七〇 たり。即ちサラがアブラハムを主と呼びて之に服ひし如  
 七一 し。汝らも善を行ひて何事にも戦き懼れずばサラの子  
 七二 たるなり。

七三 夫たる者よ、汝らその妻を己より弱き器の如くし、  
 七四 知識にしたがひて憐に棲み、生命の恩恵を共に嗣ぐ者と  
 七五 して之を貴べ、これ汝らの祈に妨害なからん爲なり。  
 七六 終に言ふ。汝らみな心を同じうし、互に思ひ遣り、  
 七七 兄弟を愛し、憐み、へりくだり、惡をもて惡に、誇をも  
 七八 て誇に報ゆることなく、反つて之を祝福せよ。汝らの

召されたるは祝福を嗣がん爲なればなり。

「生命を愛し、善き日を送らんとする者は、

舌を抑へて悪を避け、

口唇を抑へて虚偽を語らず、

悪より遠ざかりて善をおこなひ、平和を求めて

之を追ふべし。

それ主の目は義人の上にとどまり、

その耳は彼らの祈にかたむく。

されど主の御顔は悪をおこなふ者に向ふ」

汝等もし善に熱心ならば、誰か汝らを害はん。たと

ひ義のために苦しめらるる事ありとも、汝ら幸福なり

「彼らの威嚇を懼るな、また心を騒がすな」心の中に

キリストを主と崇めよ、また汝らの衷にある望の理由を

問ふ人には、柔和と畏懼とをもて常に辯明すべき準備を

なし、かつ善き良心を保て。これ汝等のキリストに在り

て行ふ善き行状を罵る者の、その誇ることに就きて自

ら愧ぢん爲なり。もし善をおこなひて苦難を受くること

神の御意ならば、悪を行ひて苦難を受くるに勝るなり。

キリストも汝らを神に近づかせんとて、正しきもの

正しからぬ者に代りて、一たび罪のために死に給へり、

彼は肉體にて殺され、靈にて生かされ給へるなり。また

靈にて往き、獄にある靈に宣傳へたまへり。これらの靈

は、昔ノアの時代に方舟の備へらるるあひだ寛容をもて

神の待ち給へるとき、服はざりし者どもなり、その方舟

に入り水を経て救はれし者は、僅にしてただ八人なり

き。その水に象れるバプテスマは肉の汚穢を除くにあら

ず、善き良心の神に對する要求にして、イエス・キリス

トの復活によりて今なんぢらを救ふ。彼は天に昇りて

神の右に在す。御使たち及びもろもろの權威と能力とは

彼に服ふなり。

キリスト肉體にて苦難を受け給ひたれば、

汝らも亦おなじ心をもて自ら鑑へ。——肉體にて苦難

を受くる者は罪を止むるなり——これ今よりのち、人の

慾に従はず、神の御意に従ひて、肉體に寓れる殘の時を

過さん爲なり。なんぢら過ぎにし日は、異邦人の好む所

をおこなひ、好色・慾情・酩酊・宴樂・暴飲・律法にかな

はぬ偶像崇拜に歩みて、もはや足れり。彼らは汝らの

己とともに放蕩の極に走らぬを怪しみて譏るなり。彼ら

は生ける者と死にたる者とを審く準備をなし給へる者に

己のことを陳ぶべし。福音の死にたる者に宣傳へられし

は、彼らが肉體にて人のごとく審かれ、靈にて神のごと

く生きん爲なり。

萬の物のをはり近づけり、然れば汝ら心を慥に

し、慎みて祈せよ。何事よりも先づ互に熱く相愛せよ。

愛は多くの罪を掩へばなり。また吝むことなく互に懇

ろに待せ。神のさまざまの恩恵を掌どる善き家司の

ごとく、各人その受けし賜物をもて互に事へよ。もし語

るならば、神の言をかたる者のごとく語り、事ふるなら

ば、神の與へたまふ能力を受けたる者のごとく事へよ。

是イエス・キリストによりて事々に神の崇められ給はん

爲なり。榮光と權力とは世々限りなく彼に歸するなり、

アマメン。

愛する者よ、汝らを試みんとて來れる火のごとき

試煉を異なる事として怪しまず、反つてキリストの苦難

に與れば、與るほど喜べ、なんぢら彼の榮光の顯れん

時にも喜び樂しまん爲なり。もし汝等キリストの名の

ために誇られなば幸福なり。榮光の御靈すなはち神の

御靈なんぢらの上に留り給へばなり。汝等のうち誰にて

も或は殺人、あるひは盗人、あるひは悪を行ふ者、ある

ひは妄に他人の事に干渉する者となりて苦難に遭ふな。

されど若しキリステアンたるをもて苦難を受けなば、

之を取づることなく、反つて此の名によりて神を崇め

よ。既に時いたれり、審判は神の家より始るべし。まづ

我等より始るとせば、神の福音に従はざる者のその結局

は如何にぞや。義人もし辛うじて救はるるならば、

不敬虔なるもの、罪ある者は何處にか立たん。されば

神の御意に従ひて苦難を受くる者は、善を行ひて己が

靈魂を眞實なる造物主にゆだね奉るべし。

五 五 われ汝らの中なる長老たちに勸む（我は

汝らと同じく長老たる者、またキリストの苦難の證人

顯れんとする榮光に與る者なり）汝らの中にある神の

群羊を牧へ。止むを得ずして爲さず、神に従ひて心より

爲し、利を貪るために爲さず、悦びてなし、委ねられた

る者の主とならず、群羊の模範となれ。さらば大牧者の

現れ給ふとき、萎まさる光榮の冠冕を受けん。若き者

よ、なんぢら長老たちに服へ、かつ皆たがひに謙遜を

まとへ「神は高ぶる者を拒ぎ、へりくだる者に恩恵を

與へ給ふ」この故に神の能力ある御手の下に己を卑う

せよ、さらば時に及びて神なんぢらを高らし給はん。

又もろもろの心勞を神に委ねよ、神なんぢらの爲に

八 慮ばかり給へばなり。憤みて目を覺しをれ、汝らの仇なる惡魔、ほゆる獅子のごとく、歴廻りて呑むべきものを尋ぬ。なんぢら信仰を堅うして彼を禦げ、なんぢらは世にある兄弟たちの同じ苦難に遭ふを知らばなり。もろもろの恩恵の神、すなはち永遠の榮光を受けしめんとて、キリストによりて汝らを召し給へる神は、汝らが暫く苦難をうくる後、なんぢらを全うし、堅うし、強くして、その基を定め給はん。願はくは權力世々限りなく神にあれ、アマメン。

三 われ忠實なる兄弟なりと思ふシルワ、に由りて、

簡單に書き贈りて汝らに勧め、かつ此は神の眞の恩恵なることを證す、汝等この恩恵に立て。汝らと共に選ばれてパピロンに在る教會、なんぢらに安否を問ふ、わが子マルコも安否を問ふ。なんぢら愛の接吻をもて互に安否を問へ。

願はくはキリストに在る汝ら衆に平安あらんことを。

ペテロの前の書 をはり

ペテロの後の書

一 イエス・キリストの僕また使徒なるシメオン・ペテロ、書を我らの神および救主イエス・キリストの義によりて、我らと同じ貴き信仰を受けたる者に贈る。願はくは神および我らの主イエスを知るによりて、恩恵と平安と汝らに増さんことを。

二 キリストの神たる能力は、生命と敬虔とに係る凡てのものを我らに賜へり。是おのれの榮光と徳とをもて召し給へる者を我ら知るに因りてなり。その榮光と徳とによりて我らに貴き大なる約束を賜へり、これは汝らが世に在る慾の滅亡をのがれ、神の性質に與る者とならん爲なり。この故に勵み勉めて汝らの信仰に徳を加へ、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に敬虔を、敬虔に兄弟の愛を、兄弟の愛に博愛を加へよ。

三 此等のもの汝らの衷にありて彌増すときは、汝等われらの主イエス・キリストを知るに怠ることなく、實を結ばぬこと無きに至らん。此等のもの無きは盲人にして遠く見ること能はず、己が舊き罪を潔められしことを忘れたるなり。この故に兄弟よ、ますます勵みて汝らの

召されたること、選ばれたることを堅うせよ。若し此等のことを行はば蹟くことなからん。かくて汝らは我らの主なる救主イエス・キリストの永遠の國に入る恩恵を豊に與へられん。

二 されば汝らは此等のことを知り、既に受けたる眞理に堅うせられたれど、我つねに此等のことを思ひ出させんとするなり。我は尙この幕屋に居るあひだ、汝らに思ひ出させて勵ますを正當なりと思ふ。そは我らの主イエス・キリストの我に示し給へることく、我わが幕屋を脱ぎ去ることの速かなるを知らばなり。我また汝等をして我が世を去らん後にも、常に此等のことを思ひ出させんと勉むべし。我らは我らの主イエス・キリストの能力と來りたまふ事とを汝らに告ぐるに、巧なる作話を用ひざりき、我らは親しくその稜威を見し者なり。いとも貴き榮光の中より聲出でて「こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ」と言ひ給へるとき、主は父なる神より尊貴と榮光とを受け給へり。我らも彼と偕に聖なる山に在りしとき、天より出づる此の聲をきけり。かくて我らが有てる預言の言は堅うせられたり。汝等この言を暗き處にかがやく燈火として、夜明け、明星の汝らの心の

中ちゆうにいづるまで顧かへりみるは善よし。なんぢら先まづづ知しれ、聖書せいしょの預言よげんは、すべて己おのがままに釋はなくべきものにあらぬを。  
 預言よげんは人の心こころより出てしにあらず、人々ひとびと聖靈せいれいに動かさ  
 れ、神かみによつて語かたれるものなればなり。  
 第二に章まは されど民たみのうちには偽預言者いつはりよげんしやおこりき、その  
 如ごとく汝なんぢらの中ちゆうにも偽教師いつはりかぎうしあらん。彼かれらは滅亡めつじやうにいたる  
 異端いたんを持ち入れ、己おのれらを買かひひ給たまひし主しゆをさへ呑のみみて、  
 速すみかなる滅亡めつじやうを自ら招まねくなり。また多くの人ひとかれらの  
 好色かうしやくに隨したがはん、之これによりて眞まことの道みちは識しらるべし。彼かれらは  
 貪慾こんよくによりて飾言しやくごんを設たてけ、汝等なんぢらより利りをとらん。彼かれら  
 の審判しんぱんは古いにしへより定められたれば遅おそからず、その滅亡めつじやうは  
 寝ねず。神かみは罪つみを犯とがしし御使みつかひたちを救すくはずして地獄じやくに  
 投げいれ、之これを黒闇くろくの穴あなにおきて審判しんぱんの時ときまで看守くわんしゆし、  
 又またまた古いにしへき世よを容ゆるさずして、ただ義よきの宣傳者せんぷうしやなるノアと  
 他ほかの七人しちにんとをのみ護まもり、敬虔けいけんならぬ者の世よに洪水こうすいを來きたら  
 せ、またソドムとゴモラとの町まちを滅亡めつじやうに定さだめて灰はいとな  
 し、後の不敬虔ふけいけんをおこなふ者の鑑かたしとし、ただ無法むぼうの者ものど  
 もの好色かうしやくの舉動きゆうどうを憂うれひし正ただしき口くちのみの救すくひ給たまへり。  
 (この正ただしき人は彼かれらの中ちゆうに住すみて、日々ひびその不法ふぼうの行爲ぎやうゐ  
 を見聞みきこして、己おのが正ただしき心こころを傷いためたり)かく主しゆは敬虔けいけんなる

者ものを試煉しけんの中ちゆうより救すくひ、また正ただしからぬ者を審判しんぱんの日ひま  
 て看守くわんしゆして之これを罰ばつし、別わかけて、内うちに隨したがひて、汚けがれたる  
 情慾じやうよくのうちを歩あみ、權けんある者を輕かろんずる者を罰ばつすること  
 を知り給たまふ。この曹輩そうはいは膽太たんたく放縱はうじやうにして、尊たふき者ものども  
 を識しりて畏おそれぬなり。御使みつかひたちはかの尊たふき者ものどもに勝まさり  
 て、大なる權勢けんせいと能力ちからとあれど、彼かれらを主しゆの御前みまへに識しり  
 訴うぐることをせず。然しかれど、かの曹輩そうはいは恰あたり捕とらへられ  
 居ゐらるるために生うまれたる辨別べんべつなき生物せいぶつのごとし、知らぬ  
 ことを識しり、不義ふぎの價あてをえて必ず亡なざるべし。彼かれらは  
 晝ひるもなほ酒食しゆじきを快楽くわいらくとし誘惑よほを樂たのしみ、汝等なんぢらと共に宴席うたげ  
 に與ありて、汚點おとしとなり瑕けがれとなる。その目は淫婦いんぷにて滿みち  
 罪つみに飽あくことなし、彼かれらは靈魂たまごの定さだめらぬ者を感あはし、そ  
 の心こころは貪慾こんよくに慣なれて呪詛ののりの子こたり。彼かれらは正ただしき道を  
 離はなれて迷まよひいて、ベオルの子こバラムの道みちに隨したがへり。バラ  
 ムは不義ふぎの報むくいを愛あいして、その不法ふぼうを咎とがめられたり。物  
 言ものごといはぬ驢馬ろば、人の聲こゑして語り、かの預言者よげんしやの狂くるを止め  
 なければなり。この曹輩そうはいは水みづなき井いなり、颶風くわふに逐おはるる  
 雲霧くもぎりなり、黒くろき闇くらみかれらの爲ために備たもたへられたり。彼かれらは  
 虚うそしき誇こほりをかたり、迷まよの中ちゆうにある者ものどもより辛あうじて  
 遁にげれたる者を、肉にくの慾よくと好色かうしやくとをもて感あはし、之これに自由じゆうを

與あふることを約やくすれど、自己みづかは滅亡めつじやうの奴隸ぬれいたり、敗くくる  
 者は勝かちつ者に奴隸ぬれいとせらるればなり。彼等かれらもし主しゆなる  
 救主きうしゆイエス・キリストを知るによりて、世よの汚穢けがれをのが  
 れしもの、復またこれに纏まとはれて敗くくる時は、その後の状あはれは  
 前まへよりもなほ悪わるくなるなり。義よきの道みちを知しりて、その  
 傳つたへられたる聖せいなる誠命まことのみことを去いり往いかんよりは、寧むしろ義よきの  
 道みちを知らぬを勝かちれりとす。但ただ諺ことわざに「犬いぬおのが吐はきたる物もの  
 に歸かへり來きり、豚身とんしんを洗あらひてまた泥どろの中ちゆうに轉まぶ」と云いへる  
 は眞まことにして、能あたく彼かれらに當あたれり。  
 第三に章まは 愛あいする者ものよ、われ今いまこの第二にの書かきを汝等なんぢらに  
 書かき贈たまり、第一いちなる之これをもて汝等なんぢらに思おもひ出いさせ、そ  
 の潔けがれなき心こころを勵むまし、聖せいなる預言者よげんしやたちの預よめ云いひし  
 言ことば、および汝等なんぢらの使徒しとたちの傳つたへし主しゆなる救主きうしゆの誠命まことのみこと  
 を憶おぼえさせんとす。汝等なんぢらまづ知しれ、末すえの世よには嘲あざわる者もの  
 嘲笑あざわをもて來きり、おのが慾よくに隨したがひて歩あみ、かつ言ことばはん  
 『主しゆの來きたりたまふ約束やくそくは何處いづこにありや、先祖せんぞたちの眠ひり  
 しのち、萬よろのもの開關かいかんの初はじと等ひとししくして變かはらざるなり』  
 と。彼等かれらは殊更ことごとくに次の事ことを知らざるなり、即すなはち古いにしへ神かみの  
 言ことばによりて天あめあり、地ちは水みづより出いでて水みづによりて成な立ち  
 しが、その時ときの世よは之これにより水みづに淹ひはれて滅めびたり。

されど同じ御言みことばによりて今の天あめと地ちとは著たへられ、火ひ  
 にて燒やかれん爲ために、敬虔けいけんならぬ人々ひとびとの審判しんぱんと滅亡めつじやうとの日ひ  
 まで保たもたふるなり。  
 愛あいする者ものよ、なんぢら此この一事いじを忘わするな。主しゆの御前みまへ  
 には一日いちにちは千年せんねんのごとく、千年せんねんは一日いちにちのごとし。主しゆの  
 約束やくそくを果はすに遅おそきは、或ある人の遅おそしと思おもふが如ごときにあらず、  
 ただ一人ひとりの亡なぶるをも望のぞみ給たまはず、凡すべての人の悔改くわいかい  
 に至いたらんことを望のぞみて汝等なんぢらを永とこく忍しのび給たまふなり。されど  
 主しゆの日は盜人ぬすびとのごとく來きたらん、その日には天あめとどろきて  
 去いり、もろもろの天體てんたいは燒やけ崩くづれ、地ちとその中ちゆうにある工わざ  
 とは燒やけ盡じんきん。かく此等これらのものはみな崩くづるべけれど、  
 汝等なんぢらいかに潔けがれなき行狀ぎやうじやうと敬虔けいけんとをもて、神かみの日の來きたるを  
 待まちち之これを速すみかにせんことを勉つとむべきにあらずや、その日ひ  
 には天あめ燃もえ崩くづれ、もろもろの天體てんたい燒やけ溶とけん。されど  
 我等われらは神かみの約束やくそくによりて、義よきの住すむところの新あらたき天あめと  
 新あらたき地ちとを待まちつ。  
 この故ゆゑに愛あいする者ものよ、汝等なんぢらこれを待まちてば、神かみの前に  
 汚點おとしなく瑕けがれなく安やす然ぜんに在あらんことを勉つとめよ。且またわれらの  
 主しゆの寛容くわんようを救すくなりと思おもへ、これは我等われらの愛あいする兄弟あひなパウ  
 ロも、その與あへられたる智慧ちゐにしたがひ會あつて汝等なんぢらに書かき



六 贈りし如し。彼はその凡ての書にも此等のことに就きて  
 語る、その中には悟りがたき所あり、無學のもの心の  
 定らぬ者は、他の聖書のごとく之をも強ひ釋きて自ら  
 滅亡を招くなり。されば愛する者よ、なんぢら預じめ  
 七 之を知れば、慎みて無法の者の迷にさそはれて己が堅き

八 心を失はず、つます我らの主なる教主イエス・キリ  
 ストの恩寵と主を知る知識とに進め。願はくは今および  
 永遠の日までも榮光かれに在らんことを。  
 ペテロの後の書 をはり

ヨハネの第一の書

一 太初より有りし所のもの、我らが聞きし  
 二 ところ、目にて見し所、つらつら視て手觸りし所のもの、  
 三 即ち生命の言につきて、——この生命すてに顯れ、われ  
 四 ら之を見て證をなし、その曾て父と偕に在して、今われ  
 五 らに顯れ給へる永遠の生命を汝らに告ぐ——我らの  
 六 見しところ聞きし所を汝らに告ぐ、これ汝等をも我らの  
 七 交際に與らしめん爲なり。我らは父および其の子イエ  
 八 ス・キリストの交際に與るなり。此等のことを書き贈る  
 九 は、我らの喜悅の満ちん爲なり。  
 一〇 我らが彼より聞きて、また汝らに告ぐる音信は是な  
 一 一 り、即ち神は光にして少しの暗き所なし。もし神と交際  
 一 二 ありと言ひて暗きうちを歩まば、我ら偽りて眞理を行は  
 一 三 ざるなり。もし神の光のうちに在すとく光のうちに  
 一 四 歩まば、我ら互に交際を得、また其の子イエスの血、  
 一 五 すべての罪より我らを潔む。もし罪なしと言はば、是  
 一 六 みづから欺けるにて眞理われらの中になし。もし己の罪  
 一 七 を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ、我らの  
 一 八 罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん。もし罪を

犯したる事なしといはば、これ神を偽者とするなり、  
 神の言われらの中になし。

一 わが若子よ、これらの事を書き贈るは、汝  
 二 らが罪を犯さざらん爲なり。人もし罪を犯さば、我等の  
 三 ために父の前に助主あり、即ち義なるイエス・キリスト  
 四 なり。彼は我らの罪のために宥の供物たり、嘗に我ら  
 五 の爲のみならず、また全世界の爲なり。我らその誠命を  
 六 守らば、之によりて彼を知ること自ら悟る。「われ  
 七 彼を知る」と言ひて其の誠命を守らぬ者は、偽者にして  
 八 眞理その裏になし。その御言を守る者は、誠に神の愛、  
 九 その裏に全うせらる。之によりて我ら彼に在ることを悟  
 一〇 る。彼に居ると言ふ者は、彼の歩み給ひしごとく自ら  
 一 一 歩むべきなり。  
 一 二 愛する者よ、わが汝らに書き贈るは、新しき誠命に  
 一 三 あらず、汝らが初より有てる舊き誠命なり。この舊き  
 一 四 誠命は汝らが聞きし所の言なり。然れど我が汝らに書き  
 一 五 贈るところは、また新しき誠命にして、主にも汝らにも  
 一 六 眞なり、その故は眞の光すてに照りて、暗黒はややに  
 一 七 過ぎ去ればなり。光に在りと言ひて其の兄弟を憎むもの  
 一 八 は、今もなほ暗黒にあるなり。その兄弟を愛する者は、

光に居りて顛蹟その衷になし。その兄弟を憎む者は暗黒にあり、暗きうちを歩みて己が往くところを知らず、これ暗黒はその眼を瞶したればなり。

若子よ、我この書を汝らに贈るは、なんぢら主の御名によりて罪を赦されたるに因る。父たちよ、我この書を汝らに贈るは、汝ら太初より在す者を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈るは、なんぢら悪しき者に勝ちたるに因る。子供よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら御父を知りたるに因る。父たちよ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら太初より在す者を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら強くかつ神の言その衷に留り、また悪しき者に勝ちたるに因る。なんぢら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし。おほよそ世にあるもの、即ち肉の慾、眼の慾、所有の誇などは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。世と世の慾とは過ぎ往く、されど神の御意をおこなふ者は永遠に存るなり。

子供よ、今は末の時なり、汝らが非キリスト來らんと聞きしごとく、今や非キリスト多く起れり、之に

よりて我等その末の時なるを知る。彼らは我等より出てゆきたれど、固より我等のものに非ざりき。我らの屬ならば、我らと共に留りしならん。されどその出てゆきしは、皆われらの屬ならぬことの顯れん爲なり。汝らは聖なる者より油を注がれたれば、凡ての事を知る。我この書を汝らに贈るは、汝ら眞理を知らぬ故にあらず、眞理を知り、かつ凡ての虚偽の眞理より出てぬことを知るに因る。偽者は誰なるか、イエスのキリストなるを否む者にあらずや。御父と御子とを否む者は非キリストなり。凡そ御子を否む者は御父をも有たず、御子を言ひあらはす者は御父をも有つなり。初より聞きし所を汝らの衷に居らしめよ。初より聞きしところ汝らの衷に居らば、汝らも御子と御父とに居らん。我らに約し給ひし約束は是なり、即ち永遠の生命なり。汝らを惑す者どもに就きて我これらの事を書き贈る。なんぢらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教ふる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教へ、かつ眞にして虚偽なし。汝等はその教へしごとく主に居るなり。されば若子よ、主に居れ。これ主の現れ給ふときに隠することなく、其の來り給ふときに恥づることなか

らん爲なり。なんぢら主を正しと知らば、凡て正義をおこなふ者の主より生れたることを知らん。

第三章

視よ、父の我らに賜ひし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と稱へらる。既に神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顯れず、主の現れたまふ時われら之に肖んことを知る。我らその眞の状を見るべければなり。凡て主による此の希望を懐く者は、その清きがごとく己を潔くす。すべて罪をおこなふ者は不法を行ふなり、罪は即ち不法なり。汝らは知る、主の現れ給ひしは罪を除かん爲なるを。主には罪あることなし。おほよそ主に居る者は罪を犯さず、おほよそ罪を犯す者は未だ主を見ず、主を知らぬなり。若子よ、人に惑さるな、義をおこなふ者は義人なり、即ち主の義なるがごとし。罪を行ふものは悪魔より出づ、悪魔は初より罪を犯せばなり。神の子の現れ給ひしは、悪魔の業を毀たん爲なり。凡て神より生るる者は罪を行はず、神の種、その衷に止るに由る。彼は神より生るる故に罪を犯すこと能はず。之に由りて神の子と悪魔の子とは明かなり。おほよそ義を行はぬ者および己が兄弟を愛せぬ者は

神より出づるにあらず。われら互に相愛すべきは汝らが初より聞きし音信なり。カインに效ふな、彼は悪しき者より出て己が兄弟を殺せり。何故ころしたるか、己が行爲は悪しく、その兄弟の行爲は正しかりしに因る。

兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪しむな。われら兄弟を愛するによりて、死より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。おほよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。主は我らの爲に生命を捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。世の財寶をもちて兄弟の窮乏を見、反つて憐憫の心を閉づる者は、いかて神の愛その衷にあらんや。若子よ、われら言と舌とをもて相愛することなく、行爲と眞實とを以てすべし。之に由りて我ら眞理より出でしを知り、且われらの心われらを責むとも神の前に心を安んずべし。神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給へばなり。愛する者よ、我らが心みづから責むる所なくば、神に向ひて懼なし。且すべて求むる所を神より受くべし。是の誠命を守りて御心にかなふ所を行へばなり。その誠命はこれなり、

即ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命し給ひしごとく互に相愛すべきことなり。神の誠命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給ふ。我らその賜ふところの御霊に由りて其の我らに居給ふことを知るなり。

愛する者よ、凡ての靈を信ずな、その靈の神より出づるか否かを試みよ。多くの偽預言者世に出てたればなり。凡そイエス・キリストの肉體にて來り給ひしことを言ひあらはす靈は神より出づ、なんぢら之によりて神の御霊を知るべし。凡そイエスを言ひ表さぬ靈は神より出てしにあらざ、これは非キリストの靈なり。その來ることは汝ら聞けり、この靈いま既に世にあり。若子よ、汝らは神より出てし者にして既に彼らに勝てり。汝らに居給ふ者は世に居る者よりも大なればなり。彼らは世より出てし者なり、之によりて世の事をかたり、世も亦かれらに聽く。我らは神より出てし者なり。神を知る者は我らに聽き、神より出てぬ者は我らに聽かず。之によりて眞理の靈と迷謬の靈とを知る。

愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は、神より生れ神を知るなり。愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。神の愛

われらに顯れたり。神はその生み給へる獨子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。愛といふは、我ら神を愛せしにあらざ、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり。愛する者よ、斯くのごとく神われらを愛し給ひたれば、我らも亦たがひに相愛すべし。未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。神、御霊を賜ひしに因りて、我ら神に居り神われらに居給ふことを知る。又われら父の子を遣して世の教主となし給ひしを見て、その證をなすなり。凡そイエスを神の子と言ひあらはす者は、神かれに居り、かれ神に居る。我らに對する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給ふ。かく我らの愛完全をえて、審判の日に懼なからしむ。我等この世にありて主の如くなるに因る。愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。我らの愛するは、神まづ我らを愛し給ふによる。人もし「われ神を愛す」と言ひて、その兄弟を憎まば、これ偽者なり。既に見るところの兄弟を愛せぬ者は、

未だ見ぬ神を愛すること能はず。神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし。我等この誠命を神より受けたり。

凡そイエスをキリストと信ずる者は、神より生れたるなり。おほよそ之を生み給ひし神を愛する者は、神より生れたる者をも愛す。我等もし神を愛して、その誠命を行はば、之によりて神の子供を愛することを知る。神の誠命を守るは即ち神を愛するなり、而してその誠命は難からず。おほよそ神より生るる者は世に勝つ、世に勝つ勝利は我らの信仰なり。世に勝つものは誰ぞ、イエスを神の子と信ずる者にあらざや。これ水と血とに由りて來り給ひし者、即ちイエス・キリストなり。營に水のみならず、水と血とをもて來り給ひしなり。證する者は御靈なり。御靈は眞理なればなり。證する者は三つ、御靈と水と血となり。この三つ合ひて一つとなる。我等もし人の證を受けんには、神の證は更に大なり。神の證はその子につきて證し給ひし是なり。神の子を信ずる者はその衷にこの證をもち、神を信ぜぬ者は神を偽者とす。これ神その子につきて證せし證を信ぜぬが故なり。その證はこれなり、神は永遠の生命を我らに賜へり、この生命はその子にあり。御子をもつ者は生命

をもち、神の子をもたぬ者は生命をもたず。

われ神の子の名を信ずる汝らに此等のことを書き贈るは、汝らに自ら永遠の生命を有つことを知らしめん爲なり。我らが神に向ひて確信する所は是なり、即ち御意にかなふ事を求めば、必ず聽き給ふ。かく求むるところ、何事にても聽き給ふと知れば、求めし願を得たる事をも知るなり。人もし其の兄弟の死に至らぬ罪を犯すを見ば、神に求むべし。さらば彼に、死に至らぬ罪を犯す人々に生命を與へ給はん。死に至る罪あり、我これに就きて請ふべしと言はず。凡ての不義は罪なり、されど死に至らぬ罪あり。

凡て神より生れたる者の罪を犯さぬことを我らは知る。神より生れ給ひし者、これを守りたまふ故に、惡しきもの觸るる事をせざるなり。我らは神より出て、全世界は惡しき者に屬するを我らは知る。また神の子すてに來りて我らに眞の者を知る知識を賜ひしを我らは知る。而して我らは眞の者に居り、その子イエス・キリストに居るなり。彼は眞の神にして永遠の生命なり。若子よ、自ら守りて偶像に遠ざかれ。

ヨハネの第一の書 をはり

ヨハネの第二一の書

一 長老、書を選ばれたる婦人および其の子供に贈る。われ眞をもて汝らを受す。言に我のみならず、凡て眞理を知る者はみな汝らを受す。これは我らの衷に止りて永遠に偕にあらんとする眞理に因りてなり。父なる神および父の子イエス・キリストより賜ふ恩恵と憐憫と平安とは、眞と愛との中にて我らと偕にあらん。

二 われ汝の子供のうち、我らが父より誠命を受けし如く、眞理に循ひて歩む者あるを見て甚だ喜べり。婦人よ、われ今なんちに願ふは、我らが互に相愛すべき事なり。これは新しき誠命を書き贈るにあらず、我らが初より有てる誠命なり。彼の誠命に循ひて歩むは即ち愛なり。汝らが初より聞きしごとく、愛に歩むは即ち誠命なり。人を惑すもの多く世にいて、イエス・キリスト

の肉體にて來り給ひしことを言ひ表さず、かかる者は人を惑す者にして、非キリストなり。なんぢら我らが働きたる所を空しくせず、満ち足れる報を得んために自ら心せよ。凡そキリストの教に居らずして、之を越えゆく者は神を有たず。キリストの教に在る者は父と子とを有つなり。人もし此の教を有たずして汝らに來らば、之を家に入るな。安かれと言ふな。之に安かれと言ふ者は、その惡しき行爲に與するなり。

三 我なほ汝らに書き贈ること多くあれど、紙と墨とにてするを好まず、我らの歡喜を充さんために汝等にいたり、顔をあはせて語らんことを望む。選ばれたる汝の姉妹の子供、なんぢに安否を問ふ。

ヨハネの第二一の書 をはり

ヨハネの第三一の書

一 長老、書を愛するガイオ、わが眞をもて愛する者に贈る。

二 愛する者よ、我なんぢが靈魂の榮ゆるごとく汝すべの事に榮え、かつ健かならんことを祈る。兄弟たち來りて汝が眞理を保つこと、即ち眞理に循ひて歩むことを證したれば、われ甚だ喜べり。我には我が子供の眞理に循ひて歩むことを聞くより大なる喜悅はなし。

三 愛する者よ、なんぢ旅人なる兄弟たちにて行ふ所みな忠實をもて爲せり。これら教會の前にて汝の愛につきて證せり。なんぢ神の御意に適ふやうに彼らを見送らば、その行ふところ善からん。彼らは異邦人より何をも受けずして御名のために旅立せり。されば斯かる人を助くべきなり、我らも彼らと共に眞理のために働く者とならん爲なり。

われ曩に聊か教會に書きおくれり。然れど彼らの中に長たらんと欲するデオテレベス我らを受けず。この故に我もし往かば、その行へる業を思ひ出させん。彼は惡しき言をもて我らを罵り、なほ足れりとせずして自ら兄弟たちを接けず、之を接けんとする者をも拒みて教會より逐ひ出す。

二 愛する者よ、惡に效ふな、善にならへ。善をおこなふ者は神より出て、惡をおこなふ者は未だ神を見ざるなり。デメテリオは凡ての人にも眞理にも證せらる。我等もまた證す、なんぢ我らの證の眞なるを知る。

三 我なほ汝に書き贈ること多くあれど、墨と筆とにてするを欲せず、速かに汝を見、たがひに顔をあはせて語らんことを望む。汝に平安あれ。朋友たち安否を問ふ。なんぢ名をさして友たちに安否を問へ。

ヨハネの第三一の書 をはり

ユダの書

一 イエス・キリストの僕にしてヤコブの兄弟なるユダ、  
 書を召されたる者、すなはち父なる神に愛せられ、イエ  
 ス・キリストの爲に守らるる者に贈る。願はくは憐憫と  
 平安と愛と、なんぢらに増さんことを。  
 二 愛する者よ、われ我らが共に與る教につき勵みて  
 汝らに書を贈らんとせしが、聖徒の一たび傳へられたる  
 信仰のために戦はんことを勸むる書を、汝らに贈るを  
 必要と思へり。そは敬虔ならずして我らの神の恩恵を  
 好色に易へ、唯一の主なる我らの主イエス・キリストを  
 否むものども潜り入りたればなり。彼らが此の審判を  
 受くべきことは昔より預じめ録されたり。  
 三 汝らは固より凡ての事を知れど、我さらに汝等をし  
 て思ひ出さしめんとする事あり、即ち主エジプトの地よ  
 り民を救ひ出して、後に信ぜぬ者を亡し給へり。又おの  
 が位を保たずして己が居所を離れたる御使を、大なる日  
 の審判まで、闇黒のうちに長久の繩目をもて看守し給へ  
 り。ソドム、ゴモラ及びその周囲の町々も亦これと同じ  
 く、淫行に耽り、背倫の肉慾に走り、永遠の火の刑罰を

八 うけて鑑とせられたり。かくの如くかの夢見る者どもも  
 肉を汚し、權威ある者を輕んじ、尊き者を罵る。御使の  
 長ミカエル惡魔と論じてモーセの屍體を争ひし時に、敢  
 へて罵りて審かず、唯「ねがはくは主なんぢを戒り給は  
 んことを」と云へり。されど此の人々は知らぬことを罵  
 り、無知の獸のごとく、自然に知る所によりて亡ぶるな  
 り。禍害なるかな、彼らはカインの道にゆき、利のため  
 にバラムの迷に走り、またコラの如き謀反によりて亡び  
 たり。彼らは汝らと共に宴席に與り、その愛餐の暗礁た  
 り、憚らずして自己をやしなふ牧者、風に運はるる水な  
 き雲、枯れて又かれ、根より抜かれたる果なき秋の木、  
 三 おのが恥を湧き出す海のあらし波、さまよふ星なり。  
 四 彼らの爲に暗き闇、とこしへに善へ置かれたり。アダム  
 五 より七代に當るエノク彼らに就きて預言せり。曰く「觀  
 六 よ、主はその聖なる千萬の衆を率ゐて來りたまへり。  
 七 これ凡ての人の審判をなし、すべて敬虔ならぬ者の  
 不敬虔を行ひたる不敬虔の凡ての業と、敬虔ならぬ罪人  
 の、主に逆ひて語りたる凡ての甚だしき言とを責め給は  
 んとてなり」彼らは眩くもの、不満をならす者にして、  
 おのが慾に隨ひて歩み、口に誇をかたり、利のために

人に詔ふなり。

一七 愛する者よ、汝らは我らの主イエス・キリストの  
 使徒たちの預じめ云ひし言を憶えよ。即ち汝らに曰らく  
 一八 「末の時に嘲る者おこり、己が不敬虔なる慾に隨ひて歩  
 一九 まん」と。彼らは分裂をなし、情慾に屬し、御靈を有た  
 二〇 め者なり。されど愛する者よ、なんぢらは己がいと深き  
 二一 信仰の上に徳を建て、聖靈によりて祈り、神の愛のうち  
 二二 に己をまもり、永遠の生命を得るまで我らの主イエス・  
 二三 キリストの憐憫を待て。また彼らの中なる疑ふ者をあは

二四 れみ、或者を火より取出して救ひ、或者をその肉に汚れ  
 二五 たる下衣をも厭ひ、かつ懼れつつ憐れめ。  
 二六 願はくは汝らを守りて願かしめず、瑕なくして榮  
 二七 光の御前に歡喜をもて立つことを得しめ給ふ者。即ち  
 二八 我らの救主なる唯一の神に、榮光・後威・權力・權威、  
 二九 われらの主イエス・キリストに由りて、萬世の前にも  
 三〇 今も萬世までも在らんことを、アマメン。

ユダの書をはり

ヨハネの黙示録

一 これイエス・キリストの黙示なり。即ち、  
 かならず速かに起るべき事を、その僕どもに顯させんと  
 て、神の彼に與へしものなるを、彼その使を僕ヨハネに  
 遣して示し給へるなり。ヨハネは神の言とイエス・キリ  
 ストの證とに就きて、その見しところを悉とく證せり。  
 此の預言の言を讀む者と、之を聽きて其の中に錄された  
 ることを守る者どもとは幸福なり、時近ければなり。  
 二 ヨハネ書をアジャに在る七つの教會に贈る。願はく  
 は今在し、昔在し、後來りたまふ者、および其の御座の  
 前にある七つの靈、また忠實なる證人、死人の中より  
 最先に生れ給ひしもの、地の諸王の君なるイエス・キリ  
 ストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。願は  
 くは我らを受し、その血をもて我らを罪より解放ち、  
 六 われらを其の父なる神のために國民となし祭司となし  
 給へる者に、世々限りなく榮光と權力とあらんことを、  
 アアメン。視よ、彼は雲の中において來りたまふ、諸衆  
 の目、珠に彼を刺したる者これを見ん、かつ地上の諸族  
 七 みな彼の故に歎かん、然り、アアメン。

八 今いまし、昔いまし、後きたり給ふ主なる全能の神  
 いひ給ふ「我はアルバなり、オメガなり」  
 九 汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの艱難と國と  
 忍耐とに與る我ヨハネ、神の言とイエスの證との爲に  
 一〇 パトモスといふ島に在りき。われ主日に御靈に感しむた  
 一 二 るに、我が後にラツバのごとき大なる聲を聞けり。曰く  
 「なんぢの見る所のことを書に錄して、エベソ、スミルナ、  
 一三 ベルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデ  
 一四 キヤに在る七つの教會に贈れ」われ振りて我に語る  
 一五 聲を見んとし、振り見れば七つの金の燈臺あり。また  
 一六 燈臺の間に人の子のごとき者ありて、足まで垂るる衣を  
 一七 著、胸に金の帯を束ね、その頭と頭髪とは白き毛のごと  
 一八 く雪のごとく白く、その目は鏡のごとく、その足は爐に  
 一九 て燒きたる輝ける眞鍮のごとく、その聲は衆の水の聲の  
 二〇 ごとし、その右の手に七つの星を持ち、その口より兩刃  
 二一 の利き劍いて、その顔は烈しく照る日のごとし。我これ  
 二二 を見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり、  
 二三 彼その右の手を我に按きて言ひたまふ「懼るな、我は  
 二四 最先なり、最後なり、活ける者なり、われ曾て死にたり  
 二五 しが、視よ、世々限りなく生く。また死と陰府との鍵を

一 有てり。されば汝が見しことと今あることと、後に成ら  
 二 んとする事とを錄せ。即ち汝が見しところの我が右の  
 三 手にある七つの星と七つの金の燈臺との奧義なり。七つ  
 四 の星は七つの教會の使にして、七つの燈臺は七つの  
 五 教會なり。  
 六 「エベソに在る教會の使に書きおくれ。  
 七 「右の手に七つの星を持つ者七つの金の燈臺の間に  
 八 歩むもの斯く言ふ、われ汝の行爲と勞と忍耐とを知る。  
 九 また汝が惡しき者を忍び得ざること、自ら使徒と稱へ  
 一〇 て使徒にあらぬ者どもを試みて、その虚偽なるを見あら  
 一一 はししこととを知る。なんぢは忍耐を保ち、我が名の  
 一二 ために忍びて倦まざりき。されど我なんぢに責むべき  
 一三 所あり、なんぢは初めの愛を離れたり。さればなんぢ何處  
 一四 より墮ちしかを思へ、悔改めて初の行爲をなせ、然ら  
 一五 ずして若し悔改めずば、我なんぢに到り汝の燈臺を、  
 一六 その處より取除かん。されど汝に取るべき所あり、汝は  
 一七 ニコライ宗の行爲を憎む、我も之を憎むなり。耳ある  
 一八 者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし、勝を得る  
 一九 者には、われ神のバラダイスに在る生命の樹の實を食ふ  
 二〇 ことを許さん」

二一 スミルナに在る教會の使に書きおくれ。  
 二二 「最先にして最後なる者、死人となりて復生しし者  
 二三 かく言ふ、われ汝の艱難と貧窮とを知る——されど汝は  
 二四 富める者なり。我はまた自らユダヤ人と稱へてユダヤ人  
 二五 にあらず、サタンに會に屬する者より汝が誤を受くるを  
 二六 知る。なんぢ受けんとする苦難を懼るな、視よ、惡魔  
 二七 なんぢらを試みんとて、汝らの中の或者を獄に入れん  
 二八 とす。汝ら十日のあひだ患難を受けん、なんぢ死に至る  
 二九 まで忠實なれ、然らば我なんぢに生命の冠冕を與へん。  
 三〇 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし。  
 三一 勝を得るものは第二の死に害はるることなし」  
 三二 「兩刃の利き劍を持つもの斯く言ふ、われ汝の住む  
 三三 ところを知る、彼處にはサタンの座位あり、汝わが名を  
 三四 保ち、わが忠實なる證人アンテパスが、汝等のうち即ち  
 三五 サタンの住む所にて殺されし時も、なほ我を信する信仰  
 三六 を棄てざりき。されど我なんぢに責むべき一二の事あり、  
 三七 汝の中にバラムの教を保つ者どもあり、バラムはバ  
 三八 ラクに教へ、彼をしてイスラエルの子孫の前に贖物を置  
 三九 かしめ、偶像に獻げし物を食はせ、かつ淫行をなさしめ

一五 たり。斯くのごとく汝らの中にもニコライ宗の教を保つ  
 一六 者あり。されば悔改めよ、然らずば我すみやかに汝に  
 一七 到り、わが口の劍にて彼らと戦はん。耳ある者は御霊の  
 一八 諸教會に言ひ給ふことを聴くべし、勝を得る者には我  
 一九 かくれたるマナを與へん、また受くる者の外たれも知ら  
 二〇 ざる新しき名を録したる白き石を與へん」

「目は焰のごとく、足は輝ける眞鍮の如くなる神の

二一 子かく言ふ、われ汝の行爲および汝の愛と信仰と職と  
 二二 忍耐とを知る、又なんぢの初の行爲よりは後の行爲の多  
 二三 きことを知る、されど我なんぢに責むべき所あり、汝は  
 二四 かの自ら預言者と稱へて我が僕を教へ惑し、淫行を  
 二五 なさしめ、偶像に献げし物を食はしむる女イゼベルを  
 二六 容れおけり、我かれに悔改むる機を與ふれど、その淫行  
 二七 を悔改むることを欲せず、視よ、我かれを牀に投げ入れ  
 二八 ん、又かれと共に姦淫を行ふ者も、その行爲を悔改めず  
 二九 ば、大なる患難に投げ入れん、又かれの子供を打ち殺さ  
 三〇 ん、斯くてもろもろの教會は、わが人の腎と心とを究む  
 三一 る者なるを知るべし、我は汝等のおのの行爲に隨ひて  
 三二 報いん、我この他のテアテラの人にして未だかの教を

三五 受けず、所謂サタンの深きところを知らぬ汝らに斯く  
 三六 いふ、我ほかの重を汝らに負はせし、ただ汝等はそ  
 三七 有つところを我が到らん時まで保て、勝を得て終に至る  
 三八 まで我が命ぜしことを守る者には、諸國の民を治むる  
 三九 權威を與へん、彼は鐵の杖をもて之を治め、土の器を碎  
 四〇 くが如くならん、我が父より我が受けたる權威のごと  
 四一 し、我また彼に曙の明星を與へん、耳ある者は御霊の  
 四二 諸教會に言ひ給ふことを聴くべし」

「神の七つの星と七つの星とを持つ者かく言ふ、われ

四三 汝の行爲を知る、汝は生くる名あれど死にたる者なり、  
 四四 なんぢ目を覺し、殆ど死なんとする殘のものを堅うせ  
 四五 よ、我なんぢの行爲のわが神の前に全からぬを見とめた  
 四六 り、されば汝の如何に受けしか、如何に聴きしかを思ひ  
 四七 いて、之を守りて悔改めよ、もし目を覺さずば、盗人の  
 四八 ごとく我きたらん、汝わが何れの時きたるか知らざる  
 四九 べし、されどサルデスにて衣を汚さぬもの數名あり、彼  
 五〇 らは白き衣を着て我とともに歩まん、斯くするに相應し  
 五一 き者なればなり、勝を得る者は斯くのごとく白き衣を  
 五二 著せられん、我その名を生命の書より消し落さず、我が

六 父のまへと御使の前にてその名を言ひあらはさん、耳  
 七 ある者は御霊の諸教會に言ひ給ふことを聴くべし」

「聖なるもの眞なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば

八 閉づる者なく、閉づれば開く者なき者かく言ふ、われ  
 九 汝の行爲を知る、視よ、我なんぢの前に開けたる門を置  
 一〇 く、これを閉ぢ得る者なし、汝すこしの力ありて、我が  
 一一 言を守り、我が名を否まざりき、視よ、我サタンの會  
 一二 すなはち自らユダヤ人と稱へてユダヤ人にあらず、ただ  
 一三 虚偽をいふ者の中より、或者をして汝の足下に來り拜せ  
 一四 しめ、わが汝を愛せしことを知らしめん、汝わが忍耐の  
 一五 言を守りし故に、我なんぢを守りて、地に住む者どもを  
 一六 試むるために全世界に來らんとする試練のときに免れし  
 一七 めん、われ速かに來らん、汝の有つものを守りて、汝の  
 一八 冠冕を人に奪はれざれ、われ勝を得る者を我が神の聖所  
 一九 の柱とせん、彼は再び外に出てざるべし、又かれの上  
 二〇 に、わが神の名および我が神の都、すなはち天より我が  
 二一 神より降る新しきエルサレムの名と、我が新しき名とを  
 二二 書き記さん、耳ある者は御霊の諸教會に言ひ給ふことを  
 二三 聴くべし」

「アアメンたる者、忠實なる眞なる證人、神の造り

二四 給ふものの本源たる者かく言ふ、われ汝の行爲を知る、  
 二五 なんぢは冷かにもあらず熱かにもあらず、我はむしろ  
 二六 汝が冷かならんか、熱からんかを願ふ、かく熱きにも  
 二七 あらず、冷かにもあらず、ただ微温きが故に、我なんぢ  
 二八 を我が口より吐き出さん、なんぢ、我は富めり、豊なり、  
 二九 乏しき所なしと言ひて、己が惱める者、憐むべき者、貧  
 三〇 しき者、盲目なる者、裸なる者たるを知らざれば、我  
 三一 なんぢに勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金を買ひて  
 三二 富め、白き衣を買ひて身に纏ひ、なんぢの裸體の恥を  
 三三 露さざれ、眼薬を買ひて汝の目に塗り、見ることを得  
 三四 よ、凡てわが愛する者は、我これを戒め之を懲す、この  
 三五 故に、なんぢ勸みて悔改めよ、視よ、われ戸の外に立ち  
 三六 て叩く、人もし我が聲を聞きて戸を開かば、我その内に  
 三七 入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん、勝  
 三八 を得る者には我とともに我が座位に坐することを許さ  
 三九 ん、我の勝を得しとき、我が父とともに其の御座に坐し  
 四〇 たるが如し、耳ある者は御霊の諸教會に言ひ給ふことを  
 四一 聴くべし」

一 この後われ見しに、視よ、天に開けたる門あり。初に我に語るを聞きしラツバのごとき聲いふ「ここに登れ、我この後おこるべき事を汝に示さん」直ちに、われ御霊に感ぜしが、視よ、天に御座設けあり。その御座に坐したまふ者あり、その坐し給ふもののは碧玉・赤瑪瑙のごとく、かつ御座の周圍には緑玉のごとき虹ありき。また御座のまはりに二十四の座位ありて、二十四人の長老、白き衣を纏ひ、首に金の冠冕を戴きて、その座位に坐せり。御座より數多の電光と聲と雷霆と出づ。また御座の前に燃えたる七つの燈火あり、これ神の七つの靈なり。御座のまへに水晶に似たる玻璃の海あり。御座の中央と御座の周圍とに四つの活物ありて、前も後も數々の目にて満ちたり。第一の活物は獅子のごとく、第二の活物は牛のごとく、第三の活物は面のかたち人のごとく、第四の活物は飛ぶ鷲のごとし。この四つの活物おのおの六つの翼あり、翼の内も外も數々の目にて満ちたり、日も夜も絶間なく言ふ

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、昔いまし、今いまし、のち來りたまふ主たる全能の神」

一 この活物ら御座に坐し、世々限りなく活きたまふ者に榮光と尊崇とを歸し、感謝する時、二十四人の長老、御座に坐したまふ者のまへに伏し、世々限りなく活きたまふ者を拜し、おのれの冠冕を御座のまへに投げ出して言ふ

「我らの主なる神よ、榮光と尊崇と能力とを受け給ふは宜なり。汝は萬物を造りたまひ、萬物は御意によりて存し、かつ造られたり」

「また御座に坐し給ふ者の右の手に、卷物のあるを見たり。その裏表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる。また大聲に「卷物を開きてその封印を解くに相應しき者は誰ぞ」と呼ばる強き御使を見たり。然るに天にも地にも、地の下にも、卷物を開きて之を見得る者なかりき。卷物を開き、これを見るに相應しき者の見えざりしに因りて、我いたく泣きみたりしに、長老の一人われに言ふ「泣くな、視よ、ユダの族の獅子・ダビデの萌葉、すでに勝を得て卷物とその七つの封印とを開き得るなり」我また御座および四つの活物と長老たちとの間に、屠られたるが如き羔羊の立てるを見たり、之に七つの角と七つの目とあり、この目は全世界に遣されたる

七 神の七つの靈なり。かれ來りて御座に坐したまふ者の右の手より卷物を受けたり。卷物を受けたるとき、四つの活物および二十四人の長老、おのおの立琴と香の満ちたる金の鉢とをもちて、羔羊の前に平伏せり、此の香は聖徒の祈禱なり。かくて新しき歌を謳ひて言ふ

「なんぢは卷物を受け、その封印を解くに相應しきなり、汝は屠られ、その血をもて諸種の族・國語・民・國の中より人々を神のため

に買ひ、之を我らの神のために國民となし、祭司となし給へばなり。彼らは地の上に王となるべし」

二 我また見しに、御座と活物と長老たちとの周圍にをる多くの御使の聲を聞けり。その數、千々萬々にして、大聲にいふ

「屠られ給ひし羔羊こそ、能力と富と智慧と、勢威と尊崇と、榮光と讚美とを受くるに相應しけれ」

三 我また天に、地に、地の下に、海にある萬の造られたる物、また凡てその中にある物の云へるを聞けり。曰く「願はくは御座に坐し給ふものと羔羊とに、

一 讚美と尊崇と榮光と權力と世々限りなくあらん事を」

二 四つの活物はアアメンと言ひ、長老たちは平伏して拜せり。

三 羔羊その七つの封印の一つを解き給ひし時、われ見しに、四つの活物の一つが雷霆のごとき聲して「來れ」と言ふを聞けり。また見しに、視よ、白き馬あり、之に乗るもの弓を持ち、かつ冠冕を與へられ、勝ちて復勝たんとて出てゆけり。

四 第二の封印を解き給ひたれば、第二の活物の「來れ」と言ふを聞けり。かくて赤き馬いで來り、これに乗るもの地より平和を奪ひ取ることと、人をして互に殺さしむる事とを許され、また大なる劍を與へられたり。

五 第三の封印を解き給ひたれば、第三の活物の「來れ」と言ふを聞けり。われ見しに、視よ、黒き馬あり、之に乗るもの手に權衡を持ちてり。かくてわれ四つの活物の間より出づることとを聞けり。曰く「小麦五合は一デナリ、大麥一升五合は一デナリなり、油と葡萄酒とを害ふな」

六 第四の封印を解き給ひたれば、第四の活物の「來れ」





第二の御使ラツバを吹きしに、火にて燃ゆる大なる山の如きもの海に投げ入れられ、海の三分の一血に變じ、海の中の造られたる生命あるものの三分の一死に、船の三分の一滅びたり。

第三の御使ラツバを吹きしに、燈火のごとく燃ゆる大なる星、天より隕ちきたり、川の三分の一と水の源泉との上におちたり。この星の名は苦艾といふ。水の三分の一は苦艾となり、水の苦くなりしに因りて多くの人が死にたり。

第四の御使ラツバを吹きしに、日の三分の一と月の三分の一と星の三分の一と撃たれて、その三分の一は暗くなり、晝も三分の一は光なく、夜も亦おなじ。

また見しに、一つの鷲の中空を飛び、大なる聲して言ふを聞けり。曰く「地に住める者どもは禍害なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな、尙ほかに三人の御使の吹かんとするラツバの聲あるに因りてなり」

第五の御使ラツバを吹きしに、われ一つの星の天より地に隕ちたるを見たり。この星は底なき坑の鍵を與へられたり。かくて底なき坑を開きたれば、大なる爐の煙のごとき煙、坑より立ちのぼり、日も空も坑の

煙にて暗くなれり。煙の中より蝗地上に出でて、地の蟻のもてる力のごとき力を與へられ、地の草すべての青きもの又すべての樹を害ふことなく、ただ人に印なき人のみ害ふことを命ぜられたり。されど彼らを殺すことを許されず、五月のあひだ苦しむることを許さる。その苦痛は蟻に刺されたる苦痛のごとし。このとき人々、死を求むとも見出さず、死なんと欲すとも死は逃げ去るべし。かの蝗の形は戦争の爲に具へたる馬のごとく、頭には金に似たる冠冕の如きものあり、顔は人の顔のごとく、之に女の頭髮のごとき頭髮あり、齒は獅子の齒のごとし。また鐵の胸當のごとき胸當あり、その翼の音は軍車の轟くごとく、多くの馬の戦闘に馳せゆくが如し。また蟻のごとき尾ありて之に刺あり、この尾に五月のあひだ人を害ふ力あり。この蝗に王あり、底なき所の使にして、名をヘブル語にてアバドンと云ひ、ギリシヤ語にてアポロンと云ふ。

第六の御使ラツバを吹きしに、神の前なる金の香壇の四つの角より聲ありて、ラツバを持てる第六の御使に

「大なるユウフラテ川の邊に繋かれをる四人の御使を解放せよ」と言ふを聞けり。かくてその時その日その月その年に至りて、人の三分の一を殺さん爲に備へられたる四人の御使は解放されたり。騎兵の數は二億なり、我々の數を聞けり。われ幻影にてその馬と之に乗る者とを見しに、彼らは火・煙・硫黄の色したる胸當を著く。馬の頭は獅子の頭のごとくにて、その口よりは火と煙と硫黄と出づ。この三つの苦痛、すなはち其の口より出づる火と煙と硫黄とに因りて、人の三分の一殺されたり。馬の力はその口と尾とにあり、その尾は蛇の如くにして頭あり、之をもて人を害ふなり。これらの苦痛にて殺されざりし残の人は、おのが手の業を悔改めずして、なほ悪鬼を拜し、見ることを歩むこと能はぬ。金・銀・銅・石・木の偶像を拜せり、又その殺人・呪術・淫行・竊盜を悔改めざりき。

第七の雷震のおの聲を出せり。七つの雷震の語りし時、われ書き記さんとせしに、天より聲ありて「七つの雷震の語りしことは封じて書き記すな」といふを聞けり。かくて我が見しところの海と地とに跨り立てる御使は、天にむかひて右の手を擧げ、天および其の中に在るもの、地および其の中にあるもの、海および其の中にある物を造り給ひし、世々限りなく生きたまふ者を指し、誓ひて言ふ「この後、時は延ぶることなし。第七の御使の吹かんとするラツバの聲の出づる時に至りて、神の僕なる預言者たちに示し給ひし如く、その奥義は成就せらるべし」かくて我が前に天より聞きし聲のまた我に語りて「なんぢ往きて、海と地とに跨り立てる御使の手にある展きたる巻物を取れ」と言ふを聞けり。われ御使のもとに往きて、小き巻物を我に與へんことを請ひたれば、彼いふ「これを取りて食ひ盡せ、さらば汝の腹苦くならん、然れど其の口には蜜のごとく甘からん」われ御使の手より小き巻物を取りて食ひ盡したれば、口には蜜のごとく甘かりしが、食ひし後わが腹は苦くなれり。また或者われに言ふ「なんぢ再び多くの民・國・國語・王たちに就きて預言すべし」

ここにわれ杖のごとき間竿を與へられたり、かくて或者いふ「立ちて神の聖所と香壇と其處に拜する者どもとを度れ、聖所の外の庭は差捨て度るな、これは異邦人に委ねられたり、彼らは四十二ヶ月のあひだ聖なる都を蹂躪らん。我わが二人の證人に權を與へん、彼らは荒布を著て千二百六十日のあひだ預言すべし。彼らは地の主の御前に立てる二つのオリブの樹、二つの燈臺なり。もし彼らを害はんとする者あらば、火その口より出てその敵を焚き盡さん。もし彼らを害はんとする者あらば、必ず斯くのごとく殺さるべし。彼らは預言するあひだ雨を降らせぬやうに天を閉づる權力あり、また水を血に變らせ、思ふままに幾度にも諸種の苦難をもて地を撃つ權力あり。彼等がその證を終へんとき、底なき所より上る獸ありて之と戰闘をなし、勝ちて之を殺さん。その屍體は大なる都の衢に遣らん。この都を譬へてソドムと云ひ、エジプトと云ふ、即ち彼らの主もまた十字架に釘けられ給ひし所なり。もろもろの民・族・國語・國のもの、三日半の間その屍體を見かつ其の屍體を墓に葬ることを許さざるべし。地に住む者どもは彼らに就きて喜び樂しみ互に禮物を贈らん、

此の二人の預言者は地に住む者を苦しめられたればなり」三日半ののち生命の息、神より出て彼らに入り、かれら足にて起ちたれば、之を見るもの大に懼れたり。天より大なる聲して「ここに昇れ」と言ふを彼ら聞きたれば、雲に乗りて天に昇れり、その敵も之を見たり。このとき大なる地震ありて、都の十分の一は倒れ、地震のために死にしもの七千人にして、遣れる者は懼をいだき天の神に榮光を歸したり。

第二の禍害すぎ去れり、視よ、第三の禍害すみやかに來るなり。

第七の御使ラツバを吹きしに、天に數多の大なる聲ありて

「この世の國は我らの主および其のキリストの國となれり。彼は世々限りなく王たらん」と言ふ。かくて神の前にて座位に坐する二十四人の長老ひれふし神を拜して言ふ、

「今いまし、昔います主たる全能の神よ、なんちの大なる能力を執りて王と成り給ひしことを感謝す。諸國の民怒をいだけり、なんちの怒も亦いたれり、死にたる者を審き、

なんちの僕なる預言者および聖徒、また小なるも大なるも汝の名を畏るる者に報賞をあたへ、地を亡す者を亡したまふ時いたれり」

斯くて天にある神の聖所ひらけ、聖所のうちに契約の櫃見え、數多の電光と聲と雷霆と、また地震と大なる電とありき。

また天に大なる徴見えたり。日著たる女ありて、其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の冠冕あり。かれは孕りをりしが、子を産まんとして産の苦痛と惱とのために叫べり。また天に他の徴見えたり。視よ、大なる赤き龍あり、これに七つの頭と十の角とありて、頭には七つの冠冕あり。その尾は天の星の三分の一を引きて之を地に落せり。龍は子を産まんとする女の前に立ち、産むを待ちて其の子を食ひ盡さんと構へたり。女は男子を産めり、この子は鐵の杖もて諸種の國人を治めん。かれは神の許に、その御座の下に擧げられたり。女は荒野に逃げゆけり、彼處に千二百六十日の間かれが養はるる爲に神の備へ給へる所あり。

かくて天に戰爭おこれり、ミカエル及びその使たち龍とたたかふ。龍もその使たちも之と戦ひしが、勝つ

こと能はず、天には、はや其の居る所なかりき。かの大なる龍、すなはち惡魔と呼ばれ、サタンと呼ばれたる全世界をまどはず古き蛇は落され、地に落され、その使たちも共に落されたり。我また天に大なる聲ありて

「われらの神の教と能力と國と神のキリストの權威とは、今すてに來れり。我らの兄弟を訴へ、夜晝われらの神の前に訴ふるもの落されたり。而して兄弟たちは羔羊の血と己が證の言とによりて勝ち、死に至るまで己が生命を惜まざりき。この故に天および天に住める者よ、よろこべ、地と海とは禍害なるかな、惡魔おのが時の暫時なるを知り、大なる憤恚をいだきて汝等のもとに下りたればなり」

と云ふを聞けり。

かくて龍はおのが地に落されしを見て、男子を生みし女を責めたりしが、女は荒野なる己が處に飛ぶために、大なる鷲の兩の翼を與へられたれば、其處にいたり、一年、二年、また半年のあひだ蛇のまへを離れて養はれたり。蛇はその口より水を川のごとく、女の背後に吐きて之を流さんとしたれど、地は女を助け、

その口を開きて龍の口より吐きたる川を呑み盡せり。龍は女を怒りてその裔の残れるもの、即ち神の誠命を守りイエスの證を有てる者に、戦闘を挑まんとして出てゆき、海邊の砂の上に立てり。

我また一つの獸の海より上るを見たり。之に十の角と七つの頭とあり、その角に十の冠冕あり、頭の上には神を瀆す名あり。わが見し獸は豹に似て、その足は熊のごとく、その口は獅子の口のごとし。龍はこれに己が能力と己が座位と大なる權威とを與へたり。我その頭の一つ傷つけられて死ぬばかりなるを見しが、その死ぬべき傷いやされたれば、全地の者これを怪しみて獸に従へり。また龍おのが權威を獸に與へしによりて、彼ら龍を拜し、且その獸を拜して言ふ「たれか此の獸に等しき者あらん、誰か之と戦ふことを得ん」獸また大言と演言とを語る口を與へられ、四十二ヶ月のあひだ働く權威を與へらる。彼は口をひらきて神を瀆し、又その御名とその幕屋すなはち天に住む者どもとを瀆し、また聖徒に戦闘を挑みて、之に勝つことを許され、且もろもろの族・民・國語・國を掌どる權威を與へらる。凡て地に住む者にて、其の名を屠られ給ひし羔羊

の生命の書に、世の創より記されざる者は、これを拜せん。人もし耳あらば聴くべし。虜にせらるべき者は虜にせられん、劍にて殺す者はおのれも劍にて殺さるべし。聖徒たちの忍耐と信仰とは茲にあり。

我また他の獸の地より上るを見たり。これに羔羊のごとき角二つありて龍のごとくに語り、先の獸の凡ての權威を彼の前にて行ひ、地と地に住む者として死ぬべき傷の醫されたる先の獸を拜せしむ。また大なる徴をおこなひ、人々の前にて火を天より地に降らせ、かの獸の前にて行ふことを許されし徴をもて地に住む者どもを惑し、劍にうたれてなほ生ける獸の像を造ることを地に住む者どもに命じたり。而してその獸の像に息を與へて物言はしめ、且その獸の像を拜せぬ者をことごとく殺さしむる事を許され、また凡ての人をして、大小・貧富・自主・奴隸の別なく、或はその右の手、あるひは其の額に徴章を受けしむ。この徴章を有たぬ凡ての者に賣買することを得ざらしめたり。その徴章は獸の名、もしくは其の名の數字なり。智慧は茲にあり、心ある者は獸の數字を算へよ。獸の數字は人の數字にして、その數字は六百六十六なり。

第一四章

われ見しに、視よ、羔羊シオンの山に立ちたまふ。十四萬四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名記しあり。われ天よりの聲を聞けり、多くの水の音のごとく、大なる雷霆の聲のごとし。わが聞きし此の聲は彈琴者の立琴を弾く音のごとし。かれら新しき歌を御座の前および四つの活物と長老たちとの前にて歌ふ。この歌は地より贖はれたる十四萬四千人の他は誰も學びうる者なかりき。彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何處にまれ羔羊の往き給ふところに隨ふ。彼らは人の中より贖はれて神と羔羊とのために初穂となれり。その口に虚偽なし、彼らは瑕なき者なり。

我また他の御使の中空を飛ぶを見たり。かれは地に住むもの、即ちもろもろの國・族・國語・民に宣傳へんとて、永遠の福音を携へ、大聲にて言ふ「なんぢら神を畏れ、神に榮光を歸せよ。その審判のとき既に至りたればなり。汝ら天と地と海と水の源泉とを造り給ひし者を拜せよ」

ほかの第二の御使、かれに従ひて言ふ「倒れたり、倒れたり。大なるバビロン、己が淫行より出づる憤恚の

葡萄酒をもらもろの國人に飲ませし者」

ほかの第三の御使、かれらに従ひ大聲にて言ふ「も受くる者あらば、必ず神の怒の酒杯に盛りたる混りなき憤恚の葡萄酒を飲み、かつ聖なる御使たち及び羔羊の前にて、火と硫黄とにて苦しめらるべし。その苦痛の煙は世々限りなく立ち昇りて、獸とその像とを拜する者はまた其の名の徴章を受けし者は、夜も晝も休息を得ざらん。神の誠命とイエスを信する信仰とを守る聖徒の忍耐は茲にあり」

我また天より聲ありて「書き記せ「今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり」御霊も言ひたまふ「然り、彼等はその勞役を止めて息まん。その業これに隨ふなり」と言ふを聞けり。

また見しに、視よ、白き雲あり、その雲の上に人の子の如きもの坐して、首には金の冠冕をいただき、手には利き鎌を持ちたまふ。又ほかの御使、聖所より出て、雲のうへに坐したまふ者にむかひ、大聲に呼はりて「なんぢの鎌を入れて刈れ、地の穀物は全く熟し、既に刈り取るべき時至ればなり」と言ふ。かくて雲の上に坐し

たまふ者その録を地に入れたれば、地の穀物は刈り取られたり。

又ほかの御使、天の聖所より出て、同じく利き録を持てり。又ほかの火を掌どる御使、祭壇より出て、利き録をもつ者にむかひ大聲に呼はりて「なんぢの利き録を入れて地の葡萄の樹の房を刈り收めよ、葡萄は既に熟したり」と言ふ。御使その録を地に入れて地の葡萄を刈りをさめ、神の憤恚の大なる酒槽に投げ入れたり。かくて都の外にて酒槽を踐みしに、血酒槽より流れ出て馬の轡に達くほどになり、一千六百町に廣がれり。

第五節

我また天に他の大なる怪しむべき徴を見たり。即ち七人の御使ありて最後の七つの苦難を持てり、神の憤恚は之にて全うせらるるなり。

我また火の混りたる玻璃の海を見しに、獸とその像とその名の数字とに勝ちたる者ども、神の立琴を持ちて玻璃の海の邊に立てり。彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌ひて言ふ

「主なる全能の神よ、なんぢの御業は大なるかな、妙なるかな、萬國の王よ、なんぢの道は義なるかな、眞なるかな、主よ、たれか汝を

畏れざる、誰か御名を奪ばざる、汝のみ聖なり、諸種の國人きたりて御前に拜せん。なんぢの審判は既に現れたればなり」

この後われ見しに、天にある證の幕屋の聖所ひらけて、かの七つの苦難を持てる七人の御使、きよき輝ける亞麻布を着、金の帯を胸に束ねて聖所より出づ。四つの活物の一つ、その七人の御使に、世々限りなく生きたまふ神の憤恚の満ちたる七つの金の鉢を與へしかば、聖所は神の榮光とその権力とより出づる煙にて満ち、七人の御使の七つの苦難の終るまでは、誰も聖所に入ることはざりき。

第六節

我また聖所より大なる聲ありて、七人の御使に「往きて神の憤恚の鉢を地の上に傾けよ」と言ふを聞けり。

かくて第一の者ゆきて其の鉢を地の上に傾けたれば、獸の徴章を有てる人々とその像を拜する人々との身に、悪しき苦しき腫物生じたり。

第二の者その鉢を海の上に傾けたれば、海は死人の血の如くなりて、海にある生物ごとく死にたり。

第三の者その鉢をもちもろの河と、もろもろの水の

源泉との上に傾けたれば、みな血となれり。われ水を掌どる御使の「いま在し昔います聖なる者よ、なんぢの斯く定め給ひしは正しき事なり。彼らは聖徒と預言者との血を流したれば、之に血を飲ませ給ひしは相應しきなり」と云へるを聞けり。我また祭壇の物言ふを聞けり「然り、主なる全能の神よ、なんぢの審判は眞なるかな、義なるかな」と。

第四の者その鉢を太陽の上に傾けたれば、太陽は火をもて人を焼くことを許さる。かくて人々烈しき熱に焼かれて、此等の苦難を掌どる権威を有ちたまふ神の名を演し、かつ悔改めずして神に榮光を歸せざりき。

第五の者その鉢を獸の座位の上に傾けたれば、獸の國暗くなり、その國人痛によりて己の舌を齧み、その痛と腫物とによりて天の神を演し、かつ己が行爲を悔改めざりき。

第六の者その鉢を大なる河ユウフラテの上に傾けたれば、河の水涸れたり。これ日の出づる方より来る王たちの途を備へん爲なり。我また龍の口より、獸の口より、偽預言者の口より、蛙のごとき三つの穢れし靈の出づるを見たり。これは徴をおこなふ惡鬼の靈にして、

全能の神の大なる日の戰闘のために全世界の王たちを集めんとて、その許に出でゆくなり。(視よ、われ盜人のごとく來らん、裸にて歩み羞所を見らるることなからん爲に、目を覺してその衣を守る者は幸福なり) かの三つの靈、王たちをへブル語にてハルマゲドンと稱ふる處に集めたり。

第七の者その鉢を空中に傾けたれば、聖所より御座より大なる聲いて「事すてに成れり」と言ふ。かくて數多の電光と聲と雷露とあり、また大なる地震おこれり、人の地の上に在りし以來かかる大なる地震なかりき。大なる都は三つに裂かれ、諸國の町々は倒れ、大なるバビロンは神の前におもひ出されて、劇しき御怒の葡萄酒を盛りたる酒杯を與へられたり。凡ての島は逃げさり、山は見えずなれり。また天より百斤ほどの大なる雹、人々の上に降りしかば、人々雹の苦難によりて神を演せり。是の苦難甚だしく大なればなり。

七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり、我に語りて言ふ「來れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判を汝に示さん。地の王たちは之と淫をおこなひ、地に住む者らは其の淫行の葡萄酒に酔ひたり」

三 かくてわれ御霊に感じ、御使に携へられて荒野にゆ  
 二 き、緋色の獸に乗れる女を見たり、この獸の體は神を  
 一 演ず名にて覆はれ、また七つの頭と十の角とあり、女は  
 〇 紫色と緋とを著、金・寶石・眞珠にて身を飾り、手には  
 九 憎むべきものと己が淫行の汚とにて満ちたる金の酒杯  
 八 を持ち、額には記されたる名あり。曰く「奥義大なる  
 七 を見るに、聖徒の血とイエスの證人の血とに酔ひたり。  
 六 我これを見て大に怪しみたれば、御使われに言ふ「なに  
 五 ゆゑ怪しむか、我この女と之を乗せたる七つの頭、十の  
 四 角ある獸との奥義を汝に告げん、なんぢの見し獸は  
 三 前に有りしも今あらず、後に底なき所より上りて滅亡に  
 二 往かん、地に住む者にて世の創より其の名を生命の書に  
 一 記されざる者は、獸の前にありて今あらず、後に來るを  
 〇 見て怪しまん、智慧の心は茲にあり。七つの頭は女の  
 九 坐する七つの山なり、また七人の王なり。五人は既に倒  
 八 れて一人は今あり、他の一人は未だ來らず、來らば暫時  
 七 のほど止るべきなり。前にありて今あらぬ獸は第八  
 六 なり、前の七人より出でたる者にして滅亡に往くなり。  
 五 汝の見し十の角は十人の王にして未だ國を受けざれ

三 ども、一時のあひだ獸と共に王のごとき權威を受くべ  
 二 し。彼らは心をつつにして己が能力と權威とを獸にあ  
 一 たふ。彼らは羔羊と戦はん。而して羔羊かれらに勝ち  
 〇 給ふべし。彼は主の王の王なればなり。これと偕な  
 九 る召されたるもの、選ばれたるもの、忠實なる者も勝を  
 八 得べし。御使また我に言ふ「なんぢの見し水、すなはち  
 七 淫婦の坐する處は、もろもろの民・群衆・國・國語  
 六 なる。なんぢの見し十の角と獸とは、かの淫婦を憎み、  
 五 之をして荒涼ばしめ、裸ならしめ、且その肉を喰ひ、火  
 四 をもて之を燒き盡さん。神は彼らに御旨を行ふことと、  
 三 心を一つにすることと、神の御言の成就するまで國を  
 二 獸に與ふることとを思はしめ給ひたればなり。なんぢの  
 一 見し女は地の王たちを宰とる大なる都なり」  
 〇 後また他の一人の御使の大なる權威を  
 九 有ちて天より降るを見しに、地はその榮光によりて照  
 八 されたり。かれ強き聲にて呼はりて言ふ「大なるパピロ  
 七 ンは倒れたり、倒れたり、かつ惡魔の住家、もろもろの  
 六 穢れたる靈の樓、もろもろの穢れたる憎むべき鳥の樓と  
 五 なり。もろもろの國人はその淫行の憤懣の葡萄酒を  
 四 飲み、地の王たちは彼と淫をおこなひ、地の商人らは

三 彼の奢の勢力によりて富みたればなり」  
 二 また天より他の聲あるを聞けり。曰く「わが民よ、  
 一 かれの罪に干らず、彼の苦難を共に受けざらんため、  
 〇 その中を出でよ、かれの罪は積りて天にいたり、神その  
 九 不義を憶え給ひたればなり。彼が爲しし如く彼に爲し、  
 八 その行爲に應じ倍して之に報い、かれが酌み與へし酒杯  
 七 に倍して之に酌み與へよ。かれが自ら尊びみづから奢  
 六 りしと同じほどの苦難と悲歎とを之に與へよ。彼は心の  
 五 うちに「われは女王の位に坐する者にして寡婦にあらず、  
 四 決して悲歎を見ざるべし」と言ふ。この故に、さまざま  
 三 の苦難、一日のうちに彼の身にきたらん、即ち死と悲歎  
 二 と饑饉となり。彼また火にて燒き盡されん、彼を審きた  
 一 まふ主たる神は強ければなり。彼と淫をおこなひ、彼と  
 〇 ともに奢りたる地の王たちは、其の燒かるる煙を見て  
 九 泣きかつ歎き、その苦難を懼れ、遙に立ちて「禍害なる  
 八 かな、禍害なるかな、大なる都、堅固なる都パピロンよ、  
 七 汝の審判は時の間に來れり」と言はん。地の商人かれが  
 六 爲に泣き悲しまん、今より後その商品を買ふ者なければ  
 五 なり。その商品は金・銀・寶石・眞珠・細布・紫色・  
 四 絹・緋色および各様の香木、また象牙のさまざまの器

三 價貴き木、眞鍮・鐵・鑽石などの各様の器、また肉桂・  
 二 香料・香・香油・乳香・葡萄酒・オリブ油・麥粉・  
 一 麥・牛・羊・馬・車・奴隸および人の靈魂なり。なんぢ  
 〇 の靈魂の嗜みたる果物は汝を去り、すべての美味、華美  
 九 なる物は亡びて汝を離れん、今より後これを見ること無  
 八 かるべし。これらの物を商ひ、パピロンに由りて富を得  
 七 たる商人らは、其の苦難を懼れて遙に立ち、泣き悲しみ  
 六 て言はん、「禍害なるかな、禍害なるかな、細布と紫色  
 五 と緋とを著、金・寶石・眞珠をもて身を飾りたる大なる  
 四 都、斯ばかり大なる富の時に荒涼ばんとは」而し  
 三 て凡ての船長、すべて海をわたる人々、舟子および海に  
 二 よりて生活を爲すもの遙に立ち、パピロンの燒かるる煙  
 一 を見て叫び「いづれの都か、この大なる都に比ぶべき」と  
 〇 言はん。彼等また塵をおのが首に被りて泣き悲しみ叫  
 九 びて「禍害なるかな、禍害なるかな、此の大なる都、そ  
 八 の者によりて海に船を有てる人々の富を得たる都、かく  
 七 時の間に荒涼ばんとは」と言はん。天よ、聖徒・使徒・  
 六 預言者よ、この都につきて喜べ、神なんぢらの爲に之を  
 五 審き給ひたればなり」  
 四 ここに一人の強き御使、大なる礪石のごとき石を

三 擡げ海に投げて言ふ「おほいなる都バビロンは斯くのごとく烈しく撃ち倒されて、今より後見えざるべし。今よりのち立琴を弾くもの、樂を奏するもの、笛を吹く者、ラッパを鳴す者の聲なんちの中に聞えず、今より後さまざまの細工をなす細工人なんちの中に見えず、礮臼の音なんちの中に聞えず、今よりのち燈火の光なんちの中に輝かず、今よりのち新郎・新婦の聲なんちの中に聞えざるべし。それは汝の商人は地の大臣となり、諸國の國人はなんちの咒術に惑され、また預言者・聖徒および凡て地のの上に殺されし者の血は、この都の中に見出されなければなり」

一九二 この後われ天に大なる群衆の大聲のごとき者ありて、かく言ふを聞けり。曰く

「ハレルヤ、救と榮光と權力とは、我らの神のものなり。その御審は眞にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給ひしなり」

また再び言ふ「ハレルヤ、彼の燒かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり」ここに二十四人の長老と四つの活物と平伏して御座に坐したまふ神を拜し「アアメン、

五 「ハレルヤ」と言へり。また御座より聲出て言ふ「すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大なるも、我らの神を讃め奉れ」

六 われ大なる群衆の聲おほくの水の音のごとく、烈しき雷霆の聲の如きものを聞けり。曰く

「ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治らすなり。われら喜び樂しみて之に榮光を歸し奉らん。それは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みづから準備したればなり。彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行爲なり」

御使また我に言ふ「なんぢ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり」と。また我に言ふ「これ神の眞の言なり」我その足下に平伏して拜せんとしたれば、彼われに言ふ「慎みて然すな、我は汝およびイエスの證を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんぢ神を拜せよ、イエスの證は即ち預言の靈なり」

我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乗りたまふ者は「忠實また眞」と稱へられ、義をもて審きかつ戦ひたまふ。彼の目は篋のごとく、その頭

二 には多くの冠冕あり、また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。彼は血に染みたる衣を纏へり、その名は「神の言」と稱ふ。天に在る軍勢は白く潔き細布を著、馬に乗りて彼にしたがふ。彼の口より利き劍いづ、之をもて諸國の民をうち、鐵の杖をもて之を治め給はん。また自ら全能の神の烈しき怒の酒樽を踐みたまふ。その衣と股とに「王の王、主の主」と記せる名あり。

二七 我また一人の御使の太陽のなかに立てるを見たり。大聲に呼はりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言ふ「いざ、神の大なる宴席に集ひきたりて、王たちの肉、將校の肉、強き者の肉、馬と之に乗る者との肉、すべての自主および奴隸、小なるもの大なる者の肉を食へ」

二八 我また獸と地の王たちと彼らの軍勢とが相集りて、馬に乗りたまふ者および其の軍勢に對ひて戰闘を挑むを見たり。かくて獸は捕へられ、又その前に不思議を行ひて獸の徽章を受けたる者と、その像を拜する者とを感したる偽預言者も、之とともに捕へられ、二つながら生きたるまま硫黄の燃ゆる火の池に投げ入れられたり。その他の者は馬に乗りたまふ者の口より出づる劍にて殺され、凡ての鳥その肉を食ひて飽きたり。

一九三 我また一人の御使の底なき所の鍵と大なる鎖とを手を持ちて、天より降るを見たり。彼は龍、すなはち惡魔たりサタンたる古き蛇を捕へて、之を千年のあひだ繋ぎおき、底なき所に投げ入れ閉ぢ込めて、その上に封印し、千年の終るまでは諸國の民を惑すことなからしむ。その後、暫時のあひだ解放さるべし。

一九四 我また多くの座位を見しに、之に坐する者あり、審判する權威を與へられたり。我またイエスの證および神の御言のために敵られし者の靈魂、また獸をもその像をも拜せず、己が額あるひは手にその徽章を受けざりし者どもを見たり。彼らは生きかへりて千年の間キリストと共に王となれり。(その他の死人は千年の終るまで生きかへらざりき)これは第一の復活なり。幸福なるかな、聖なるかな、第一の復活に干る人。この人々に對して第二の死は權威を有たず、彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年のあひだ王たるべし。

一九五 千年終りて後サタンは其の權より解放たれ、出でて地の四方の國の民、ゴグとマゴグとを感し戰闘のため之を集めん、その數は海の砂のごとし。かくて彼らは地の全面に上りて、聖徒たちの陣營と愛せられたる都と

〇 を圍みしが、天より火くだりて彼等を焼き盡し、彼らを感したる惡魔は、火と硫黄との池に投げ入れられたり。ここは噓も偽預言者もまた居る所にして、彼らは世々限りなく晝も夜も苦しめらるべし。

二 我また大なる白き御座および之に坐し給ふものを見たり。天も地もその御座の前を遁れて跡だに見えずなりき。我また死にたる者の大なるも小なるも御座の前に立てるを見たり。而して數々の書展かれ、他にまた一つの書ありて展かる、即ち生命の書なり、死人は此等の書に記されたる所の、その行為に隨ひて審かれたり。海はその中にある死人を出し、死も陰府もその中にある死人を出したれば、各自その行為に隨ひて審かれたり。かくて死も陰府も火の池に投げ入れられたり、此の火の池は第二の死なり。すべて生命の書に記されぬ者はみな火の池に投げ入れられたり。

三 我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいて、天より降るを見たり。また大なる聲の御座より出づるを聞けり。曰く

一〇 「視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人の神の民となり、神みづから人と偕に在して、かれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今よりのち死もなく、悲歎も號叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり」かくて御座に坐し給ふもの言ひたまふ「視よ、われ一切のものを新にするなり」また言ひたり「また我に言ひたまふ「事すてに成れり、我はアルバなり、オメガなり、始なり、終なり、渴く者には價なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。されど隠するもの、信ぜぬもの、憎むべきもの、人を殺すもの、淫行のもの、兇術をなすもの、偶像を拜する者および凡て偽る者は、火と硫黄との燃ゆる池にて其の報を受くべし、これ第二の死なり」

二 最後の七つの苦難の満ちたる七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり、我に語りて言ふ「來れ、われ羔羊の妻なる新婦を汝に見せん」御使、御靈に感したる我を携へて大なる高き山にゆき、聖なる都エルサレムの、神の榮光をもて神の許を出でて天より降るを見せたり。

一 一の都の光輝はいと貴き玉のごとく、透徹る碧玉のごとし。此處に大なる高き石垣ありて十二の門あり、門の側らに一人づつ十二の御使あり、門の上一つづつイスラエルの子孫の十二の族の名を記せり。東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門あり。都の石垣には十二の基あり、これに羔羊の十二の使徒の十二の名を記せり。我と語る者は都と門と石垣とを測らん爲に金の間竿を持てり。都は方形にして、その長さ廣さ相均し。彼は間竿にて都を測りしに一千二百町あり、長さ廣さ高さみな相均し。また石垣を測りしに、人の度すなはち御使の度に據れば百四十四尺あり。石垣は碧玉にて築き、都は清らかなる玻璃のごとき純金にて造れり。都の石垣の基はさまざまの寶石にて飾れり。第一の基は碧玉、第二は珊瑚、第三は玉髓、第四は綠玉、第五は紅縞瑪瑙、第六は赤瑪瑙、第七は貴橄欖石、第八は綠柱石、第九は黃玉石、第十は綠玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶なり。十二の門は十二の眞珠なり、おのおのの門は一つの眞珠より成り、都の大路は透徹る玻璃のごとき純金なり。われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊は

三 一の宮なり。都は日月の照すを要せず、神の榮光これを照し、羔羊はその燈火なり。諸國の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が榮光を此處にたづさへきたる。都の門は終日閉ぢず（此處に夜あることなし）人々は諸國の民の榮光と尊貴とを此處にたづさへらん。凡て穢れたる者また憎むべき事と虚偽とを行ふ者は、此處に入らず、羔羊の生命の書に記されたる者のみ此處に入るなり。

四 御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔羊との御座より出て都の大路の眞中を流る。河の左右に生命の樹ありて十二種の實を結び、その實は月毎に生じ、その樹の葉は諸國の民を醫すなり。今よりのち詛はるべき者は一つもなかるべし。神と羔羊との御座は都の中にある。その僕らは之に事へ、且その御座を見ん、その御名は彼らの額にあるべし。今よりのち夜ある事なし、燈火の光をも日の光をも要せず、主なる神かれらを照し給へばなり。彼らは世々限りなく王たるべし。

五 彼また我に言ふ「これらの言は信すべきなり、眞なり、預言者たちの靈魂の神たる主は、速かに起るべき



七 事をその僕どもに示さんとして、御使を遣し給へるなり。  
視よ、われ速かに到らん、この書の預言の言を守る者は幸福なり」

八 これらの事を聞き、かつ見し者は我ヨハネなり。かくて見聞せしとき我これらの事を示したる御使の足下に平伏して拜せんとせしに、かれ言ふ「つつしみて然すな

九 われは汝および汝の兄弟たる預言者、また此の書の言を守る者と等しく僕たるなり、なんぢ神を拜せよ」

一〇 また我に言ふ「この書の預言の言を封ずな、時近ければなり。不義をなす者はいよいよ不義をなし、不浄なる者はいよいよ不浄をなし、義なる者はいよいよ義をおこなひ、清き者はいよいよ清くすべし。視よ、われ報をもて速かに到らん、各人の行爲に隨ひて之を與ふべし。我はアルバなり、オメガなり、最先なり、最後なり、始なり、終なり。おのが衣を洗ふ者は幸福なり、彼らは生命の樹にゆく權威を與へられ、門を通りて都に入ることを得るなり。犬および呪術をなすもの、淫行のもの、人を殺すもの、偶像を拜する者、また凡て虚偽を愛して之を行ふ者は外にあり。」

二一 事

一六 われイエスは我が使を遣して諸教會のために此等のことを汝らに證せり。我はダビデの萌葉また其の高なり、輝ける曙の明星なり」

一七 御霊も新婦もいふ「來りたまへ」聞く者も言へ「きたり給へ」と、渴く者はきたれ、望む者は價なくして生命の水を受けよ。

一八 われ凡てこの書の預言の言を聞く者に證す。もし之に加ふる者あらば、神はこの書に記されたる苦難を彼に加へ給はん。若しこの預言の書の言を省く者あらば、神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき分を省き給はん。

一九 これらの事を證する者いひ給ふ「然り、われ速かに到らん」アアメン、主イエスよ、來りたまへ。

二〇 願はくは主イエスの恩恵なんぢら凡ての者と併に在らんことを。

ヨハネの黙示録 をはり

日本出版文化協會會員登錄番號一三〇九八號

昭和十六年十二月十五日印刷  
昭和十六年十二月廿三日發行

B列6號

201 總クローズ 定價 二圓八十錢

發行者

東京市京橋區銀座四丁目二番地  
日本聖書協會

代表者 松井米太郎

發行所

東京市京橋區銀座四丁目二番地  
日本聖書協會  
神戸市神戸區加納町四丁目五番地

印刷者

東京市小石川區戶崎町九十四番地  
大熊新造

印刷所

東京市小石川區戶崎町九十四番地  
株式會社 大熊整美堂

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

不許複製

(附約新版頁同)

終